

Ⅲ 遺 物

第1次から第8次調査までに出土した遺物は、61,537点^{*1}(第1次 15,100点、第2次 10,137点、第3次 12,829点、第4次 15,153点、第5次 4,050点、第6次 2,385点、第7次 1,702点、第8次 181点)にのぼり、その内訳の比率は、須恵器28.8%、山茶碗(皿)24.8%、土師器(土錘、製塩土器を含む)17.4%、灰釉陶器11.5%、中・近世陶磁器類7.0%、縄文土器1.9%、石器類(砥石を含む)1.4%、弥生土器1.0%、瓦0.8%、そのほか(緑釉陶器、和鏡、鉄製品(釘、刀子、鉄斧、紡錘車など)、鉄滓、フイゴの羽口など)となる。この内、三次元座標で出土位置を記録したものが13.6%(遺構に伴うものを含む)、遺構ごとに一括して取り上げたものが16.0%、そのほかは、グリッド(4m四方)ないしトレンチ単位で取り上げた、表土及び包含層出土の遺物である。

なお、表2掲載出土遺物の「取上番号」では、位置を記録して取り上げたものは明朝体、一括で取り上げたものはゴチック体で示した。また、「遺構・層位」の欄は、取り上げ時の遺構認識を尊重し、出土状況を検証するため、現場で付された遺物カードに記載された文言のとおりとした。

以下、観察の要点と思われる諸特徴を拾いながら概観する。なお図では、細片のため径の推定が困難なものについては、中心の線を破線とした。また、年代観については用管窺天であり、大方の斧正を乞うものである。

1 遺構に伴う遺物

館・厨区域で検出された遺構群は、その重層性や方向が多様であることなど、検討課題が多い。そのため、発掘調査途中では「土坑出土」として取り上げたが、整理段階で柱穴の可能性が考えられるようになったものなど、不確定な要素が含まれている。出土遺構の性格を「柱穴か」と表現したものなどがそれである。依然として、発掘調査によって解決しなければならない課題が多い。

排水路①・土塁上 図55 p.125

須恵器 蓋(1～10) (1～4)は、かえりのある蓋で、(1)は丸みのある体部に宝珠形のつまみが、(2)は直線的な体部に扁平なつまみが付く。(3,4)はつまみを欠く。7世紀末～8世紀前葉。

(5,6)は、口縁端部を下方へ折り曲げるもので、(5)は端部外側に内傾した面を持つ。胎土は暗褐色を呈し、被灰した部分は光沢のある赤茶褐色。ロクロひきの線に沿って朱色の筋が付く。(6)は緩く斜めに曲げ、指ナデにより柔らかな印象のある端部が特徴である。つまみを欠く。(7～10)は、扁平なつまみの付く蓋の天井部片で、(9)は内面が非常に滑らかであり、擦痕と僅かに墨の付着が認められ、つまみの突き出た頂部も滑らか。逆位で用いられたことが明らかな転用硯である。8世紀中葉から後葉。

*1 遺物台帳による(炭化米、鉄滓を除く)。但し、既刊(関市教育委員会 2012『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡Ⅰ－郡庁区域－』Ⅲ 郡庁区域の遺物 p.124)で示した総数に補訂があり、これに連動して内訳(比率)も変動した。

須恵器 坏(11～16) (11)は、かえりのある坏で、型から引き上げた(型起こし)^{*1}と思われる底部の段差が特徴である。7世紀後葉。

(12～14)は、小形の無台坏。共に底部はヘラ起こし。(15)は、扁平な高台の付くコップ形の坏。腰部は丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。9世紀中葉。

(16)は、径約19cmのやや大形の高台付き坏で、腰部の稜線が鋭い。8世紀中葉。

須恵器(17～21) (17)は、台付き壺の底部か。(18)は、鉢。口縁部は楕円形に歪んでいる。外面下半はヘラ削り、上半部はナデで滑らかに内湾させ、口縁端部外側に爪先を当てて僅かにつまみ出している。(19)は、捏鉢。平板状の厚い底部を持ち、底部と底板の側面に串状の工具による刺突がある。

(20)は、双耳瓶。耳部は粘土紐を貼り付けた後、断面四角形に刀子のような利器で鋭く面取りされている。(21)は、高坏の脚部。絞り痕が顕著である。

青磁 碗(22) 蕨手のような文様の一部が見える。

排水路②

須恵器 蓋(23～25) つまみの付く蓋の口縁部片。(23)は、かえりを持つ。7世紀後葉。

(24)は、丸みがあり、端部は角を持たせず丸く曲げ、内側に爪先で強く筋を付けている。8世紀前半。

(25)は、やや偏平で、口縁端部を深く折り曲げ、外側に凹みを持たせている。8世紀中葉。

須恵器 無台坏(26, 27) (26)は、底部をヘラで回転させず一方向に削り整えられている。8世紀中葉～9世紀前葉。

ME6 SD2

須恵器(28, 29) (28)は、無台坏の体部片。(29)は、短頸壺。小形で偏平。胴部中ほどが「く」の字に張る。

ME6 SD3

須恵器 蓋・坏(30～32) (30)は、つまみの付く蓋の口縁部。(31)は、無台坏。(32)の高台の有無は不明。煤か油煙が付着。灯明に転用されたか。

排水路② 図56 p.127

須恵器 甕(33～36) (33～35)は、把手の付く甕。(33)は、平底で、格子目叩き、幅の狭い繊細な同心円当て具痕が密に見られる丁寧な調整。口縁端部外側に面を持つ。把手は剥離痕の位置に(35)を参考にして復元した。(34)は、肩が張り、やや上に把手が付く。平行叩き目を方向を違えて斜めに交差させ、内面は幅の狭い繊細な同心円当て具が密に見られる丁寧な調整。(35)は、器高が幅に対して低く偏平で、胴部は平行叩き目を2度施し斜めに交差させ、幅の広い同心円当て具。口縁部をつまみ上げている。(36)は、やや大きめの甕で、格子叩き目が施されるが、内面に当て具痕はない。8世紀中葉。

*1 ロクロの中心に据えられた窪みのある型(置き台)に粘土を押し当て、そこから体部を引き上げたと考えられる痕跡(以下、「型起こし」と言う)。

排水路①・土塁上、排水路②

須恵器 甕(37) 斜格子の叩き目が施され、それに伴う内面の当て具は彫りが深く、美しい青海波文が現れている。頸部は外反し、口縁端部はつまみ上げられるが、その側面下方に沈線が回る。8世紀中葉。

排水路②の上面 図57 p.129

須恵器 (38) 径の小さい高台が付くが、破片の限りでは平らである。器種不明。

須恵器 蓋・坏 (39~44) (39) は、かえりのある蓋の口縁部片。内面の口縁部まで煤が付着しており、灯明に転用されたものか。7世紀後葉。

(40~42) は、口縁端部を垂下する、つまみの付く蓋。8世紀代。

(43) は、口縁端部に深みがある。9世紀代か。

(44) は、灯明に転用された無台坏で、内面に口縁部まで煤が付着。

須恵器 (45~48) (45) は、短頸壺。8世紀前葉。

(46) は、平瓶。平底で胴部は直線的、肩に稜を持つ。把手は断面方形で、注口の頸部に接する位置から垂直に立ち上がり、取り付けられている。

(47) は、盤で、外側に強く外反する高めの高台が付く。8世紀中葉~後半か。

(48) は、捏鉢で、胴部から剥離した底部。断面楔形の刺突が内面ぎりぎりまで達している。切先のある刀子のような利器によるものである。

土師器 甕 (49) 底部片。外面ハケ目を施すが、底部まではハケは回らない。内面はナデ。底部内外面に指頭圧痕が観察される。長胴甕か。

建物⑭の柱穴 ME6 SK21

須恵器 蓋 (50) つまみの付く、かえりのある蓋。7世紀後葉。

建物⑬の柱穴 ME6 SK12

須恵器 短頸壺 (51) 短頸壺の口縁部片。口縁端部は丸くおさめられている。8世紀前葉か。

須恵器 蓋 (52) つまみの付く蓋で、丸い天井部。肩部に稜を持つが屈曲は僅かで、ナデによる強調。口縁端部は丸くおさめられている。

建物⑮の柱穴 ME6 SK56の上面

須恵器 蓋 (53) つまみが付き、かえりのある蓋。7世紀後葉。

ME6 SK24

須恵器 蓋 (54) 小形でつまみが付き、かえりがある。7世紀後葉。

堀⑧の柱穴 ME6 SK53

須恵器 坏 (55) 無台の坏。胎土が密で、重厚感がある。色調は灰黒色を呈する。体部は開かず上方へ伸びる。8世紀前葉。

ME6 SX3

須恵器 蓋(56, 57) (56)は、小形で乳頭状のつまみが付き、かえりがある。7世紀後葉。

(57)は、大形で偏平。つまみ、口縁部欠損。

土師器 甕(58) 甕の頸部から口縁部。内外面ハケ目。外面のハケは密、内面は疎。口縁端部は工具を当てて面取りされている。つまみ上げは見られない。

ME6 SK18 SD2を切る土坑

須恵器 坏(59) かえりのある坏。口径17.5cmほどに復元できる、この手の坏にしては大形。7世紀前葉。

ME6 SK39 SD2と切り合う土坑

須恵器 高坏(60) 坏部。脚、口縁部欠損。胎土が密で重厚感がある。外面、坏底部から体部の境に沈線を回らせ、体部は内湾させて立ち上げている。6世紀中葉～後葉。

ME6 SK31 SD3を切る土坑

須恵器 高坏(61) 坏部。口縁端部が丸くおさめられた、椀形の坏部。坏底部と体部の境に段差があり、厚みを急に減じていることから、坏部は型起こしの可能性がある。

第3次調査 A地区 Cトレンチ P3 柱穴か 図58 p.131

須恵器 (62～64) (62)は、かえりのある蓋で、宝珠つまみが付く。7世紀後葉。

(63)は、最大径が6.5cmほどに復元される小形で壺形をした胴部から底部片で、内湾して接地面を尖らせた低い高台が付く。器壁をくり抜いたと思われる直径9mmの粘土塊が底面に落ちて融着しており、或いは臙か。(64)は、高台の付く坏部の細片で、内面に漆と思われる赤褐色の付着物が認められる。ただし、割れた断面にも観察されるため、科学分析に拠らねば断定はできない。

A地区 第1トレンチ SK15

土師器 甕(65) 内外面共にハケ目。頸部は「く」の字に屈曲し、端部は外面が少し肥厚するが丸くおさめられている。

ME3 AN1E5 SK1

須恵器 甕(66) 頸部から口縁部。口縁端部は、下方に折り曲げて肥厚させている。頸部外面は、口縁部近くに3条の沈線が回り、その直ぐ下から下向きに、ハケ状工具による筋が付く調整(土師器で言うところのハケ目)が施されているが、その下端は頸部の下から3分の1ほどの高さに回る3条の沈線により消されている。

鍛冶遺構7

須恵器 蓋・坏(67～70, 75) (67, 68)は、かえりのある坏。(67)は、内面全体に、漆か油煙か決しがたい光沢のある黒色や茶褐色の付着物があり、かえりの外側と受け部にまで満遍なく見られる。ただし、外面にはない。油煙であれば、採煤に用いられた可能性がある。(68)は、かえりのある坏で、型起こしによる底部と体部の境目に生じた段差が特徴。床面に伏せた状態で出土した。焼成が不良で

灰白色を呈し器壁が砂ぶくが、特に底面の摩耗が著しく、体部外面には二次被熱によると思われる黒斑が付く。伏せた状態で別の器を支え、その周りで火が焚かれたのではないか。(69)は、かえりのある蓋で、宝珠つまみが付く。7世紀後葉。

(70)は、つまみの付かない蓋で、天井部から口縁部の境に稜を鋭く尖らせた明瞭な肩部を持つ。6世紀中葉(鍛冶遺構7の時期を示すものでない)。

(75)は、無台坏。深身で体部が外反気味に立ち上がる。7世紀後葉～8世紀初頭。

須恵器(72～74, 76) (72, 73)は、高坏で、(72)は、椀形の坏部を持つ。7世紀後葉。

(74)は、甕。

(76)は、短頸壺の口縁部片。7世紀後葉か。

土師器(71) 土師器の口縁部細片。口縁部内側端部寄りに光沢のある黒色の油煙が付着し、煤が口縁端部外側に少し回り込んでいる。灯明に転用されたもの。

井戸状遺構

須恵器(77～83) (77～79)は、扁平なつまみが付き、口縁端部を下方に折り曲げた蓋。(79)は、径22cmの大形品。(80, 81)は、高台坏で、(80)は、径18cmの大形品で転用硯。四角い高台が付くが、外側の底部との間にヘラ状工具を差し入れて窪ませ、側面も面取りされている。底部から体部は稜を持たず丸く緩やかに立ち上がり、口縁端部を外反させて丸くおさめている。佐波理を模倣した「碗」に分類されることもある。高台の内側の特に中央部が非常に滑らかで墨が全体に付着し、高台の裏側にまで達している。高台で筆を整えたのだろう。また、内面も平坦部分が滑らかで擦痕があり、墨が付着している。内面での墨擦りは、複数の硯に墨汁を配るためだったのではないか。(81)は、指でナデ付けられた角高台で、底部と体部の境が稜により明瞭。体部は直線的に「八」の字形に立ち上がり、口縁端部は外反させずに丸くおさめている。8世紀中葉～後葉。

(82)は、無台坏。(83)は、坏の体部片。(84)は、平底の壺の底部。

下水10区 堀⑥の柱穴 図59 p.133

須恵器(85～88)は、坏か高坏で、(85)は、SK14から出土した口縁部細片。(86)は、SK2, 3から出土した椀形の坏部で、口唇部を少し外反させる。(87)は、SK10から出土した高坏。低めの高台に、椀形の坏部。(88)は、堀⑥の柱穴SK10と切り合うSK11から出土した径9.6cmの小形の高台坏で、底部と体部の境に稜を持ち、体部が「八」の字に直線的に立ち上がる。7世紀後葉～8世紀前葉。

下水3区 建物⑨の柱穴

須恵器(89, 90) (89)は、SK23から出土した坏の口縁部細片。(90)は、AN3E9のSK2から出土した高坏の坏部で、底部と体部の境に沈線を持ち、体部は直線的に立ち上がる。7世紀後葉。

下水10区 SK1 柱穴か

須恵器(91, 92) (91)は、ヘラ起こしの無台坏。(92)は、かえりのある坏身。底部は型起こしの特徴を示す。7世紀後葉。

下水10区 SK2 柱穴か

土師器(93) 底部の径36～37cm、高さ40cmほどに復元できる。底部片と口縁部片、胴部数片であるが、敢えて復元を試みた。底部片は外側へ踏ん張るように肥厚して丸くおさまり、筒状か、多孔の底部を持つ大形の甑と思われる。口縁部片は、上方に突起を持ち、口縁(突起部を除く)から下8cm～12cmの位置に、幅3cm～5cmの膨らみがあり、紐状の粘土を弧状に貼り付けた把手の端部と見られる。外面は縦ハケ、内面は口縁端部から下8cmほどまで(突起部を含み)横ハケ、胴部内面はナデ調整である。

須恵器(94) かえりのある坏。7世紀後葉。

下水5区 溝③

須恵器(95) かえりのある坏、口縁部細片。7世紀後葉。

下水1区 SK1

灰釉陶器(96) 皿で転用硯。直線的な皿部に、皿の径に対して小さめの内湾気味に調整された高台が付く。施釉は漬け掛けである。口縁部内面は非常に滑らかで墨が付着し、高台内側も滑らかではないが墨が付着する。底部に「×」印がある。9世紀後半。

下水6区 SK7

土師器(97) 甑の口縁部。内外面ハケ調整。口縁端部に凹みがある。

竪穴建物4 図60 p.135

土師器 甕(98～101) 外面は頸部から下へ縦ハケ、内面は口縁部から頸部に横ハケ調整が施された甕で、(98)は、口縁部径11cm、高さ9.5cmほどの小形。内面下半は強くナデ調整されている。口縁端部はナデにより面取りされている。(99)は、長胴で、口縁端部は丸くおさまられている。内面は頸部から下5～6cmはナデ、下半部はヘラ削り。(100)は、頸部から口縁部の屈曲が強く、口縁端部には凹線がある。(101)の口縁端部は強くナデられ、凹み気味に面取りされている。これらの甕は、口縁端部のつまみ上げは見られないが、いわゆる南勢型の甕の特徴を示している。

竪穴建物5

須恵器(102～104) (102)は、つまみの付かない蓋。(103)は、高坏で、坏底と体部の境に凹みを持ち、体部は直線的に立ち上がる。(104)は、短頸壺。

土師器 甕(105, 106) 口縁端部に工具を当てて、鋭く面取りされている。内面下半の調整が不明だが、いわゆる南勢型の甕の特徴を示している。

竪穴建物4と5は、7世紀中葉～後葉。

竪穴建物5を切る土坑 G4 SX15

須恵器(107, 108) (107)は、口縁部径12cmほどの鉢。底部はヘラ起こし。(108)は、つまみの付く蓋の天井部で、器厚1cmの偏平な大形品。内面が非常に滑らかで墨が付着した転用硯。8世紀代。

土師器 甕(109) 長胴甕か。口縁端部につまみ上げが見られる。いわゆる南勢型の甕の特徴。

竪穴建物5を切るG4 SK52

土鍾(110) 灰白色を呈し、黒斑がある。

竪穴建物5を切る土坑 G4 SX18

須恵器(111) 高坏か盤の脚部。8世紀代。

土師器(112) 甕の口縁部片。口縁端部のつまみ上げと面取りが見られる。

大形竪穴建物①

須恵器(113～118) (113, 114)は、坏の体部片。高台が付くと思われる。(115～118)は、つまみの付く蓋で、(115)は、天井部が丸みを帯びる。(116, 118)は、口縁端部の屈折が緩やか。(117)は、口縁端部に面を持つ。8世紀前半。

土師器 甕(119, 120) (119, 120)は、口縁端部つまみ上げと面取りが見られる。典型的な南勢型の特徴を示している。

その他に大形竪穴建物①からは、精製土師器(暗文) (437, 438)が出土している。

大形竪穴建物② 図61 p.137

須恵器(121～125) (121)は、坏の口縁部細片。(122)は、鉢。8世紀代。

(123)は、かえりのある蓋の口縁部片。7世紀後葉。

(124, 125)は、つまみの付く蓋の口縁部で、(124)は、口縁を下方へ緩く屈曲させる。(125)は、口縁端部をやや肥厚させるが直裁するもの。8世紀代。

土鍾(126) 灰黄色を呈し、黒斑がある。

土師器(127～130) (127)は、小形の甕の下半部。丸底だが底部は平らに近い。外面は縦ハケ調整されるが、底面はおそらく伏せた状態で施されたと見られ、不整方向のハケ目。内面はヘラ削りである。(128)は、平底の甕で、外面ハケ調整。ただし底部には及ばない。内面はナデ調整である。(129, 130)は、甕の口縁部で、外面ハケ調整。内面は口縁部内側のみハケ調整。頸部は「く」の字に外反し、口縁端部に面取りが施されている。

その他に大形竪穴建物②からは、精製土師器(暗文) (439)が出土している。

大形竪穴建物①を切るG1・4 SX16

須恵器 坏(131) 無台坏。底部ヘラ削り。8世紀前葉。

大形竪穴建物②を切るG4 SK33

土師器 甕(132) 口縁端部がつまみ上げられ、面取りはない。外面ハケ、内面はナデ調整である。

建物②

須恵器 壺(133) 7TE SK1から出土した口縁部。

土師器(134, 135) (134)は、G2 SK8から出土した鉢。外面には粗いハケ調整が上半と下半の2段に、底部はおそらく伏せた状態で一方向に施されている。口縁端部に窪ませた面を持つ。須恵器のように鉄鉢を模倣したものか。(135)は、7TW SK4から出土した甕の口縁部。外面ハケ調整。内面は口縁部内側のみハケ調整。頸部は「く」の字に外反し、口縁端部はナデによる面を持つ。

塀② G6 SK60

須恵器 坏(136) かえりがあり、底部は回転ヘラ削りで仕上げが丁寧。7世紀中葉。

建物③ G5 SK58

須恵器 蓋(137) かえりのある口縁部細片。

建物④ G5 SK71

須恵器 蓋(138) かえりのある口縁部。

建物③ G3 SK2, 塀③ G3 SK1

須恵器 短頸壺(139) 肩が張り、口径に対して器高が低い。

塀③ G3 SK1

須恵器 短頸壺(140) 薄手である。

建物⑥ G4 SK37

須恵器 甕(141) 口縁部片。

建物⑤の柱穴か G6 SK61

須恵器 坏(142) かえりのある坏と思われる底部。型で起こされた特徴の段差を外面に残し、内面見込み部は、粘土が押しつけられて凹んでいる。7世紀後葉。

G4 溝①の上面

土師器 甕(143) 口縁端部がつまみ上げられ、面取りはない。外面ハケ、内面はナデ調整である。

その他に溝①の底近くから、精製土師器(暗文)(440)が出土している。

G1 SK38

須恵器 坏(144) 高台の付く小形の坏。底部と体部の境目に沈線が回る。8世紀前葉。

2 包含層出土遺物など

F地区 E9・10列(1) 図62 p.139

須恵器 蓋(145～167) (145～152)は、つまみが付き、かえりのある蓋。小形の(146～152)は、かえりが口縁から少し奥まり、浅い。瓶類の蓋と思われる。7世紀後葉。

(153～167)は、つまみの付く蓋。(153)は、器高が高く、椀形。(154～165, 167)は、口縁端部を折り返す蓋で、(167)を除き、天井部は丸みを持ち、口縁端部の折り返しが緩やかである。(157)は、径24.6cmに復元できる大形。(166)は、径20.5cmに復元できる大形で、口縁部は直裁。8世紀前葉。

須恵器 坏(168～184) (168～172)は、かえりのある坏。(168)は、型で起こした特徴である底部の段差と、見込み部に粘土を押さえ込んだ凹みがある。7世紀後葉。

(173～179)は、高台坏。(175)は、底部ヘラ切りのままである。(176)は、底部が高台より垂れ下がる。(177, 178)は、外側へ踏ん張る形の高台が付き、底部から体部へ丸く緩やかに立ち上がる。

(179)は、高台が底部外側近くに付き、体部は直線的に立ち上がる。

(180～184)は、無台坏。(180)の底部はナデ調整。他は底部をヘラ削りで平らに仕上げた同巧のものである。(184)は、径21cmに復元できる大形の坏。8世紀前葉。

F 地区 E 9・10列(2) 図63 p.141

須恵器 無台坏(185～192) (185, 186)は、口縁内側に煤が付着した灯明に転用された坏。(187, 190)は、底部ヘラ切りのままである。(191)は、器高が高く、体部は外反気味に「八」の字に立ち上がる。(192)は、見込み部が肥厚するため、或いは高坏の坏部か。7世紀後葉～8世紀前葉か。

須恵器 鉢(193～198) (193, 194)は、体部から口縁部片であるが、底部が丸く、器が深く、口縁が窄まる器形から鉢に分類した。(195)は、底部はヘラ削りで平ら、体部は丸く内湾している。(196～198)は、鉄鉢を模したものである。

須恵器(199) 小さな高台に丸い体部。瓶子の底部か。

須恵器 高坏(200～202) (200)は、高坏の坏部片。

(201)は、四方透かし。7世紀中葉か。

(202)は、盤の脚部か。

須恵器 瓶(203, 204) (203)は、なで肩の長頸瓶の胴部か。(204)は、胴が細身の瓶の底部か。8世紀中葉か。

須恵器 短頸壺(205, 206) (205)は、底部ヘラ切りのまま。胴部と頸部の境に凹みがある。(206)の底部は内面押圧、外面ナデにより調整。内面の胴部が屈曲する位置から水平に下へ2cm幅で、暗茶褐色の付着物がある。漆の容器か。

須恵器 平瓶(207) 肩が張るが、胴部や天井部が丸い。素直に「八」の字に立ち上がる頸部は口唇部をやや外反させている。8世紀前葉。

須恵器 瓶(208, 209) 同一個体と見られる。(208)は胴部で、胴部の最大幅を測る高さに2条の沈線と、そこから6cmほど間を空けて下に幅7mmの凹線が回る。(209)は底部で、鋭く切り取られた筒形の胴部に円盤状の粘土を充填して、外面からの押圧により密着させ、内面は体部と共にナデで仕上げている。下端から3cmほどに1条、そこから6cmほど間を空けて上に2条の凹線を回らせている。通途の瓶の作りとは異なる。或いは経筒の外容器か。11世紀か。

F 地区 E 9・10列(3) 図64 p.143

須恵器(210～216) (210)は、把手付中空(円面)硯。底の厚い坏のような丸い体部に径1.4cmの穿孔があり、そこに注口状のU字形の把手が底部から丁寧な調整でナデ付けられている。手元の形状は判らない。坏形の口縁部に当たる部分が折り返され海^{*1}となり、その先は少し立ち上がって平らな陸^{*2}になっていたと思われる。体部の穿孔は焼成のための便宜でもあるが、硯と共に水も携帯できたと考えられる。なお、体部に幅1.9cmの剥離痕があり、側面に筆を立てるための突起が付けられていた可能性がある。(211)は、壺の口縁部。(212)は、把手(四耳か)が付く甕。(213)は、瓶の底部。外側へ踏ん張る高台が付き、胴部下方にハケ状工具の連続刺突で2条の文様帯を回らせている。内面は底部から胴部の境目で粘土の継ぎ足しが顕著で器胎が厚く、叩き締めた痕が残るが、焼き膨れが生じている。

*1 硯の部位。水を受ける部分は「海」、墨を擦る部分は「陸」(おか)と呼ばれる。

*2 把手の手元が閉じ、提げるための紐が付く例が知られている。

(214)は、甕の口縁部。頸部口縁寄りに1本線の波状文とその下に凹線が回る。(215)は、把手付きの鉢。(216)は、鉢の底部。

土師器 甕(217, 218) (217)は、小形の甕。外面ハケ目、内面には見られない。口縁端部に平らな面を持つ。(218)は、外面頸部より下と内面口縁部のみハケ調整。頸部から「く」の字に外反させ、口縁端部にナデによる凹みがあり、つまみ上げている。

灰釉陶器(219, 220) (219)は、なで肩の短頸壺。(220)は、外反する三角高台が付く大形品で、鉢に分類した。

白磁 碗(221) 乳白色の釉薬で、気泡による微小穴が目立つ。薄手で口縁端部を外方へ引き出している。

青磁 碗(222) 蓮弁文の碗の口縁部。

F地区 E9・10列(4) 図65 p.145

須恵器 横瓶(223～226) (223)は、外面は縄目の叩き、内面は同心円当て具痕が残る。塞いだ側面はハケ状の工具で調整されている。(224)は、外面格子目叩きで、内面は弧の大きい青海波文が残る。塞いだ側面はヘラ状の工具で調整されている。(225, 226)は、同一個体と思われる。(225)は、頸部から口縁部。(226)は、胴部である。よく叩き締められているが、内面の焼き膨れが著しい。灰白色を呈し、黒色粒が目立つ。8世紀中葉か。

須恵器 甕(227～229) (227)は、肩が張り、頸部から口縁部は緩やかに「く」の字に屈曲する。外面に斜格子の叩き目を残すが、内面に当て具の痕はない。(228)は、口縁部径約35cm、胴部の最大径約49cmを測る大形の長頸甕で、頸部はラッパ状に開き、口唇部を外方へ引きながら、下方に肥厚させ段を成す。口縁部から下へ、2条の凹線により幅約3cmで3つに区切られた帯の中に、幅2.5cmの櫛状工具の刺突による縦方向の列点が8～9mmの間隔で几帳面に施された文様帯を持つ。胴部外面は縦方向を主体とした平行の叩き目を残すが、内面に当て具の痕はない。(229)は、少しなで肩の四耳甕で、頸部は緩やかに「く」の字に屈曲させるが、口唇部を外方へ引き、端部を上方へ引き上げている。外面は斜め方向を主体とした平行叩き目、内面は繊細な同心円当て具の青海波文を残す。8世紀中葉か。

その他に、F地区のE9・10列からは、鉄製紡錘車(466)、鉄釘(468)、砥石(471)が出土している。

F地区 E9N2～4 図66 p.147

須恵器(230～234, 236, 237) (230)は、高坏の口縁部が丸くおさまる浅い皿状の坏部と脚の上半部。脚の付け根は細身で直線的、沈線が回る位置で欠損している。(231)は、つまみが付き、かえりのある小形の蓋。(232)は、高坏の坏部と思われる。(233)は、甕。胴部に「×」印がある。7世紀中葉～後葉。

(234)は、つまみの付く蓋で、口縁端部が直裁である。(236)は、短頸壺で、胴部に3条の凹線が回る。8世紀中葉。

(237)は、椀形の坏部を持つ高坏。7世紀後葉。

土師器(235) 平安土師器と呼んでいるロクロ成形の坏。内湾気味の三角高台が付き、底面の糸切り痕はナデ消されている。

F 地区 E 5～8 列

須恵器(238～246) (238, 239)は、つまみが付き、かえりのある小形の蓋。(240)は、つまみが付き、かえりのある蓋だが、天井部が直線的でかえりが浅く、外面中ほどに幅1cmの2条の圈線の間に、櫛状工具による押し引き文様がある。暗灰色を呈し、胎土が緻密で重厚感がある。7世紀後葉。

(241)は、口縁端部を折り返す、つまみの付く蓋。内面に墨書があるが判読できない。8世紀代。

(242, 243)は、高坏の椀形の坏部と器高の低い脚部。(244)は、無台坏。ヘラ切りの失敗か、底部に粘土を継ぎ足している。(245)は、長頸瓶の肩部と思われる。肩の稜線の直ぐ下と、2cm下に回らされた凹線の間に、櫛状工具による波状文が施されている。(246)は、壺の底部。小形の短頸壺か。底部に網代の圧痕がある。

土師器(247～249) (247)は、甑の口縁部。(248)は、把手付きの甕。内面がヘラ削り調整である。(249)は、小形の甕。

第1トレンチ・E 1列 図67 p.149

須恵器 蓋(250) 口縁部片。天井部と口縁部の境につまみ出された突線が回り、その境が明瞭。6世紀中葉～後葉。

須恵器 無台坏(251～256) (251, 252)は、底部が丸みを帯び、体部が直線的に「八」の字に開くもの。(252)は、ヘラ切りの痕を残す。8世紀前葉。

(253～256)は、底部が平らで、全て底部はヘラ切りの痕を残すが、(255)は、ヘラ切り後に、ヘラで削って滑らかに調整している。(256)は薄手で、灯明に転用されたもの。内外面の一致する口縁部に油煙が付着しており、灯芯を掛けていた箇所がわかる。8世紀前葉。

土師器(257) 灯明に転用された平安土師器の碗か皿の口縁部片。口縁部の内外に油煙が付着。

須恵器 高台坏(258) 器高に対して径が大きめで、浅い印象を受ける。8世紀後葉か。

須恵器 盤(259) 脚付き盤の脚部。十字形の透かしがある。8世紀中葉か。

須恵器 短頸壺(260～262) 何れも小形で、口縁部を丸くおさめている。(260, 261)は、頸部と胴部の境が明瞭。(261)は、口縁部近くに沈線が回る。8世紀前葉か。

須恵器 甕(263) 底部から注口までの破片。丸底で、型起こしの段差がある。7世紀中葉か。

須恵器 高坏(264～267) (264)は、脚端部が屈曲し、内面に絞り痕を残す。坏部は丸く、見込み部に焼き膨れが生じている。7世紀後葉か。

(265)は、坏部片。口縁部をやや外反させている。

(266, 267)は、脚部で、(266)は接地面が広く、端部を直裁し、3方に透かしを持つ。8世紀後葉か。

(267)は、開きが大きく、瓦器のような焼き上がりで、胎土は灰白色、表面は内外面共に黒灰色を呈する。

須恵器 盤(268) 大形で、径が25.5cmほどに復元できる。底部は平らで厚さ18mmを測り、重厚感がある。焼成は不良で灰白色を呈し、軟質で表面が砂吹いている。

須恵器 甕(269, 270) (269)は、肩部から口縁部片。胎土が赤褐色を呈し、強めの平行叩きで、内面の当て具痕はナデ消されている。(270)は、縄目の叩きで、内面の当て具痕はナデ消されている。口縁は水平に外方へ引いた後、外反気味に斜め上方に立ち上げ、端部に面を持つ。8世前葉～中葉か。

灰釉陶器 碗(271) 底部片。端部の丸い三角高台が、体部側に取り付けられている。9世紀後半。

下水1区 図68 p.151

須恵器(272, 273) (272)は、高台坏で転用硯。ヘラ切りの底部に低い高台が付く。底部と坏部は境目がなく丸い。内外面共に墨が付着し、滑らか。転用する際、意図的に体部を打ち欠いたと思われる。(273)は、鉄鉢形の鉢。

(274)は、須恵器の碗であるが、高台は須恵器の、体部から口縁部は灰釉陶器の形である。須恵器から灰釉陶器への過渡期的製品。胎土は灰白色を呈し、内面には自然の被灰が見られる。視点を後者に置けば、原初的な灰釉陶器と言える。9世紀中葉か。

土師器(275, 276) (275)は鍋で、蓋の受け部と思われる部分の破片。外面に、指先の強い押圧による窪みの列が2条回るが、窪みの位置が上下で重ならないように違いに配されている。(276)は、甕の口縁部片。中世。

下水2区

須恵器(277, 278) (277)は、坏部片。8世紀代。

(278)は、高坏脚部。脚部内面は、強い絞りの螺旋文を残し、脚端部を強く屈曲させている。7世紀後葉。

下水3区

須恵器 高坏(279, 280) 坏部の底部で、(279)は、底部から体部の境目に段を持ち、(280)は、丸い。7世紀後葉。

下水4区

須恵器(281, 282, 284) (281)は、短頸壺。頸部に2条、肩部に3条の沈線が回る。(282)は、瓶類の高台部。(284)は、高台坏。高台の内側に、「成」の墨書がある。

土師器 甕(283) 甕の胴下半部。外面ハケ、内面ナデ調整。

下水5区

須恵器(285～288) (285, 286)は、つまみの付く蓋片。(286)は、転用硯。内面が非常に滑らかで墨が付着している。(287)は、高台坏で、底部中央が垂れ下がる特徴が活かされた転用硯。裏返して硯として使用したとき、円面硯の陸・海部のような使い勝手が得られたと思われる。(288)は、瓶の口縁部片。

下水6区

須恵器(289～292) (289)は、つまみが付き、口縁端部を折り返す蓋の口縁部片。内面がやや滑らかで、墨が付着する転用硯。8世紀代。

(290)は、かえりのある無台坏。底部に型起こしの特徴を持ち厚い。7世紀後葉。

(291)は、高台坏底部片。8世紀代。

(292)は、底部が平らに調整された無台坏。7世紀後葉～8世紀前葉。

須恵器(293) 小形の瓶の肩部。

須恵器 甕(294) 肩部から口縁部片。外面、平行叩き。内面、青海波文。

土師器 甕(295, 296) (295)は、「く」の字頸部で口縁端部に面を持つ。外面ヘラ削り、内面ナデ調整。
(296)は、(295)に形は似るが、小形で外面ハケ、内面頸部までハケ、胴部ナデ調整。

下水7区・AS1E5 図69 p.153

須恵器 無台坏(297～300) (297, 298)は、底部ヘラ切りのまま。(299, 300)の底部はヘラ削りで調整されている。8世紀前葉。

土師器(301) 平安土師器と呼んでいるロクロ成形で高台のない碗か皿。

須恵器 蓋(302～304) (302)は、つまみが付き、かえりがある。7世紀後半。

(303)は、宝珠つまみが付くが、かえりの有無は不詳。

(304)は、偏平なつまみが付き、口縁端部が折り返される。8世紀後葉か。

須恵器(305～307) (305)は、高台部のみで、高台の取り付く範囲の底部は平らである。台付きの壺か。(306)は、横瓶の口縁部。

(307)は、丸い坏部を持つ高坏。脚部中ほどに1条の凹線が回る。7世紀後葉か。

下水8区

須恵器(308～311) (308, 309)は、短頸壺の肩部から口縁部片。

(310)は、かえりのある坏部を持つ高坏。焼成やや不良で、胎土は灰白色、表面は暗灰色を呈する。7世紀後半。

(311)は、甕。外面は斜格子叩き、内面は青海波文。

土師器 甕(312) 頸部から口縁部片で、口縁端部が少しつまみ上げられている。残存する部分にはハケ調整は見られない。

下水9区

須恵器(313～316) (313)は、小形で宝珠つまみが付く蓋。かえりの有無は不詳。

(314)は、かえりのある坏。7世紀後半。

(315)は、平瓶の胴部。肩は張るが丸みを帯び、頂部が尖った断面5角形の把手が付く。頸部は、反転復元。8世紀中葉か。

(316)は、鉄鉢形の鉢。

下水10区

須恵器 蓋(317) つまみが付き、かえりがある。7世紀後葉。

須恵器 無台坏(318, 319) (318)は、底部に型起こしの段がある。体部が丸く碗形である。8世紀前葉。

(319)は、丸い底部を持つ。底部は回転ヘラ削りにより丁寧に調整されており、体部との境目も両

側からヘラが当てられ、稜を成し、体部は、直線的に立ち上がる。8世紀後葉か。

須恵器 高坏(320～322) 何れも脚部片で、透かしの有無は不詳。(320)は、脚端部を肥厚させ、(321)は、脚端部外側にヘラによる沈線が回り、(322)は、脚端部外側を凹ませながら、下方へ屈曲させている。

須恵器 壺(323) 胴部の径7.5cmほどに復元される小形で、底部は丸く口縁部は緩やかに朝顔形に開くが、全体の形は不明。灰白色を呈し、ロクロひきの泥縞を表す。

土師器(324) 台付甕の台部片。内外面に動作が細かいハケ調整痕がある。古墳時代初頭。

G地区 図70 p.155

須恵器 蓋・坏(325, 329) (325)は、型起こしの特徴を示す蓋で、外面の中ほどから口縁部まで煤が付着しており、底部は摩耗している。伏せた状態で2次的に被熱したと思われる。他の器の支えに使用したものか。(329)は、かえりのある坏。6世紀前半。

須恵器 蓋(326～328) (326, 327)は、偏平なつまみが付き、口縁端部を折り返すもの。8世紀中葉。(328)は、口縁部細片。推定径30cmほどの大形品である。

須恵器 坏(330, 331) (330)は、口縁部細片。内面に分厚く煤が付着しており、灯明に転用されたか、或いは採煤用。(331)は、高台が付き、底部と体部の境目は緩やかで、ロクロひきの泥縞を表す。8世紀代。

須恵器(332, 333) (332)は、壺の肩部から口縁部片。(333)は、瓶の高台部。8世紀代後半か。

須恵器(334) 厚手の鉢の口縁部片。

須恵器 横瓶(335, 336) (335)は、内外面ナデ調整。(336)は、外面斜格子叩き、内面青海波文。

須恵器 高坏(337) 脚端部を折り返し接地点を尖らせている。焼成不良で黄白色を呈し、器壁が砂吹く。

土師器 甕(338) 肩部から口縁部片。頸部は「く」の字に強く外反させ、端部は丸くおさめられている。外面と内面は頸部までハケ調整。

灰釉陶器 碗(339) 外反する高台が付き、釉薬は外面の口辺部から内面の体部のみに施されている。9世紀後半。

第9・10トレンチ(1)

須恵器 蓋(340～343) (340)は、小さな丸みのある宝珠形のつまみが付く。7世紀後葉。

(341～343)は、偏平なつまみが付く。(343)は、内面が滑らかで墨が付着する転用硯である。8世紀代。

須恵器 坏(344～346) (344)は、高台付き、底部と体部の境目に工具を当て、鋭く稜を成す。8世紀代。

(345, 346)は、無台坏。(345)は、底部ヘラ切り。(346)は、底部ヘラ削り。8世紀前葉。

須恵器 鉢(347, 350) (347)は、鉄鉢形の鉢の底部。(350)は、厚手の鉢の口縁部片。

須恵器 盤(348, 349) 推定径29cm、33cmほどの大形の平らな盤の細片。(348)は、縁を直角に屈曲させ端部を立ち上げている。(349)は、底部から丸く立ち上げ、端部を僅かに外反させている。8世紀中葉か。

第9・10トレンチ(2) 図71 p.157

灰釉陶器 碗か皿(351, 352) (351)は、細く内湾する高台。(352)の底部は糸切り痕を残す。9世紀後葉。

緑釉陶器(353) 輪花碗の口縁部細片。

山茶碗(354, 355) (354)は、小さい高台が付き、見込み部に指頭圧痕がある。高台内側に墨書があるが判読できない。(355)は、小形だが、高台が付くことから碗に分類した。13世紀後半。

黄瀬戸(356) 画花文が施された瓶子の底部から胴部。淡い黄緑色に発色した釉薬が文様を浮き立たせている。

第13・14Tトレンチ

SD1

須恵器(357) 無台坏の底部。

SD3

須恵器(358) 無台坏。

建物⑩の柱穴 ME7 SK18

須恵器(359) 甗の口縁部と思われる。外面はハケ状の工具で調整。口縁部下に凹線が回る。焼成不良で黄白色を呈し、器表が砂吹いている。

鍛冶遺構8の上面

須恵器 蓋(360) 僅かなかえりのある口縁部片。

土師器 甕(361) 頸部から口縁部片。7世紀後葉。

第13・14トレンチ 包含層

須恵器 蓋(362～369) (362)は、かえりがあり、天井部と口唇部の境が沈線により明瞭。つまみの有無は不詳。(363)は、深いかえりがあり、坏の可能性もあるが非常に薄手であり、ここでは蓋に分類した。7世紀前葉か。

(364～367)は、かえりがあり、おそらくつまみの付くもの。7世紀後葉。

(368, 369)は、偏平なつまみが付き、口縁端部を折り返すもの。8世紀代。

須恵器 坏(370～373, 375) (370, 371)は、高台坏。(372)は、無台坏の底部で、ヘラ切り。

(373)は、無台坏で、底部は回転ヘラ削り。底部と体部の境目に稜を持ち、体部はやや外反しながら立ち上がる。9世紀前半か。

(375)は、無台坏の口縁部細片。

須恵器 鉢(374, 376) (374)は、底部細片。体部が「八」の字形に開く鉢か。(376)は、胴部が丸い鉢の口縁部。

須恵器(377) 瓶の口縁部。

須恵器(378) 小形の甕の胴部片。7世紀後葉。

須恵器 高坏(379, 380) (379)は、坏部片。坏底部は平らで、体部の境目に沈線が回り、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。7世紀後葉。

(380)は、脚部片。

須恵器(381) 壺の口縁部細片。口縁端部から粘土を折り返し、内側へ肥厚させている。灰色を呈する。

弥勒寺南地区 図72 p.159

MT SK15

須恵器(382～384) (382)は、高台坏。8世紀代。

(383)は、碗。高台の下面が凹み(いわゆる蛇の目高台)、体部は丸く、口縁部を外反させている。灰白色を呈する。9世紀後半か。

(384)は、盤。坏部は直線的で、口縁端部は直裁されている。9世紀前半。

MT SK1

灰釉陶器 碗(385) 三日月高台で、釉薬は、口縁部漬け掛け。9世紀後葉～10世紀前葉。

MT SK11

山茶碗(386) 細く小さな高台で、見込み部には指頭圧痕がある。高台の内側に墨書がある。「十」か「×」か。14世紀前葉。

MT SD1

須恵器 蹄脚^{*1}硯(387) 偏平な板状の底部に脚部の剥離痕がある。その外縁が丸くなっており、脚と脚の間に棒状の工具を差し入れて整えられている。

MT SX1

土師器(平安)(388～390) (388)は碗で、糸切り底はナデ消され、体部側に高台を付けている。10世紀前葉か。

(389, 390)は、灯明皿として使用されたもの。(389)は、細く絞った底部に糸切り痕を残す。灯芯が掛かっていた箇所内外面に油煙が付着している。(390)は、無台の碗か皿。糸切り痕を残す。

灰釉陶器(391, 392) (391)は輪花碗で、角高台が付き、釉薬の漬け掛けが明瞭に観察できる。(392)は、灯明皿として使用されたもの。糸切り痕を残し、体部寄りに高台が付く。釉薬は口縁部漬け掛け。口縁部の一致する内外面に煤が付着しており、灯芯の掛けられた箇所がわかる。高台の内側に「大□」、見込み部に「大□[寺カ]」の墨書がある。10世紀前葉か。

*1 関市教育委員会 2012『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡Ⅰ－郡庁区域－』(p.183)では、円面硯を27個体に整理していたが、これを加え合計28個体に改める。なお、(210)の把手付中空(円面)硯を加えれば、専用硯は29個体となる。

弥勒寺南地区 包含層(1)

須恵器 碗(393) 灯明に転用された碗の口縁部細片。

灰釉陶器(394) 内湾する三日月形の高台が付く碗か皿の底部片。内面滑らかで朱墨が付着。高台内側にも墨が付着している両面転用硯。

MT SX1の上面

鉄釘(395～397) 何れも断面が、一辺8mmほどの四角形。長さは、先端が残る(395)で13.5cm、(396)で14.4cmを測り、現代の5寸釘に近い大形の釘。頭は偏平にして、90°以上(やや下方に向くぐらい)折り曲げられている。(395, 396)には、木質が付着している。状態が良く、何れも強く磁着する。近世以降のものか。少なくとも古代の釘とは認定しがたい。

弥勒寺南地区 包含層(2) 図73 p.161

須恵器 大形の鉢と特殊な器台(398, 399) (398)は、口縁部径53cmほどに復元できる大形の鉢の、やや外反する口縁部片。口縁端部から5cmほど内側で、垂直方向に体部を貫通する径1.3cmの焼成前の穿孔がある。

(399)の実測図は、それぞれの破片(399-1～3)を示し、それらを組み合わせた(399 復元)を作成した。また、それに基づき取えて復元を試みた(表紙の写真)。径41cm、高さ26.5cmほどに復元できる筒形で、厚い円盤状の底部を持ち、胴部に3条の(円筒埴輪で言うところの)タガ状の突帯が回り、それによって区切られた上段と下段に、位置が互い違いになるように約10cmの間隔で配された縦方向の透かしが開けられている。タガは全周せず、上下の一致する位置で途切れる箇所があり、それらを結んで垂下した位置の円盤状に張り出した底部にも貫通する孔がある。この位置には、タガとタガを縦に結ぶ幅7mmのヒレ状の断面長方形の粘土が右側にのみ貼り付けられている。

(398)の鉢と(399)の特殊な器台は、鉢に開けられた孔と器台のタガの隙間及び底部の孔を1本の棒で貫き、組み合わされて使用された蓋然性がある。日常の什器ではないことは明らかであり、出土位置が「弥勒寺」の伽藍の前であることから、何らかの儀式や祭礼^{*1}に用いられたものではないだろうか。

A・F地区 精製土師器(1) 図74 p.163

精製土師器(暗文)(400～424) 非常に緻密な胎土で、丁寧にミガキ調整され、暗文が施された土師器。暗文が確認できる精製土師器は、現在144点を数えるが、その多くは畿内産と思われる。

(400)は、口縁が丸くおさめられている。(401, 402)は、口縁端部に内傾する面を持つ。(403)は、やや深めで、口縁は丸くおさめられている。(404)は、体部の中ほどが、やや外反し、内面2段に暗文が施されている。(405)は、口縁部をやや外反させ、端部は丸くおさめられている。

*1 盟神探湯(くがたち)=正邪を判別する呪術的裁判法や灌仏会(かんぶつえ)=花会式(はなえしき)、花祭りなどの別称もある
釈迦の誕生を祝う仏教行事などが想像される。湯を満たす器や甘茶を受ける器とそれを受ける台を想定。

(406～410, 412, 413)は、口縁端部を内側を丸く肥厚させている。(404～407)は、高台の付く坏の可能性ある。(411, 412)は碗で、(412)の内面は、底面に螺旋、体部下半に放射状、口縁部寄りに連弧状の暗文が施されている。(413)の放射状暗文は、左上方にはね上げられている。(414～418)は、暗文が認められる体部片で、(417, 418)は線の間隔が狭く、緻密な暗文が施されている。(419)は高台部片で、角高台である。(420)は蓋片で、外面に暗文が認められる。(421)は、高坏の坏部。(422～424)は、高坏か坏の細片。外面に赤褐色の顔料が塗布され、内面にも顔料で暗文に似た文様を描いている可能性がある。畿内産を模倣した在地産か。これらは、都城の土器編年で言えば、概ね「平城Ⅰ, Ⅱ」に属し、若干「平城Ⅲ」が含まれると見られる。^{*1} 8世紀前葉を中心に中葉まで。

精製土師器(暗文なし) 精製土師器で暗文が認められないもの。現在295点を数える。^{*2} (425～429)は坏。(425, 426)の口縁端部は丸くおさめられ、(427, 428)は、やや外反させており、(429)は、口縁端部の内側を丸く肥厚させている。この内、(429)の外面にはミガキ調整痕がなく、模倣品の可能性がある。

A・F地区 精製土師器(2) 図75 p.165

精製土師器(暗文なし) (430～436) (430)は坏で、口縁端部は両側に窪みを持つ。(431)は、碗。(432)は、外反して踏ん張る形の高台が付く坏。(433)は、つまみ部片。(434)は、蓋の口縁部片で、端部が内側にやや肥厚する。(435, 436)は、高坏の脚部片。何れも面取りのケズリは見られない。

G地区 精製土師器

精製土師器(暗文) (437～448) (437, 438)は坏で、体部の中ほどから上をやや外反させ、内面に2段の暗文が施されている。(439)は、底部の丸い坏、(440)は、高台の付く坏の高台部片で、放射状と底部に螺旋の暗文が施されている。(441)は、坏の口縁部片。(442)は、坏の底部片。小さな螺旋の暗文が2条ある。(443)は、坏の底部から体部片。放射状と底部に螺旋の暗文が施されている。(444)は皿で、底部外面に指押さえの凹凸があり、胎土は砂粒が混じりやや粗い。放射状と螺旋の暗文が施されている。(445～447)は、坏の口縁部片で、(446, 447)は、体部中ほどから上を外反させ、再び端部を内側へ戻す形(受け口状)になる。(447)の放射状暗文は、左上にはね上げられている。(448)は皿で、口縁端部の内側を丸く肥厚させている。

精製土師器(暗文なし) (449～451) (449)は、坏の高台部細片で、接地面は丸い。(450)は、受け口状の甕の口縁部細片。(451)は、高坏の脚部片。

第13・14トレンチ 精製土師器

精製土師器(暗文あり) (452～455) (452, 453)は坏の口縁部片で、口縁端部内側に肥厚がみられる。(454, 455)は、坏か皿の体部片。

*1 奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』, 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
横幕大祐 2000『美濃・飛騨の畿内産土師器』『美濃の考古学 第4号』美濃の考古学刊行会

*2 暗文の確認できる破片144点と合わせると、精製土師器は現在439点を数える。

製塩土器 (456～465) ^{せんこう*1} 煎熬に用いられた土器で、海浜部からもたらされたもの。(456～459)は、その脚部で海浜に突き刺す尖端部。胎土は粗く、部分的に淡赤色を呈するものがある。(460～465)は、その体部の口縁部細片。器胎は非常に薄い。外面は煤けて暗褐色を呈するものが多く、製塩土器特有の表面の剥離が見られる。胎土は淡黄色～淡赤色を呈する。

鉄製品 図76 p.167

紡錘車(466) 紡輪の径4.2cm、厚さ3.0mm、断面長方形。紡茎は、紡輪の付け根で径3.0mmの断面円形、上は長さ9.4cmの所で欠損。欠損部で径2.0mm。下方は長さ5.3cm。下端は長径2.5×短径2.0mmのやや方形を呈している。

刀子(467) 切先を欠くが、全長13.3cm、刀身の長さ6.8cmほどに復元でき、断面三角形の平造り。棟の幅は、区部で4.5mmを測る。

釘(468) 長さ11.0cm。断面は、一辺4.0～6.5cmの方形。頭は直角に折り曲げられ、2.0mmの厚さに斲されている。

石製品

管玉(469) 碧玉製。径1.0cm。孔の径は、端部で長径4.0mm×短径3.0mm、欠損部で1.5mm。

砥石(470, 471) 分銅形で、4面ともよく使い込まれている。(470)は粗砥、(471)は仕上砥。

石器(472) 幅3.3cm、厚さ6.5mmの平たい石材で、両端欠損。片面から角を落とす研磨がされ、断面は蒲鋒形となり、その裏面は凹むが、接地する面は平らに研磨されている。成品の形、用途は判らない。

フイゴの羽口(473) 先端部。外径6.4cm、内径2.5cm。先端に溶解物が付着している。

鉄滓(474～477) (474, 476)は、玉状の溶解物の融着。(475)は炉床に溜まる、いわゆる碗形滓。(477)は、1mm以下の被熱した黄灰色の粘土膜が付着し、矩形の一角に沿った形に見える。炉の構造の一部を反映している可能性がある。

和鏡 図77 p.169

山吹双鳥文鏡(478) S4E27 SK6より出土した。状態が悪く、周りの土ごと取り上げて、保存処理もそのまま行った。直径94.0mm。縁部の高さ5.5mm、幅4.0mm。厚さは、薄い所で1.0mm、文様のある所で1.5～1.8mm。外区と内区を分ける圈線の幅2.0～2.5mm、高さ(鏡面から)1.5mm。内区の径(圈線の内側で)58.5～60.0mm。紐座の径17.0mm、高さ(鏡面から)2.0mm。紐の径9.0mm、高さ(紐座から)2.0mm。紐孔は、径1.5mmの円形で中央部が少し深くなっている。紐座の周りには径1mmの珠文が34個連なって回る。外区には、左右に枝分かれした山吹の花と葉の文様(図77 青色)が6箇所、内区には、枝分かれした花(と2葉)と1葉が左右対称で一對になった文様(図77 赤色)が3箇所と、その間に尾をはね上げて飛翔する尾長鳥が2箇所配されている。鑄造は12世紀だが、出土した土坑は中世。

*1 鹹水(海水)を煮詰める工程。

B・D地区 中世以降の遺構に伴う遺物(1) 図78 p.171

須恵器(479～487)^{*1} (479)は、S12E32 SD3から出土した。内湾した器形で、欠損部寄りに2条の凹線が回る。瓶子の脚部と思われる。6世紀代。

(480)は、S8E33 SD3から出土した小壺で、内面全体(口縁部下5mmで水平)に赤褐色の付着物があり、水溶液が満たされた痕である。擦ると鉄錆のような細粒粉末が剥離する。朱墨汁の容器として用いられたものと思われる。(481～483)は、つまみが付き、口縁端部を折り返す蓋の転用硯で、(481)は、S5E35 SK1・2から、(482)は、S8E32 SD3から、(483)は、S13E22 Pから出土した。(484～486)は、盤と高台坏の転用硯で、(484)は、正倉西4を切るSDから出土した両面転用硯、(485)は、S7E34 SD3から出土した朱墨の転用硯、(486)は、S6E32 SD1から出土した内面を朱墨に、高台の内側を墨に使い分けられた両面転用硯である。(487)は、S13E22 Pから出土した火舎。径33cm、高さ13cmほどに復元できる。三方に獣足が付き、体部は「八」の字形に開くが、中ほどで外反の度合いを強めて朝顔形に開く。底部外面中央部に斜格子叩き具の痕を残している。内面は、屈曲部より上に煤が付着し、煤けた部分との境が水平で明瞭である。おそらく、屈曲する位置まで灰が満たされ、その上で火がつかわれたものと思われる。

灰釉陶器(488～490) (488)は、S7E27 SK2から出土した三日月高台の碗で、内面に朱墨が付着した転用硯である。注目すべきは内面の焼成前の刻書で、「謹解」(謹んで解す)とあり、さらに下に文書が続くものと思われる。(489, 490)は皿で、(489)は、S14E24 SK2・3から、(490)は、S10E30 SK1から出土した。

青磁碗(491) S8E30 SD2から出土した口縁部細片、連弁文。

平瓦(492) S3E23 後世溝1から出土した。弥勒寺平瓦分類のⅡb類(凸面縄目、凹面布目)。^{*3}

土馬(493) S9E32 SD3から出土した陶製の馬の頭部片。目や鼻は半肉彫り、鬣はハケ状の工具で表現され、写実的である。^{たてがみ}

泥面子(494) 表面採集。冠りもの(頭巾)や着物(狩衣)の襟、ふくよかな顔に大きな耳が表現された福相から、七福神(大黒天)を表していると思われる。江戸末期から明治時代に流行った玩具。

B・D地区 中世以降の遺構に伴う遺物(2) 図79 p.173

山茶碗・皿(495～512) (495～497)は、S4E39 SK1から出土した。(495)の碗は、腰部から胴部にかけてやや張りを持つが、口縁部を外反させている。高台は剥離。(496)は、高台から腰部片。内側から押し潰した低い高台で、腰部は張りを持つ。(497)は皿。(496, 497)には、底部外面に墨書が認められるが、判読できない。13世紀前半。

*1 正倉区域の出土遺物は、関市教育委員会 2014『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡Ⅱ－正倉区域－』において既に報告したが、これらは今回報告する中世以降の遺構から出土した(古代に属する)遺物である。

*2 「文書」土器の類例として、檀ノ木洞1号窯出土の「馬使貞主今日冊上」の刻書が知られている。「40の品物を納品します」という意味で工人か、或いは役人が勘検の上、記したと考えられる。本例も同様に「謹解」の後には品物の数などが記されていたのではないかと推測される。関市教育委員会 1990『檀ノ木洞1・2号窯』

*3 関市教育委員会 1986『国指定史跡 弥勒寺跡』

(498～503)は、S10E30 SD2から出土した。(498, 499)の碗は、薄手で灰白色を呈し、細かく均質な胎土。高台は小さく尖らせ、見込み部に指圧痕があり凹んでいる。(500～503)の皿は、器高が低く、(502)以外は底部内面に指圧痕が見られる。(504)は、S11E30 東西溝SD2から出土した皿で、器高が低く、底部内面に指圧痕が見られる。13世紀後半。

(505～507)は、S10E30 SK1, S11E30 SK1から出土した。(505)の碗は、三角の高台が付き、体部はやや張りを持つ。口縁端部外側に面取りが見られる。(506, 507)の皿は、底部内面が厚く、強い指圧により輪状に盛り上がって見える。口縁端部外側の面取りが顕著である。13世紀後半。

(508)は、S5E30 SK1から出土した碗。厚手で、押し潰された低い高台が付く。体部は「八」の字に開き、口縁部をやや外反させて端部外側を面取りしている。12世紀後葉～13世紀前葉。

(509, 510)は、N3E33 SK16から出土した。(509)の碗は、比較的均質な胎土で灰白色を呈する。内傾する尖らせた小さめの高台が付き、腰部は凹んで体部に張りを持ち、口縁端部は内側に肥厚させている。(510)の皿は、厚手で底部内面に指圧痕が見られる。口縁部寄りが強く摘まれ端部が肥厚している。12世紀後葉～13世紀前葉。

(511)は、S15E25 SK1から出土した碗の底部細片。均質な胎土で灰白色を呈する。尖らせた高台が付き、見込み部が凹んでいる。13世紀後半。

(512)は、N2E25 SK1から出土した碗。厚手で三角の高台が付き、体部に張りを持つ。見込み部に指圧痕、口縁端部に面取りが見られる。12世紀後葉～13世紀前葉。

天目茶碗(513, 514) (513)は、(512)と同じN2E25 SK1から出土した。体部は丸く、釉薬は少し赤みを帯びた暗茶褐色に発色している。(514)は、S13E25 後世溝2から出土した。口縁寄りが一度窄まり、端部を外反させる天目茶碗特有の口造り。釉薬は暗茶褐色に発色し、曜変が現れている。

菊皿(515) S8E32 SD3から出土した古瀬戸の菊皿。口縁部をヘラで押さえて花卉を表し、見込みに円型で押した沈線と、そこから花卉と花卉の間へ向けた放射状の線があり、そこへ半透明の灰黄色を発する灰釉が溜まり模様を浮き上がらせている。重ね焼き(3点ピン)の痕が残る。煤が高台の内側と一方がその外側へも付着しており、伏せた状態で灯明に転用されている。

華瓶(516) N2E26 P1から出土した仏具である。透明な釉薬が掛かり、灰白色を呈する。

青磁 碗(517) S11E31 SD3の流れから出土した底部細片。内面の見込み部と体部の境目に段があり、そこへ釉薬が溜まって輪形が浮かび上がっている。

B・D地区 中世以降の遺構に伴う遺物(3) 図80 p.175

S5E39 SK1

山茶碗・皿(518～535) (518～529)は碗で、三角の高台が付き、体部がやや張り、見込み部が凹むもの、口縁端部を面取りするものがある。(518)は、大きめの三角高台。(519, 525)は、暗灰色を呈し、胎土が粗い。口縁の面取りはない。(522, 527)は、押圧により見込み部が凹み、口縁部を外反させている。(523, 525)は、全体に厚手。(526, 528, 529)は、口縁端部内側を肥厚させている。(530～

535)は皿。(531)は、口縁部に灰釉の漬掛けによる施釉が見られる。(532～535)は、厚手で口縁端部に面取りが見られる。13世紀前半。

甕(536) 肩部から口縁部片。頸部を少し立ち上げ、口縁部を外反させている。外面と内側の頸部まで暗灰緑色の釉薬が掛かる。

土鍾(537～541) 長さ4.2～4.8cm、径0.9～1.5cmの同規格品。淡赤褐色を呈する。

須恵器 坏(542) 転用硯の底部細片。内面が非常に滑らかで、朱墨が付着している。

灰釉陶器 皿(543) 転用硯の底部細片。内面が非常に滑らかで擦痕がある。(542, 543)は、この土坑の覆土に混入したもの。

C地区 中世以降の遺構に伴う遺物 図80 p.175

S12E15 SK2

須恵器 坏(544) 灯明に転用された口縁部の細片。

S11E15 SK2

土師器(平安)皿(545) 無台。内外面に、満遍なく黒色の付着物がある。外面は光沢があり、膜のように付着し、内面は光沢はないが、分厚く瘡蓋のようにこびり付いている。漆を扱った器か。

S11E15 SK1

山茶碗(546) 底部片。丸い高台が付き、器胎が分厚い。12世紀後葉。

S17E15 SK

山茶碗(547) 薄手で灰白色を呈する。尖らせた小さい高台で、口縁端部は内側に肥厚。高台内側に「十」の墨書あり。13世紀後葉。

S12E15 SK7

山茶碗 皿(548～556) (548～555)は、体部の中ほどに稜を持つ。(549, 550, 553)には、口縁端部に面取りが見られる。(556)は、器高が低く、口縁端部外側に幅の広い面取りが見られる。13世紀前半。

F地区 中世以降の遺構に伴う遺物 図81 p.177

F 1 F区 土坑

山茶碗(557～565) 押し潰された高台が付き、厚手で胎土の粗いもの。灰黄色を呈する。(561～563)には、口縁端部の面取りが見られない。13世紀前半。

AN1E1 SK2

台付灯明受皿(566) 底部を欠く。淡青白色の釉薬が掛けられているが、接地面及び側面の面取りされた部分は露胎。

下水8・9区 SK5

山茶碗(567) 厚手の底部片。三角の高台が丁寧にナデ付けられ、底部糸切りもナデ消されている。12世紀後半。

F 地区 包含層

山茶碗(568～580) (568)は、胎土が緻密で灰白色を呈する。三角高台が付き、口縁端部を面取りしている。(569)は、丸い高台が付き、口縁端部が面取りされている。(570)は、胎土が粗く厚手で、押し潰された高台が付く。(571)は、厚手で高台のみ胎土が緻密である。三角高台が付き、口縁端部の面取りは見られない。(572)は、厚手で三角高台が付き、口縁端部の面取りは見られない。(573)は、四角い高台が付き、口縁端部を面取りしている。(574)は、底部片。厚手で潰れた高台が付く。(575)は、胎土が緻密で三角高台が付き、底部糸切りはナデ消されている。(576)は、体部から口縁部片。口縁端部を面取りしている。(577)は、薄手で胎土が緻密であり、小さな高台が付き、見込み部に指圧痕がある。(578)は、厚手で四角い高台が付き、見込み部が凹んでいる。(579)は、薄手で胎土が緻密であり、小さな高台が付き、見込み部に指圧痕がある。高台の内側に墨書があるが、判読できない。(580)は、薄手で胎土が緻密であり、小さな高台が付き、見込み部に指圧痕がある。高台の内側に墨書(2文字か)があるが、判読できない。

山茶碗 皿(581, 583) 口縁端部外側に緩い面取りが見られる。(583)は細片。薄手で胎土が緻密であり、内面に赤褐色の付着物(ベンガラの朱墨か)がある。12世紀後葉～13世紀代。

卸皿(582) 底部内面に斜格子状の切り込みが入れられている。

皿(584) 底部から口縁部片。径28cmほどに復元できる。底部は平らで、口縁端部内側を面取りしている。胎土は淡黄灰色、表面は暗灰色を呈する。表面の色は(585)と同じ釉薬によるもの。

壺(585) 肩部から口縁部片。胎土、表面の色調は(584)と似る。外面と内面は頸部まで釉薬が施されているが発色不良で艶がなく、泥水を被ったかのような印象を受ける。

A・G地区 包含層 図82 p.179

第1トレンチ

山茶碗(586) 薄手で胎土が緻密であり、潰れた高台が付き、口縁端部に面取りが見られる。13世紀前半。

土師器 皿(587) いわゆる、かわらけである。

G地区

山茶碗(588～594) (588, 589)は、厚手で胎土が粗く、押し潰された高台が付き、口縁端部に面取りが見られる。見込み部に指圧痕がある。(590)は、薄手で胎土が緻密である。押し潰された高台が付き、口縁部を外反させ、端部に面取りが見られる。(591)は、厚手で胎土が粗い。四角い高台が付き、口縁部を外反させ、端部に面取りが見られる。(592)は、底部片。厚手で胎土が粗く、幅の広い四角い高台が付き、腰が張る。内面全体に煤が厚く付着する。(593, 594)は皿で、(593)は、口縁端部が丸くおさめられ、(594)には面取りが見られる。共に指圧痕は見られない。12世紀後葉～13世紀前半。

3 その他

土錘 図82 p.179

土錘(595～615) 中ほどが膨らむもので、最大径2.1～2.4cmの(595～599, 610, 614)と、細身のもので、最大径1.3～1.7cmの(600～609, 611～613, 615)に分かれる。前者は総じて暗灰色、後者は黄褐色のことが多い。

縄文土器(1)

縄文土器(616～627) (616)は、山形の押型文。縄文早期。

(617～624)は、深鉢の口縁部の意匠が顕れた部分で、(617～620)は、竹管状の工具の押し引きで渦巻文を現している。縄文中期。

(621, 622)は、隆帯の間に2条一組の連続刺突で文様が現されている。縄文前期か。

(623)は、隆帯の渦巻文の中に斜めの沈線文を描き込んでいる。(624)は、凹線で描かれた蕨手状の渦巻文と凹線で区切られた区画の中に縄文が施されている。縄文中期。

(625)は、鉢か。「く」の字に内折した口縁部と平行に凹線が3条と屈折部に太めの1条を回らせ、その下は無文である。縄文後期か。

(626)は、緩く外反する頸部に細い粘土紐を口縁部と平行に3本貼り付けて、その上から今度は縦方向に同じ粘土紐を3本縦方向に貼り付けて井桁状に交差させている。その下の胴部には斜めの沈線文が描かれている。

縄文土器(2) 図83 p.181

縄文土器(627)は、無文の深鉢。

石器(1)

石棒(628) 亀頭形に調整された円礫で、溝状に削り込まれた部分以外は、自然の面を活かしている。

磨石(629) 掌に馴染む大きさの円礫で、摩耗した使用痕がある。

石錘(630～633) 両端に打ち欠きがある川原石。

磨製石斧(634) 流紋岩。刃部を欠く。基部の幅1.3cm、欠損部幅2.4cm、厚さ0.8cmの断面長方形。

打製石斧(635～643) (635)の片側はバルブのある剥離面で、片側から刃部が付けられている。

(642, 643)は、大形。(635, 637, 638)は、黒色の安山岩系石材。(636)は、淡黄白色の石材(頁岩か)。

(639～643)は、黄灰色～淡灰色の砂岩系石材である。

石器(2) 図84 p.183

石鏃類(644～653) (646, 647)は、基部に抉りのあるもの。(650, 651)は、茎のあるもの。(648, 649, 652, 653)は、そのどちらにも属さないが、大きさや形状から鏃に分類した。(649, 650, 652)は下呂石、その他はチャートである。

石錐(654) 基部は断面四角形、錐部は断面三角形。

石匙(655) やや縦長で、突起部が片方に偏しているが、釣り鐘形に近い形状。

削器・搔器類(656～664) 片側に刃が付けられるもの、刃部が直線になるものなどを分類した。

砥石(665) きめの細かい頁岩の剥片を利用したもので、仕上砥と思われる。手に馴染み、下面が滑らかで、中ほどが若干凹んでいる。使用は古代か。

一部磨製の石器(666) 剥離面に擦痕があり、刃部は3～6mm幅を両面から研いで刃を付けている。

弥生土器 図85 p.185

弥生土器(667～684) (667～670, 672)は、太頸壺の口縁部。(667～669)は受け口状で、(667)は、口縁端部外側にヘラで刻み目を入れ、頸部に縦方向の条痕を描き、それを横切る沈線が3条認められる。(668, 669)の口縁端部は面取りされ、(668)の口唇部外側には波状文が、(669)には3条の凹線が回らされている。(670)の口唇部下端は連続押圧により波形になり、頸部から下にハケ状工具痕が認められる。(672)は、頸部と口縁部の境の稜が緩やかで、口唇部外側に櫛状工具による斜めの連続刺突文が施されている。(673)は、胴部から頸部に差しかかる肩部片で、肩部には櫛状工具による斜めの連続刺突文(刺突と刺突の間も工具が器壁から離れず、線が繋がっており、押し引きに近い技法)が施されているが、胴部は縦方向にハケ状(肩部の工具と同一か)の調整の後、ヘラ描き沈線を(7条認められる)回らせている。(674)は胴部片で、ハケ状工具による調整後、波状文が施されている。(675)は底部で、胴部外面は縦方向のハケ状工具による調整が施されている。

(671, 676～678)は、細頸壺の頸部から口縁部片。(676, 677)は受け口状、(671, 678)は単純な口縁部である。(676)は、外面は受け口部稜まで横方向、頸部は縦方向、内面は頸部まで横方向にハケ状工具で調整した後、口縁端部と受け口部外面稜部にヘラによる刻み目が施され、頸部に5条のヘラ描き沈線を回らせている。(677)の口唇部は、2段の貝殻刺突により羽状の文様が施され、内面はナデ、外面には櫛状工具による波状文様が施されている。(678)は、ハケ状工具で内面から外面口唇部を横方向の、外面は斜め方向の調整が施されている。

(679～683)は、深鉢形土器。(679)は口縁部で、口縁端部外側に斜め方向の押し引きによる刻み目を施し、それより下は条痕、口唇部内側には斜め方向の刺突列が施されている。(680～682)は底部で、(680)の外側は縦方向のナデ、(681)は条痕、(682)は横方向のナデにより調整され、(680, 681)の底部には繊細な布目圧痕がある。(683)は胴部から口縁部で、外反した口縁端部内側に貝殻状の工具で押し引きされた圧痕を施し、外面は条痕、内面にはハケ状工具痕が横方向で前面に施されている。外面に煤が厚く付着している。弥生中期。

(684)は、いわゆる有段口縁(二重口縁)の鉢形土器で、肩部に5～6mm間隔で斜め方向に1.5cm前後の長さでヘラで切り付けた文様が施されている。弥生後期。

石器(3)

石包丁(685～688) (685)は、刃部が直線、掌側が丸い。(686～688)は長方形で、(686)は、両面に自然の面を残すが、短辺も磨いて平らにしている。掌側に片側から開けられた径4.0mmの穿孔がある。

1 遺構に伴う遺物

排水路①・土塁上

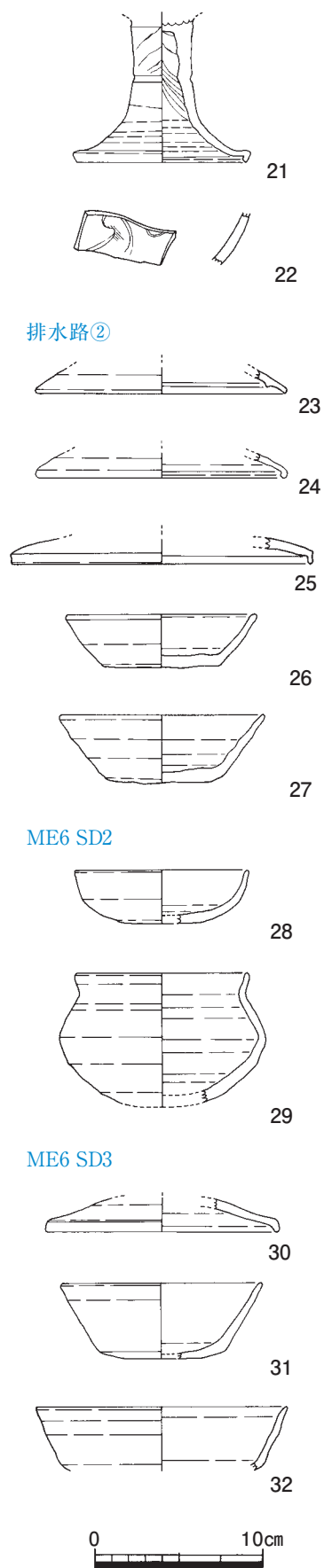
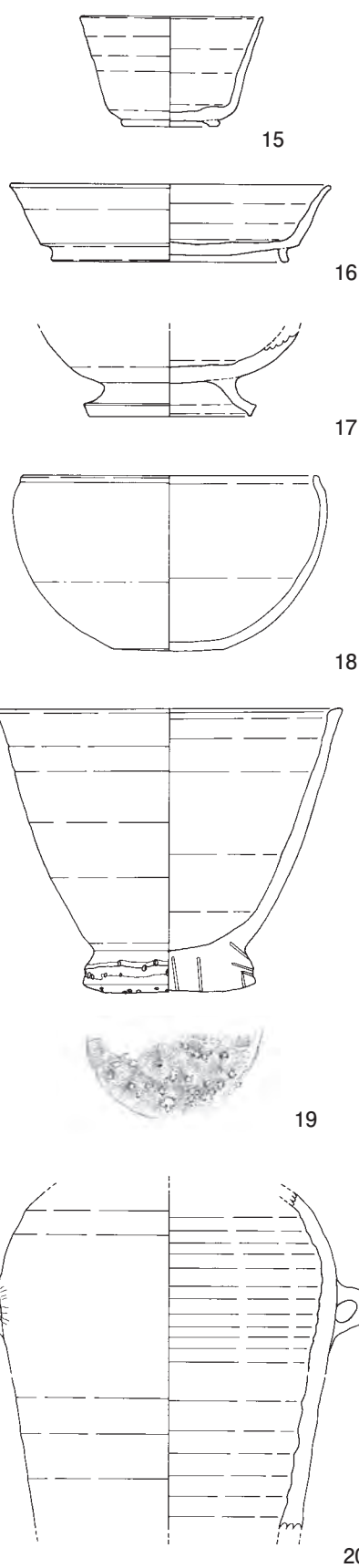
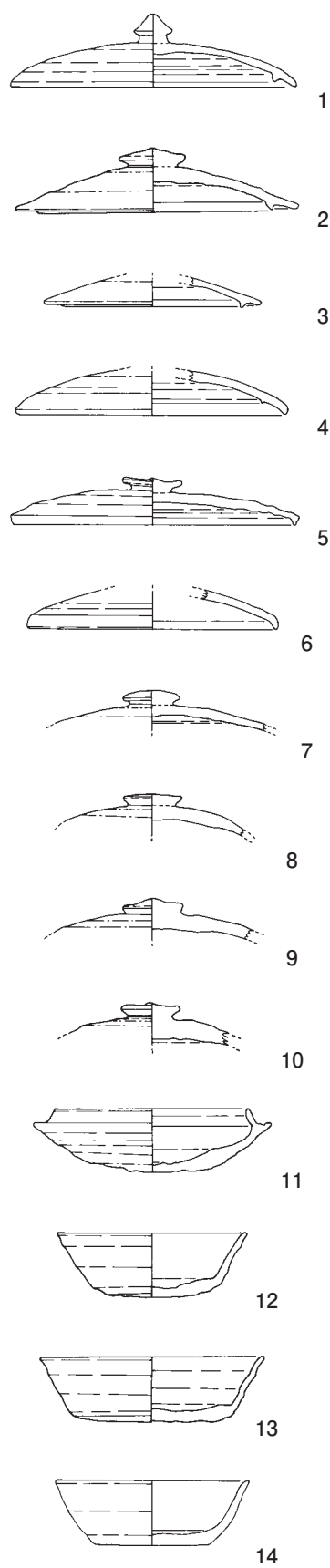
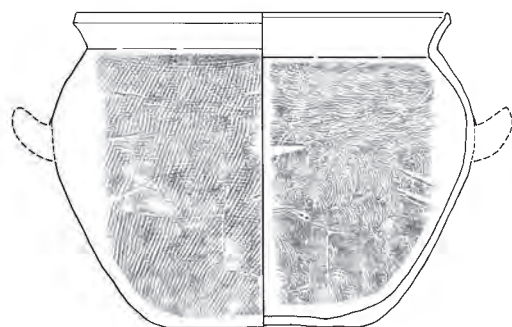


図55 遺構出土遺物 (S=1/4)

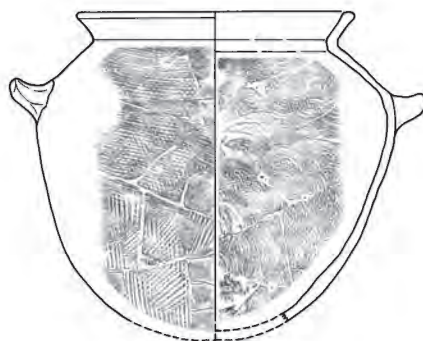


写真130

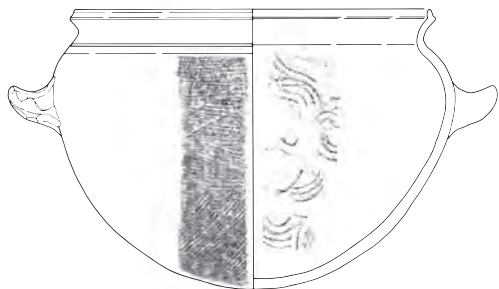
排水路②



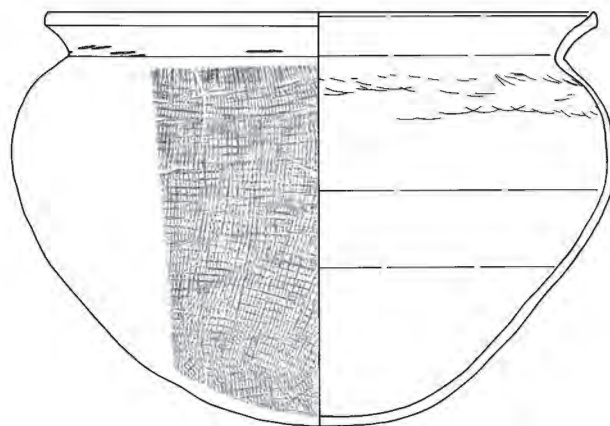
33



34

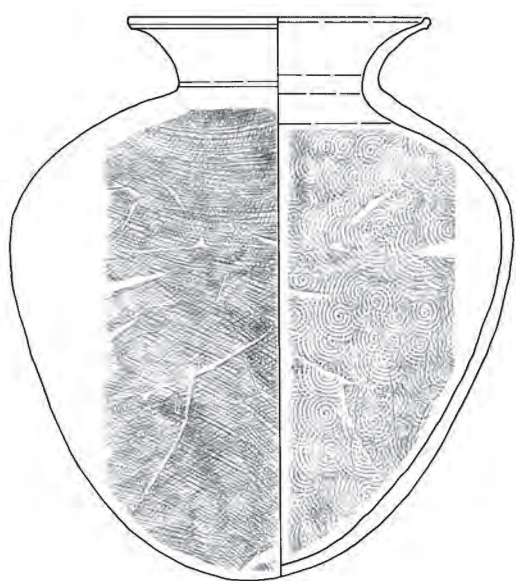


35



36

排水路①・土壘上，排水路②



37



図56 遺構出土遺物 (S=1/6)



33



34



35



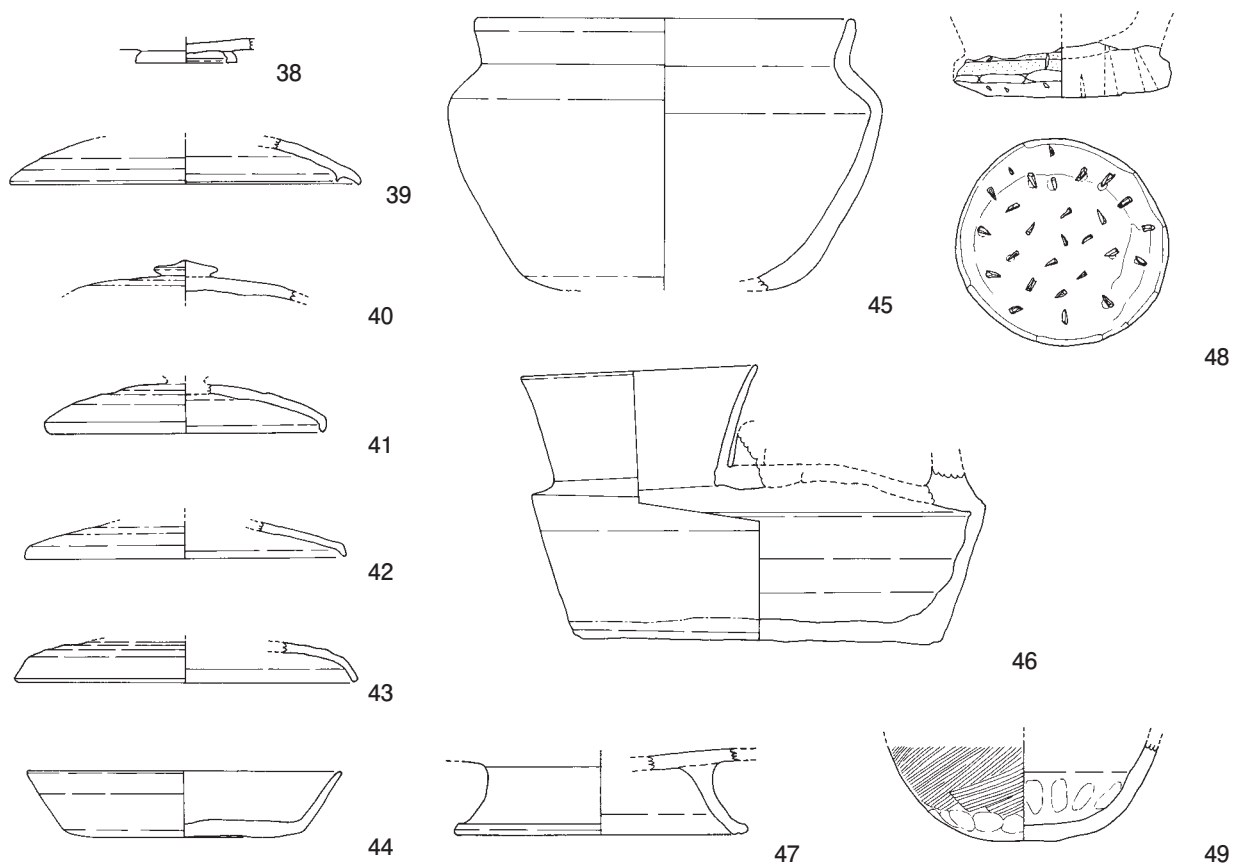
36



37

写真131

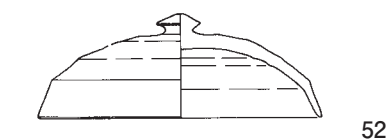
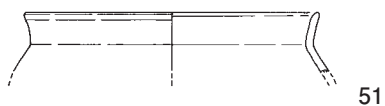
排水路②の上面



建物⑭ (ME6 SK21)



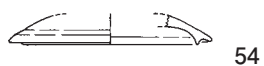
建物⑬ (ME6 SK12)



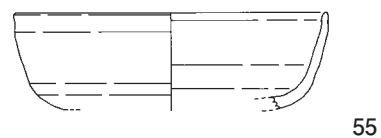
建物⑮ (ME6 SK56) の上面



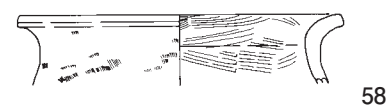
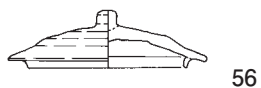
ME6 SK24



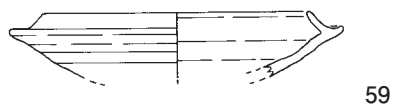
堀⑧ (ME6 SK53)



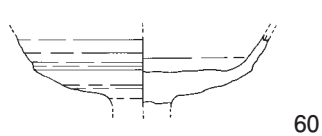
ME6 SX3



ME6 SK18 (SD 2 を切る)



ME6 SK39 (SD 2 と切り合う)



ME6 SK31 (SD 3 を切る)

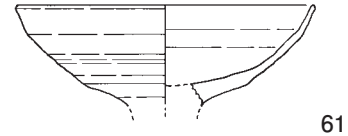
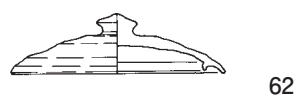


図57 遺構出土遺物 (S=1/4)



写真132

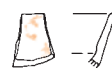
ME3 ACT(AN4E5) P3 (柱穴か)



62

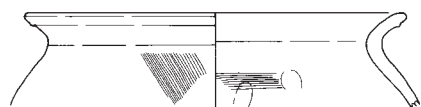


63



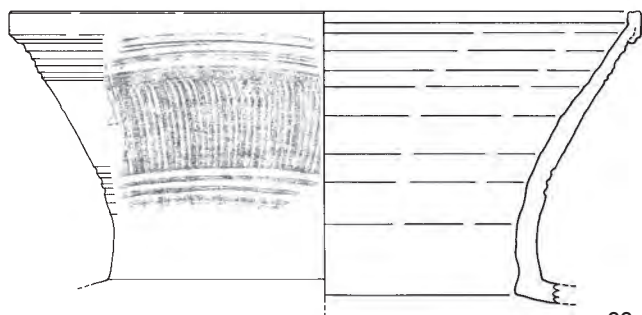
64

1T SK15(ANIN9)



65

ME3 ANIE5 SK1



66

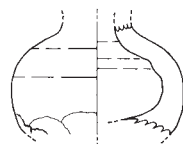
鍛冶遺構 7



67



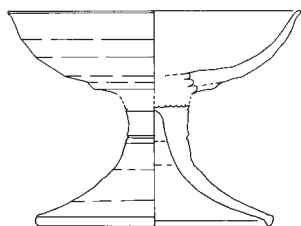
71



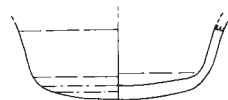
74



68



72



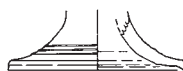
75



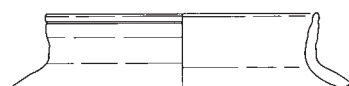
69



70



73



76

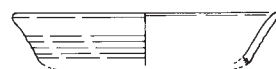
井戸状遺構



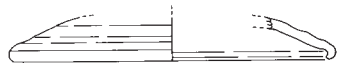
77



80



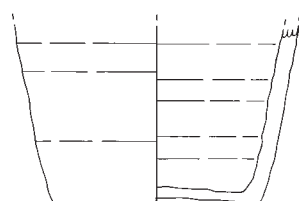
83



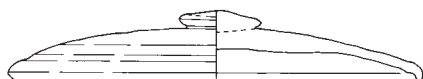
78



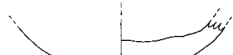
81



84



79



82

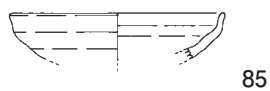


図58 遺構出土遺物 (S=1/4)



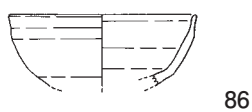
写真133

堀⑥(下水10区 SK14)



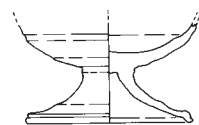
85

堀⑥(下水10区 SK2, 3)



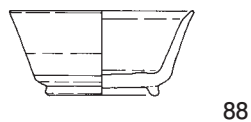
86

堀⑥(下水10区 SK10)



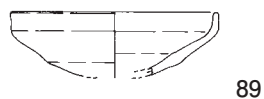
87

堀⑥SK10と切り合う (ME4 SK11)



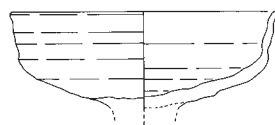
88

建物⑨(下水3区 SK23)



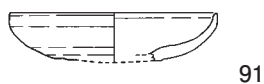
89

建物⑨ (ME3 AN3E9 SK2)

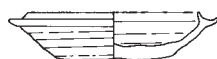


90

下水10区 SK1(柱穴か)

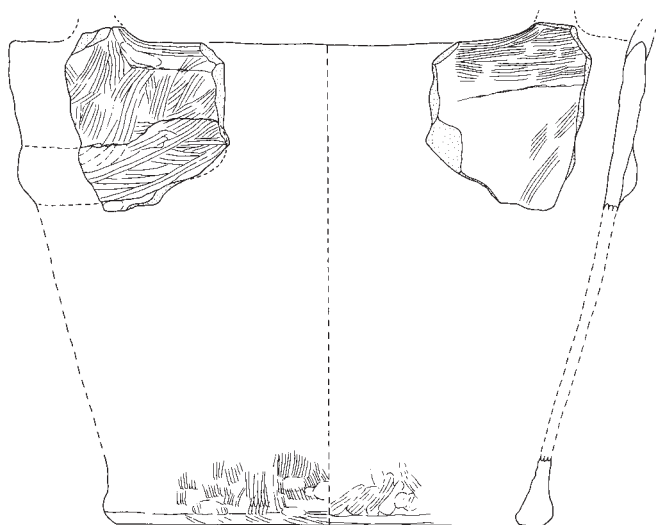


91

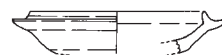


92

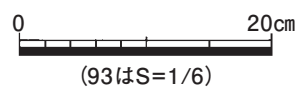
下水10区 SK2(柱穴か)



93

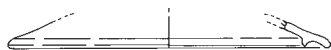


94



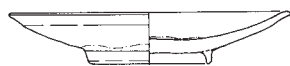
(93はS=1/6)

下水5区 溝③



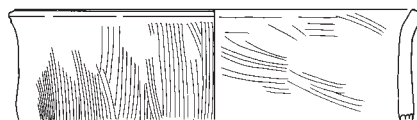
95

下水1区 SK1



96

下水6区 SK7



97



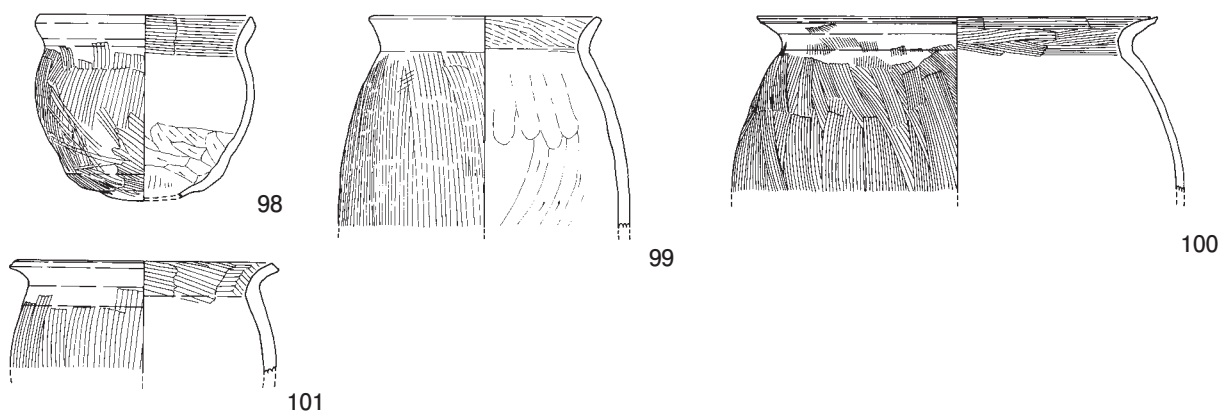
図59 遺構出土遺物 (S=1/4)



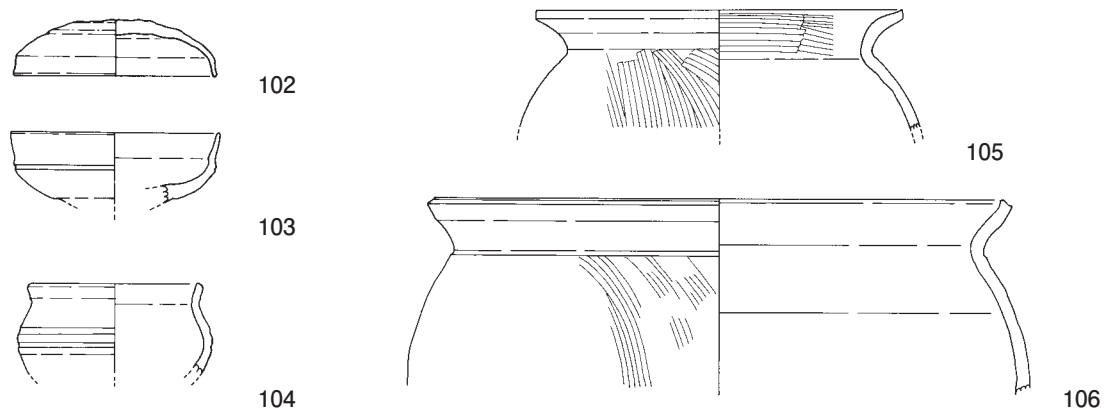
写真134

Ⅲ 遺物

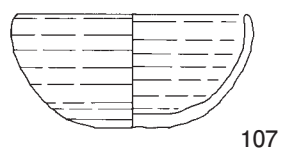
豎穴建物4



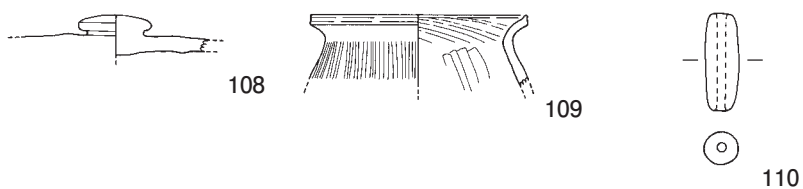
豎穴建物5



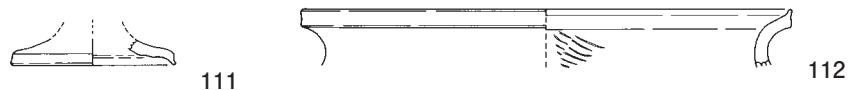
豎穴建物5を切る (G4 SX15)



豎穴建物5を切る (G4 SK52)



豎穴建物5を切る (G4 SX18)



大形豎穴建物①

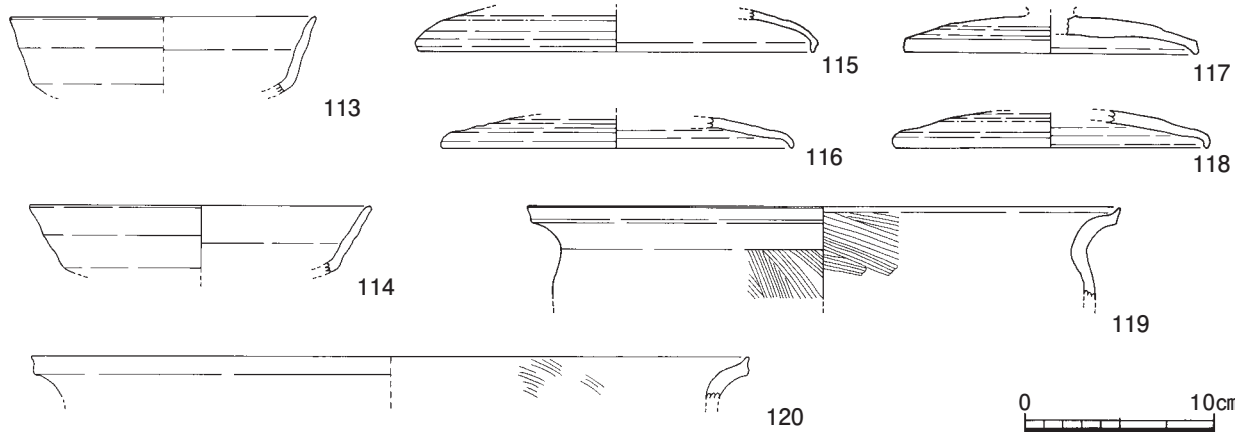
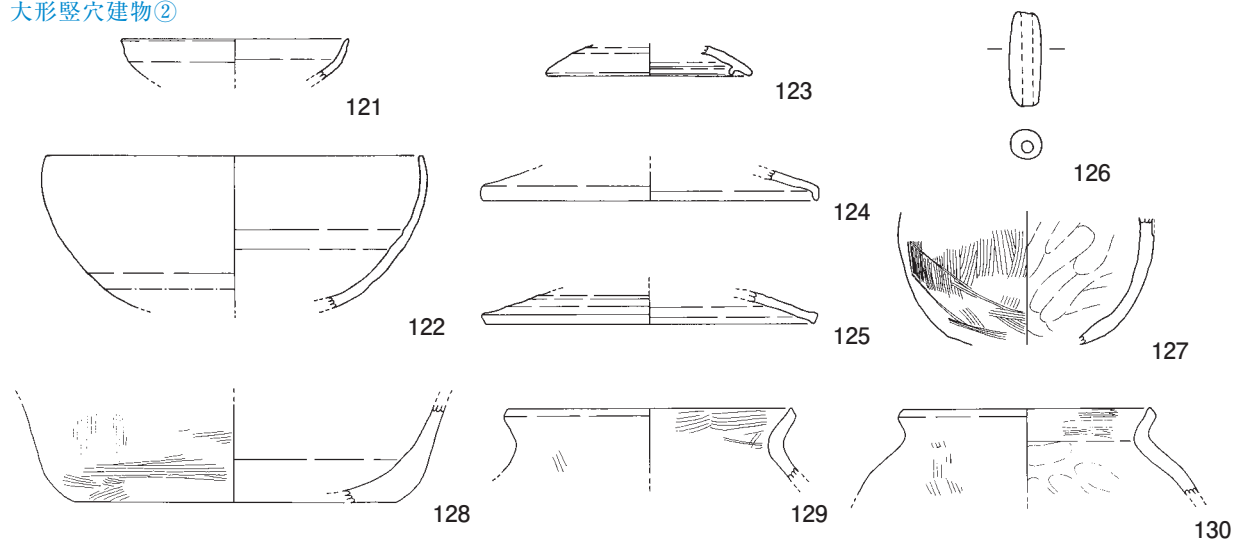


図60 遺構出土遺物 (S=1/4)

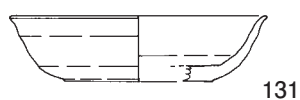


写真135

大形竪穴建物②

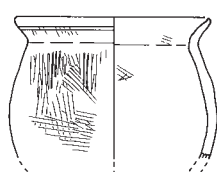


大形竪穴建物①を切る (G1・4 SX16)



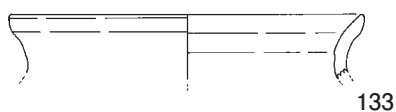
131

大形竪穴建物②を切る (G4 SK33)



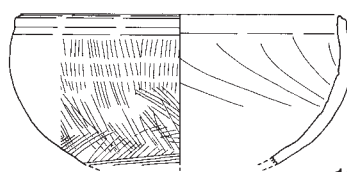
132

建物② (7TE SK1)



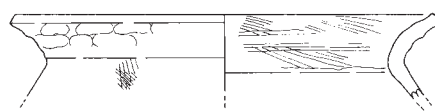
133

建物② (G2 SK8)



134

建物② (7TW SK4)



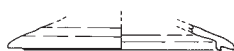
135

堀② (G6 SK60)



136

建物③ (G5 SK58)



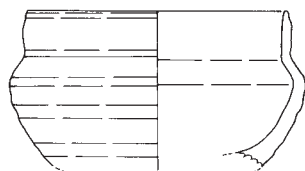
137

建物④ (G5 SK71)



138

建物③ (G3 SK2), 堀③ (G3 SK1)



139

堀③ (G3 SK1)



140

建物⑥ (G4 SK37)



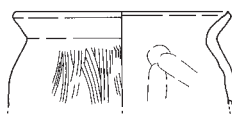
141

G6 SK61 (建物⑤柱穴か)



142

G4 溝①の上面



143

G1 SK38



144



図61 遺構出土遺物 (S=1/4)



写真136

2 包含層出土遺物など
F 地区 E9・10列(1)

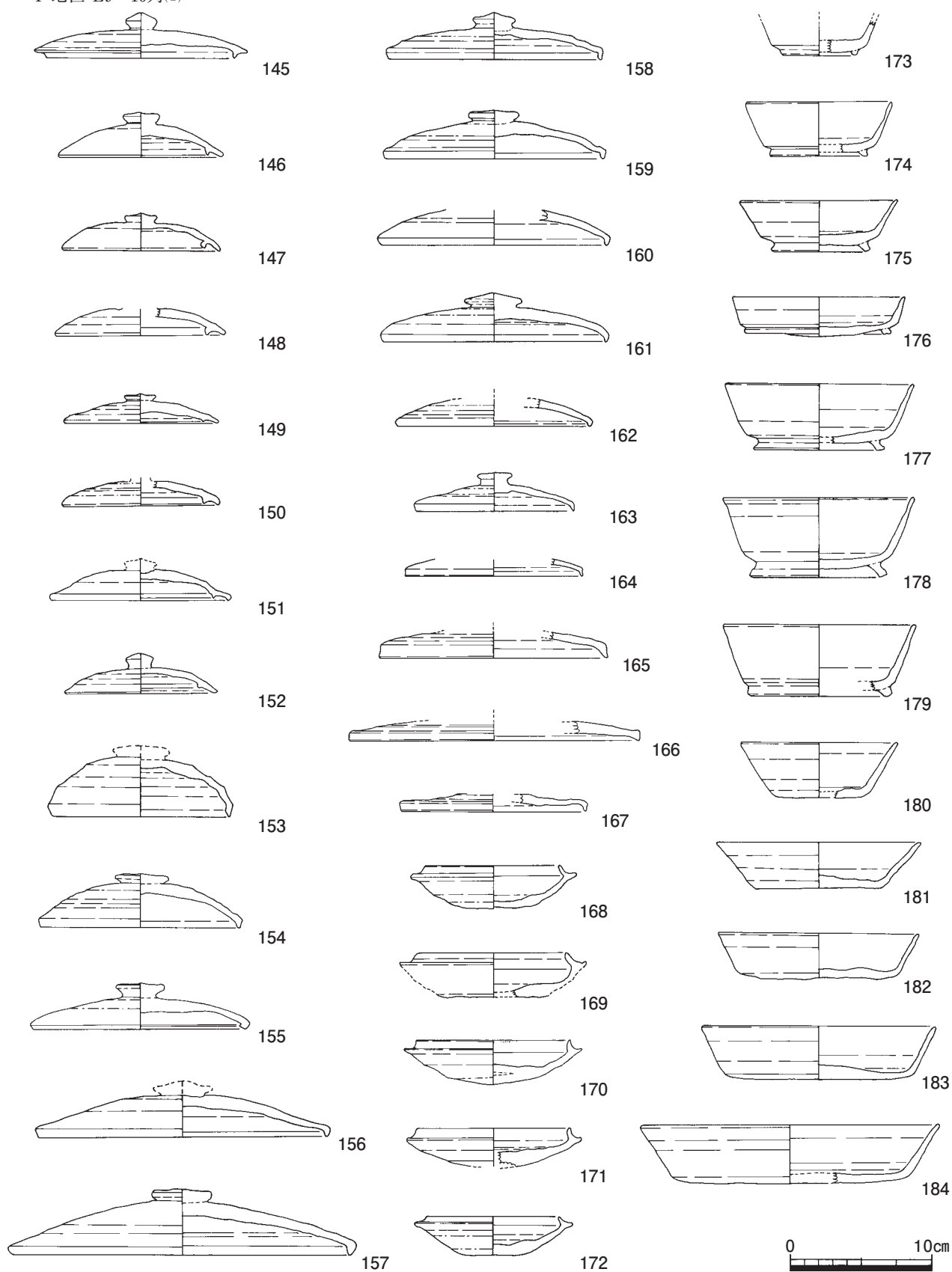


図62 包含層出土遺物 (S=1/4)



写真137

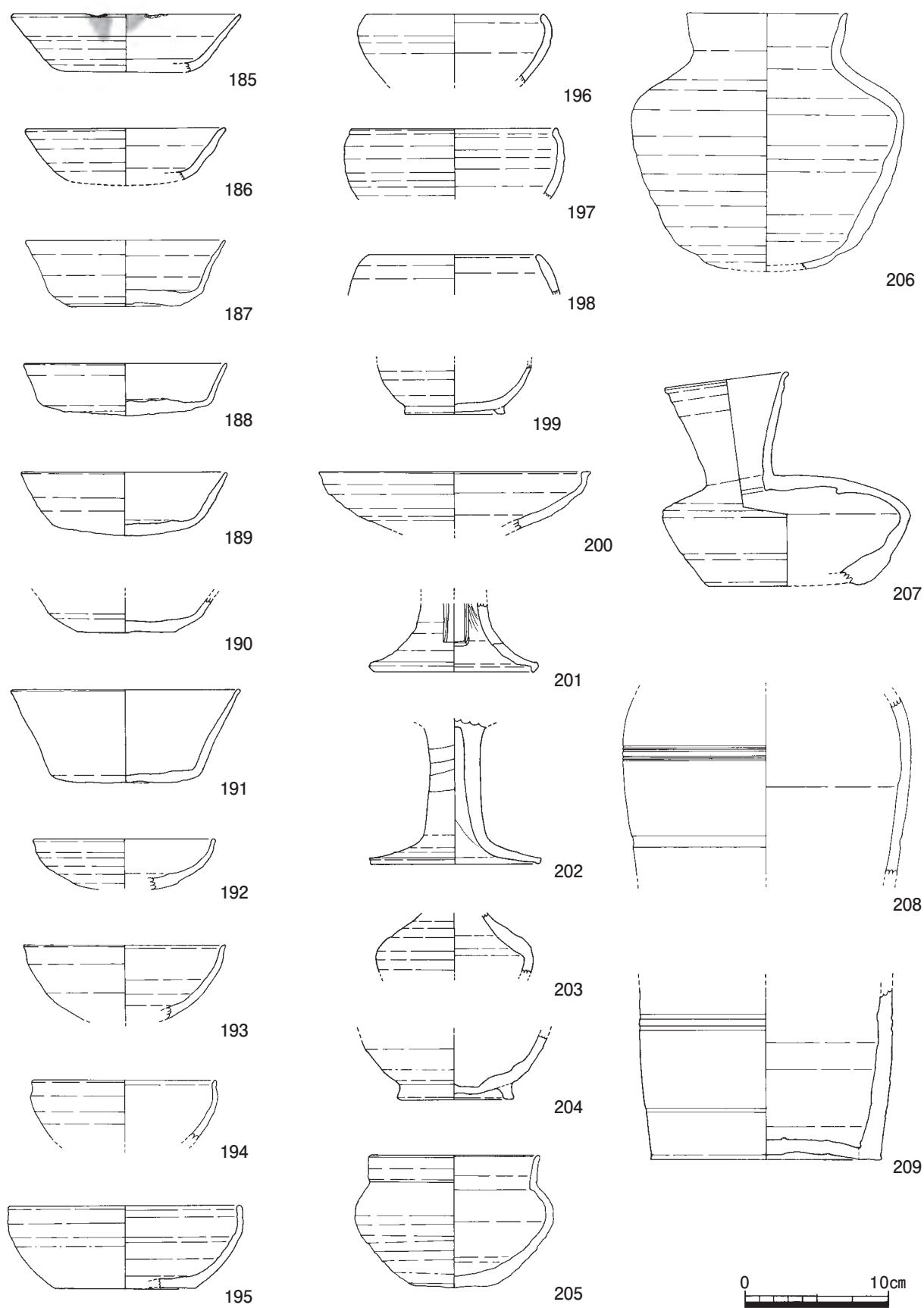


图63 包含層出土遺物 (S=1/4)



写真138

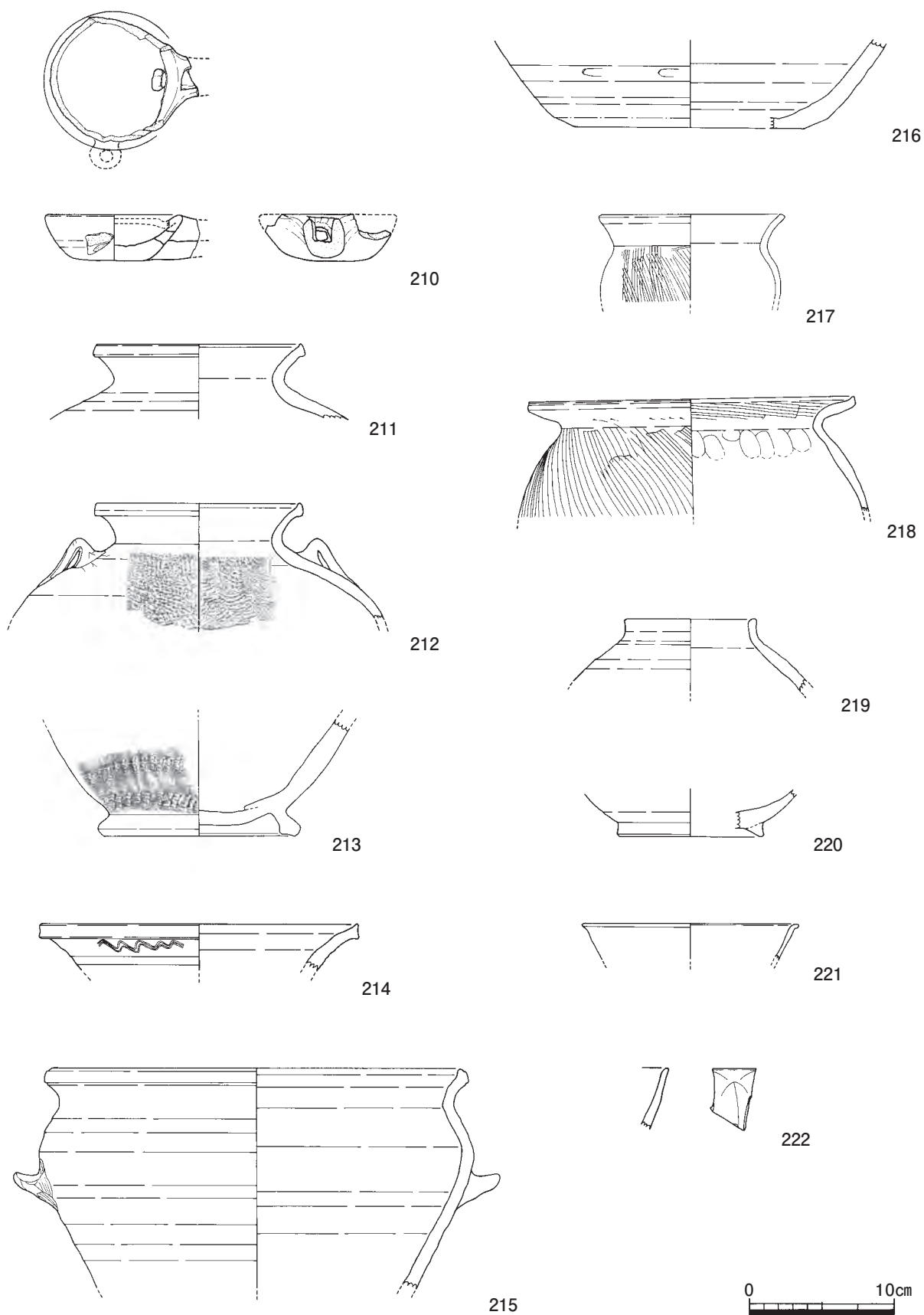


図64 包含層出土遺物 (S=1/4)



写真139

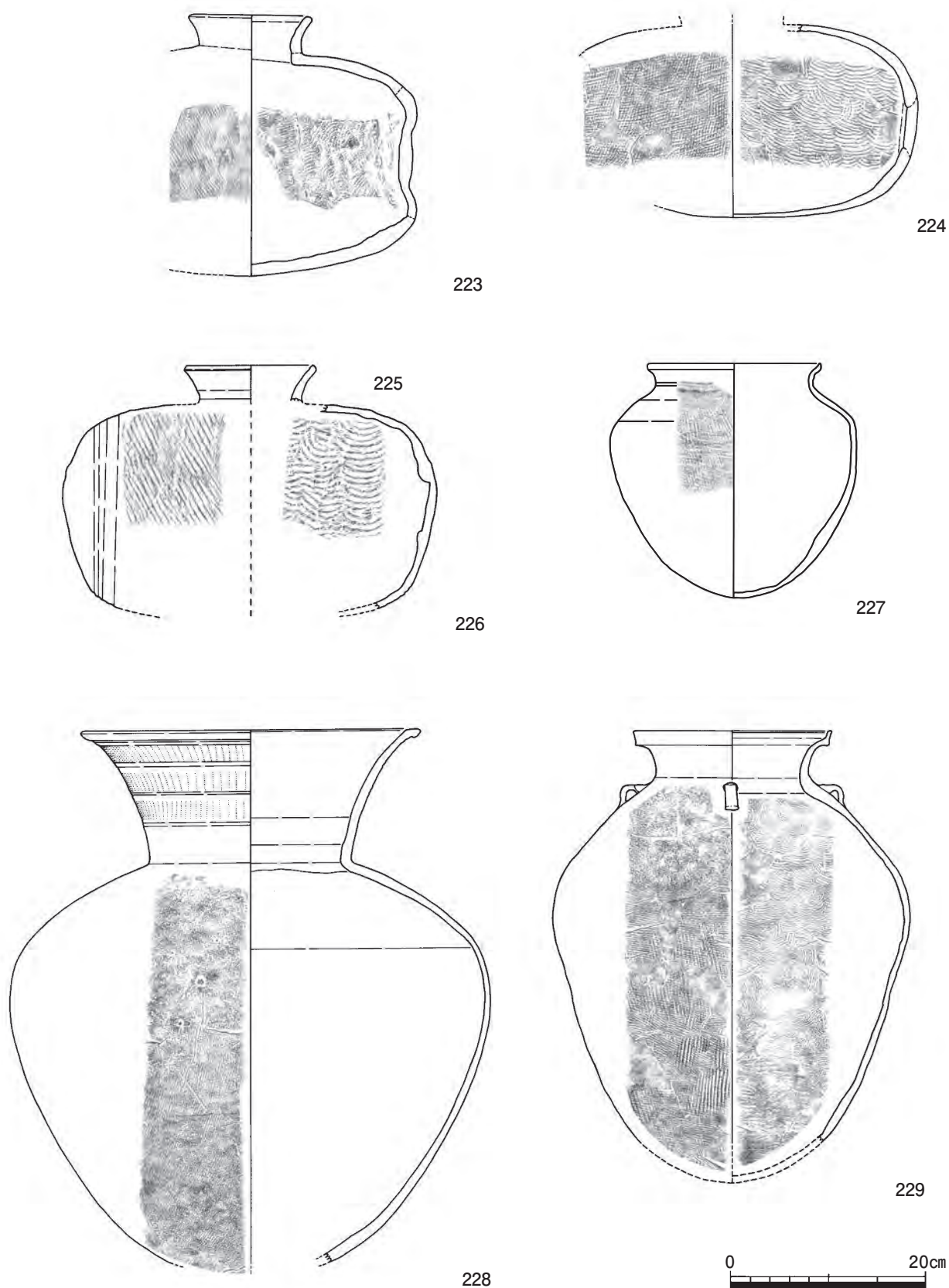
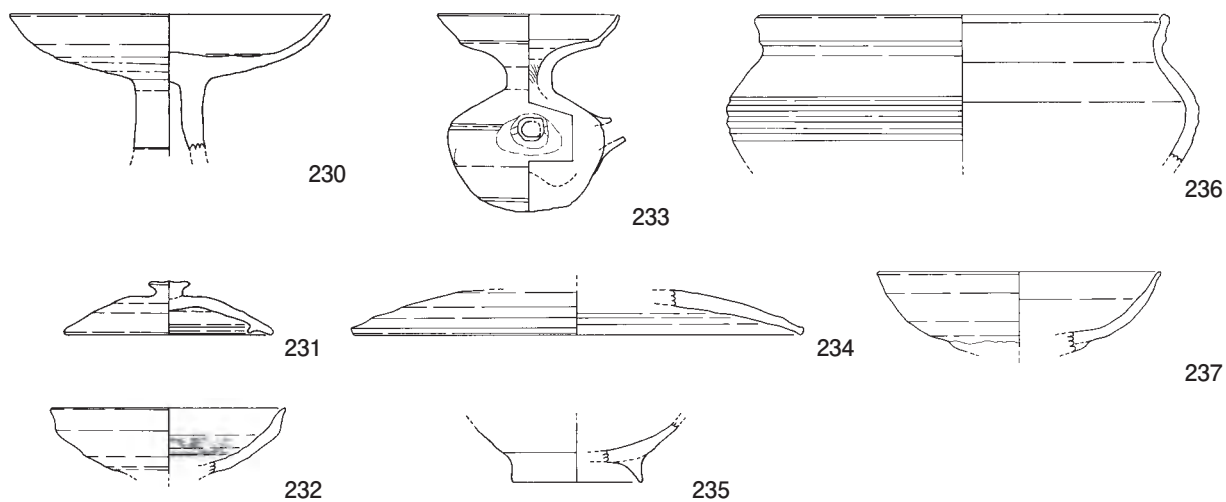


図65 包含層出土遺物 (S=1/6)



写真140

F 地区 E9N2~4



F 地区 E5~8列

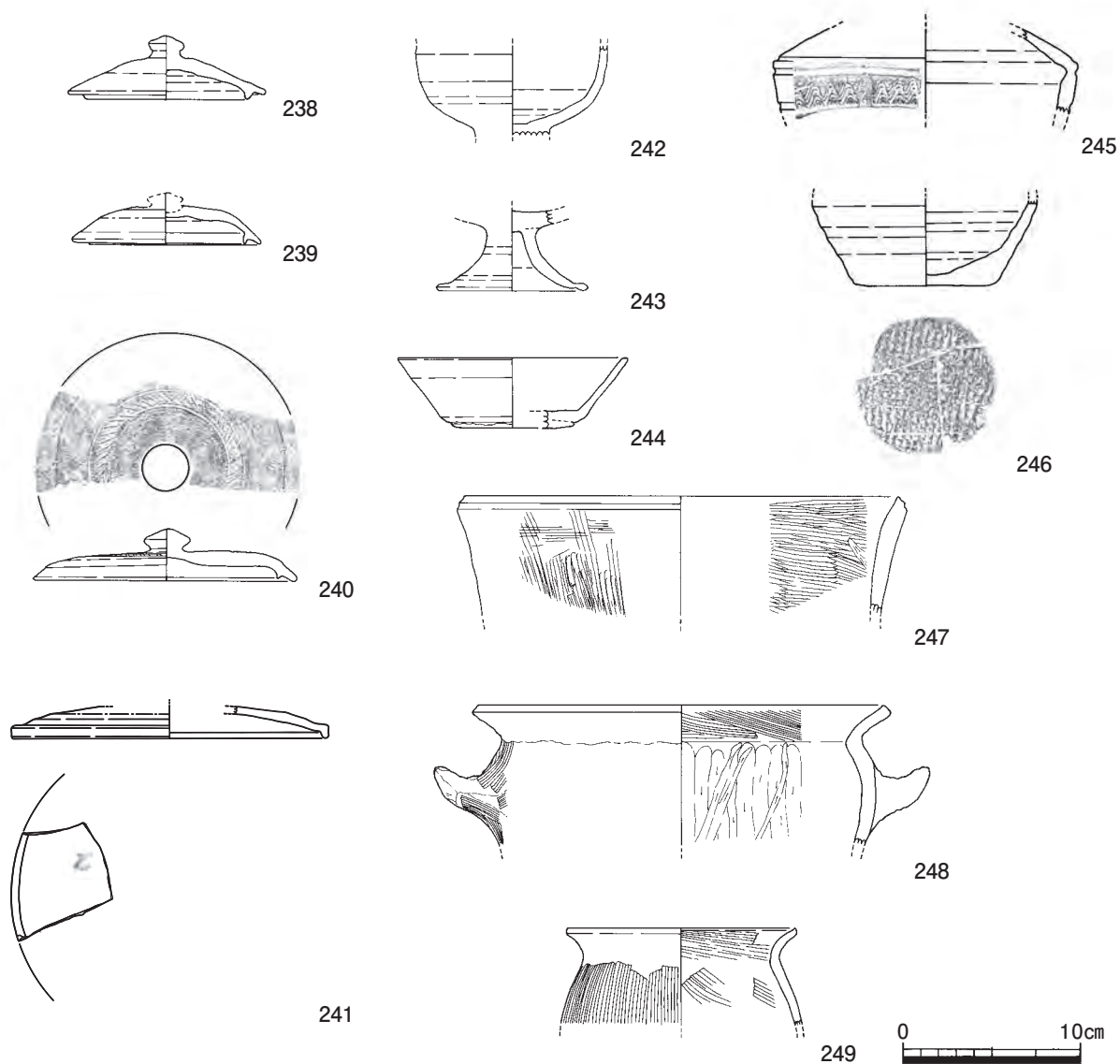


图66 包含層出土遺物 (S=1/4)



写真141

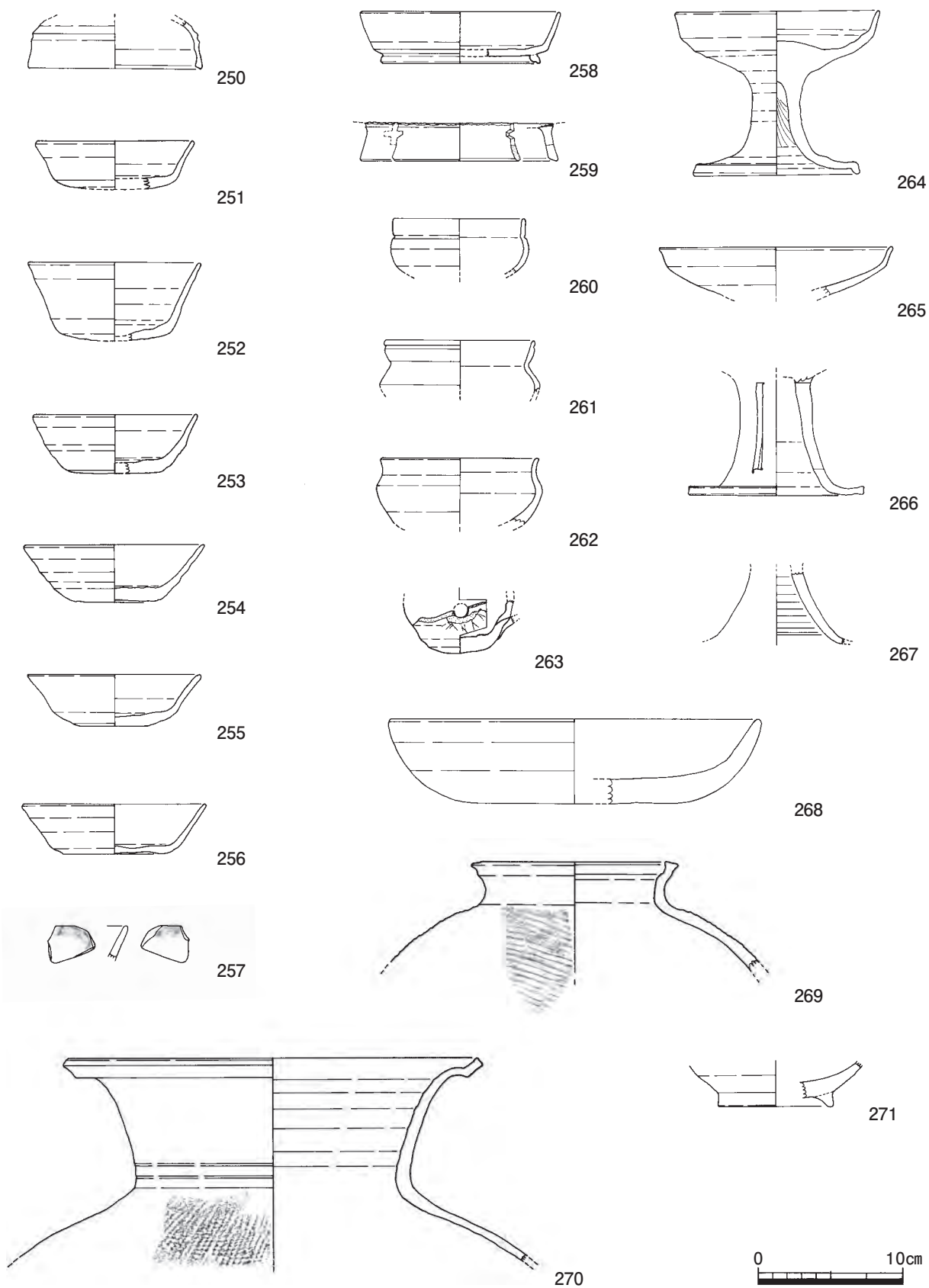
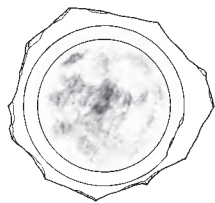
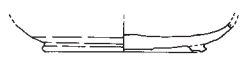


図67 包含層出土遺物 (S=1/4)

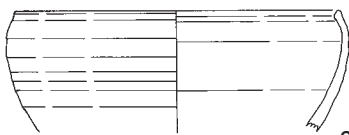


写真142

下水1区



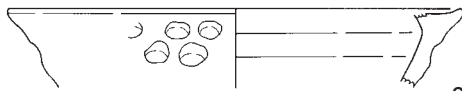
272



273



274

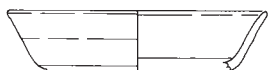


275

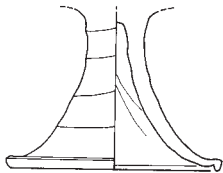


276

下水2区

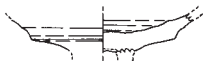


277

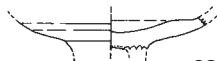


278

下水3区



279



280

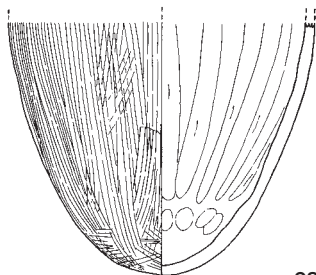


成

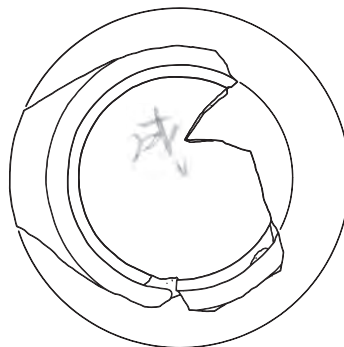
下水4区



281



283



284

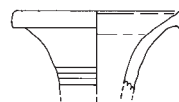
下水5区



285



287

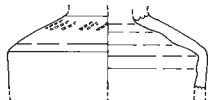


288

下水6区



289



293



295



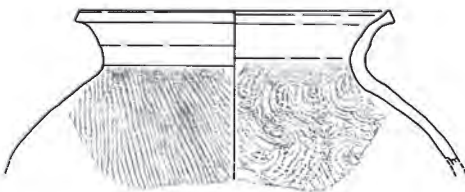
290



291



292



294



296



図68 包含層出土遺物 (S=1/4)



写真143

下水7区・AS1E5



297



301



305



298



302



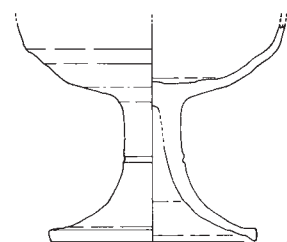
306



299



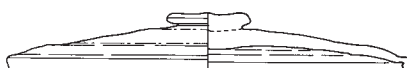
303



307



300

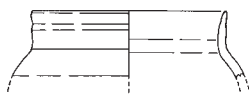


304

下水8区



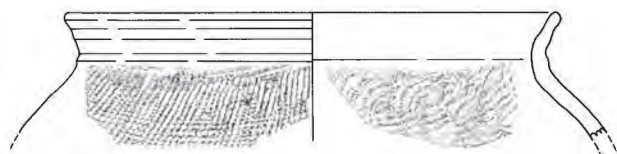
308



309



310



311



312

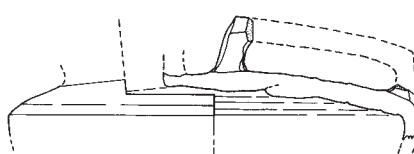
下水9区



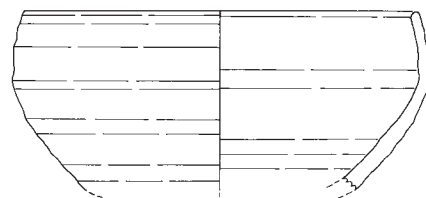
313



314



315

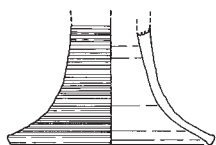


316

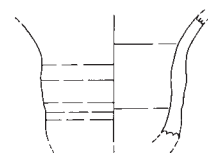
下水10区



317



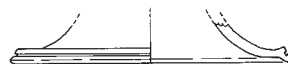
320



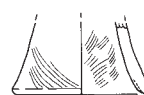
323



318



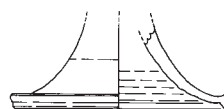
321



324



319



322

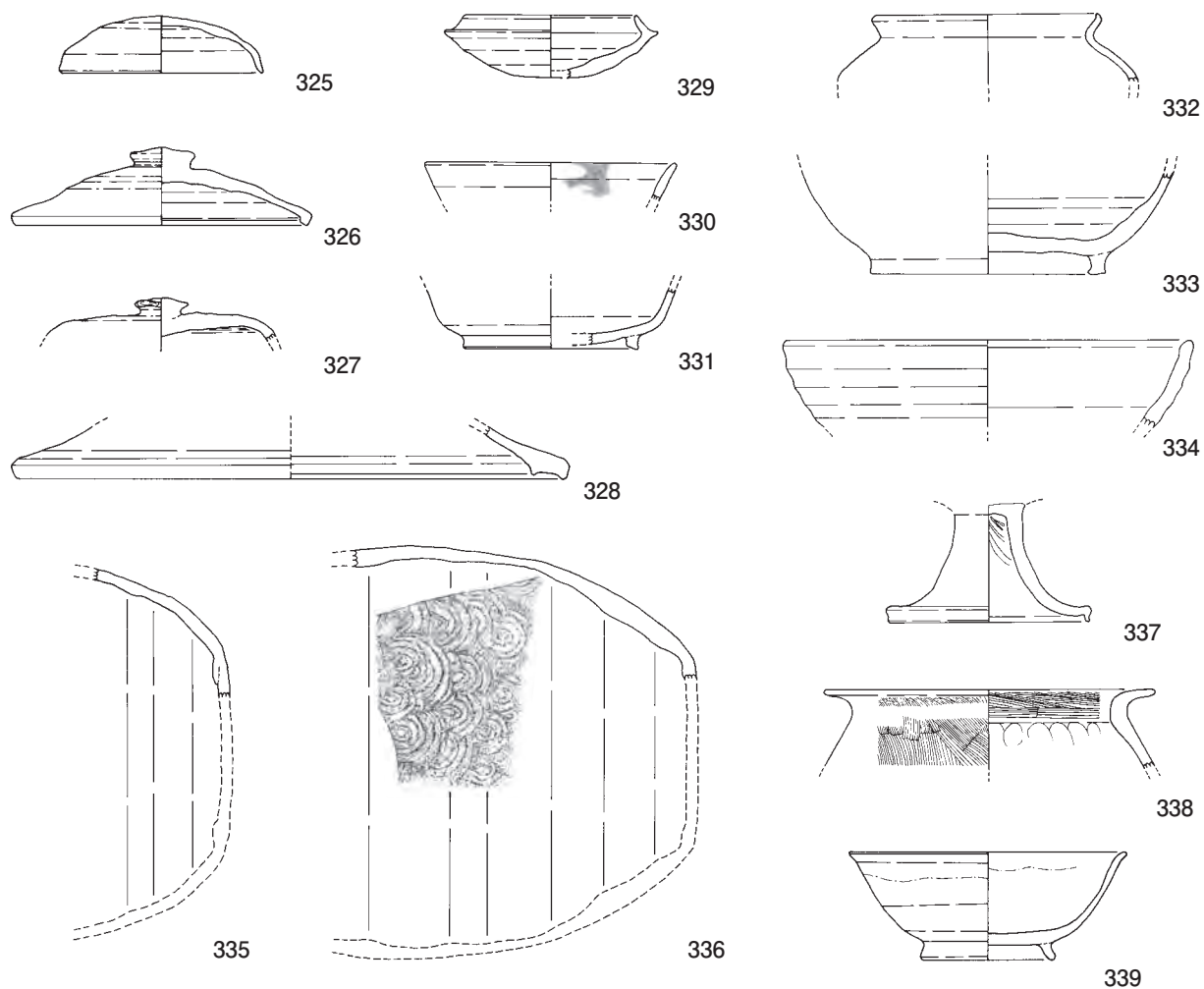


図69 包含層出土遺物 (S=1/4)



写真144

G 地区



第9・10トレンチ(1)

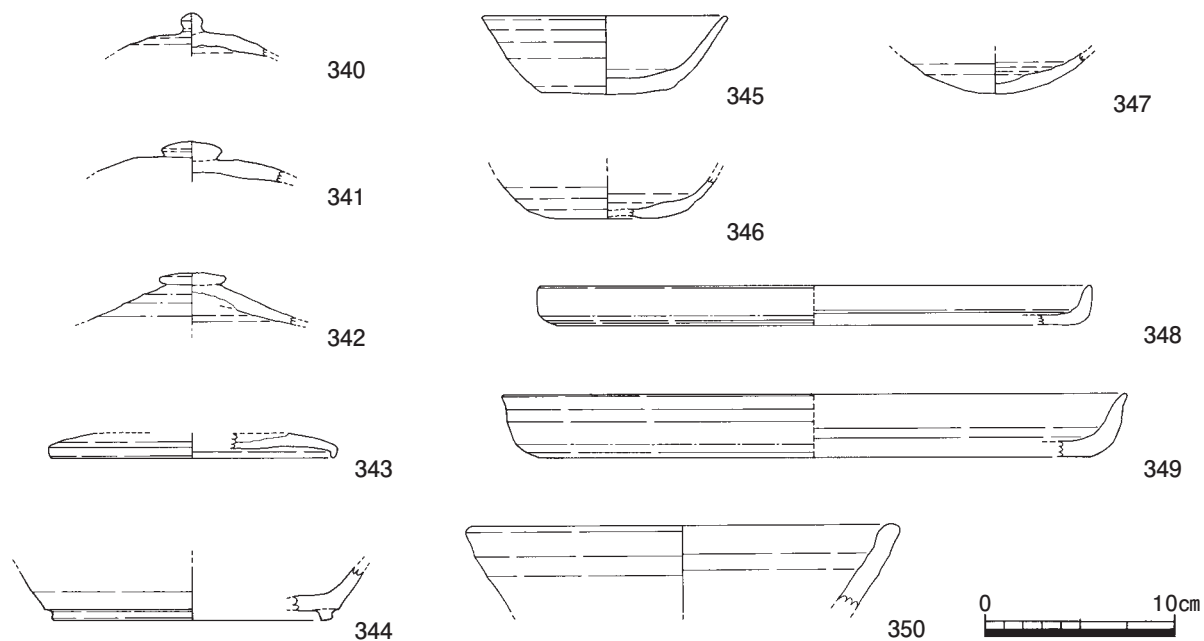
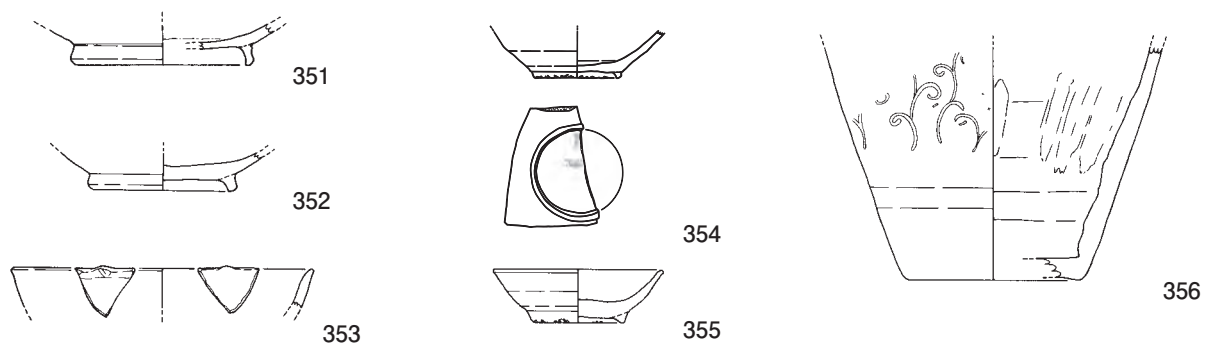


図70 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)

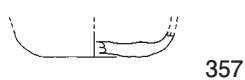


写真145

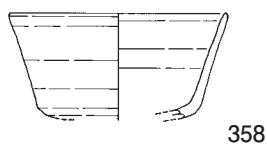
第9・10トレンチ(2)



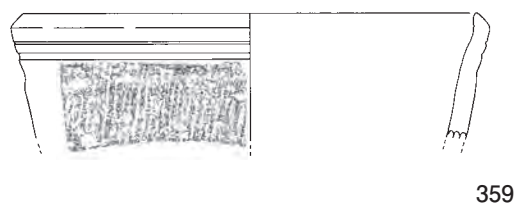
第13・14トレンチ
SD1



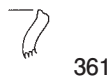
SD3



建物⑩ (ME7 SK18)



鍛冶遺構 8 の上面



第13・14トレンチ 包含層

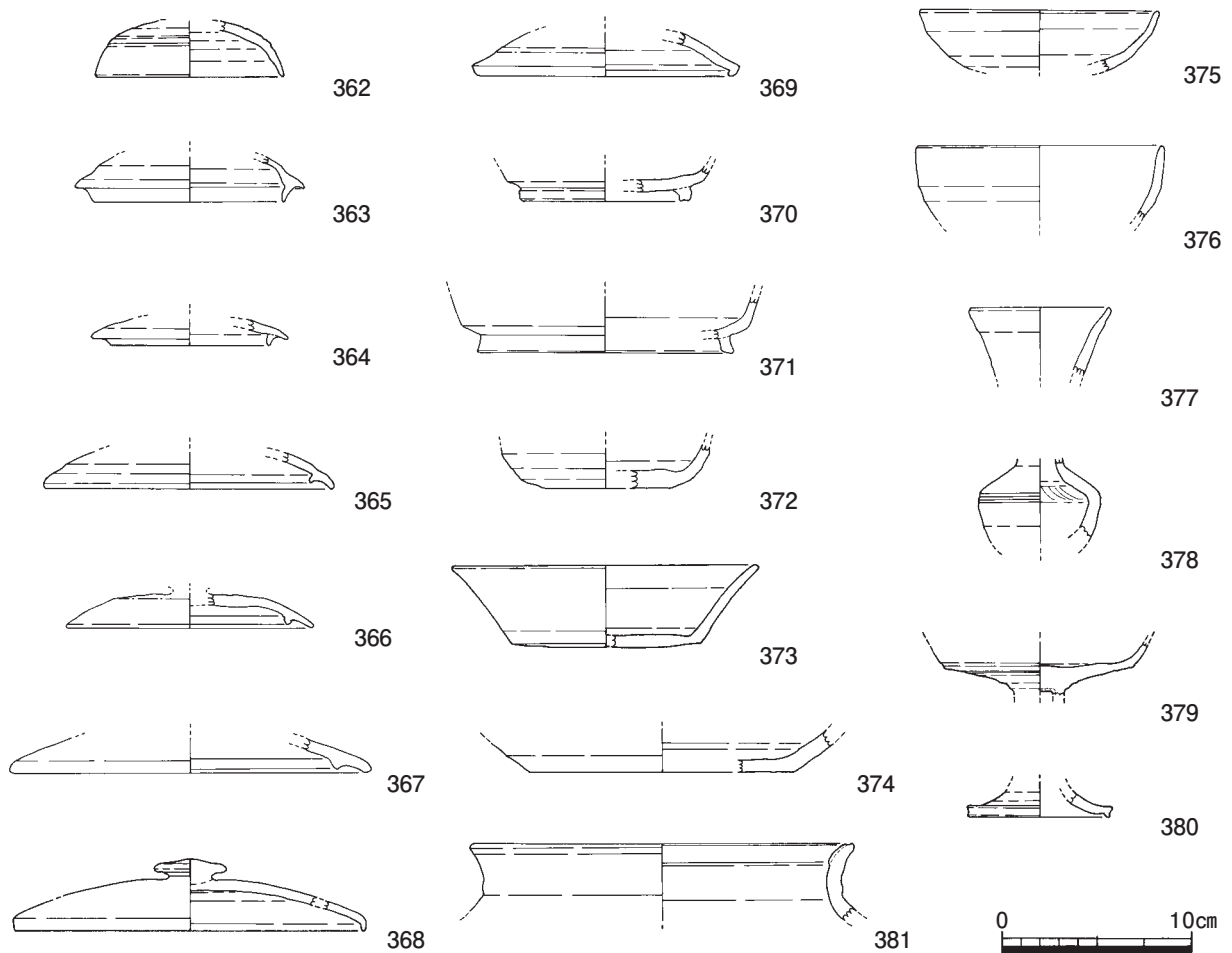
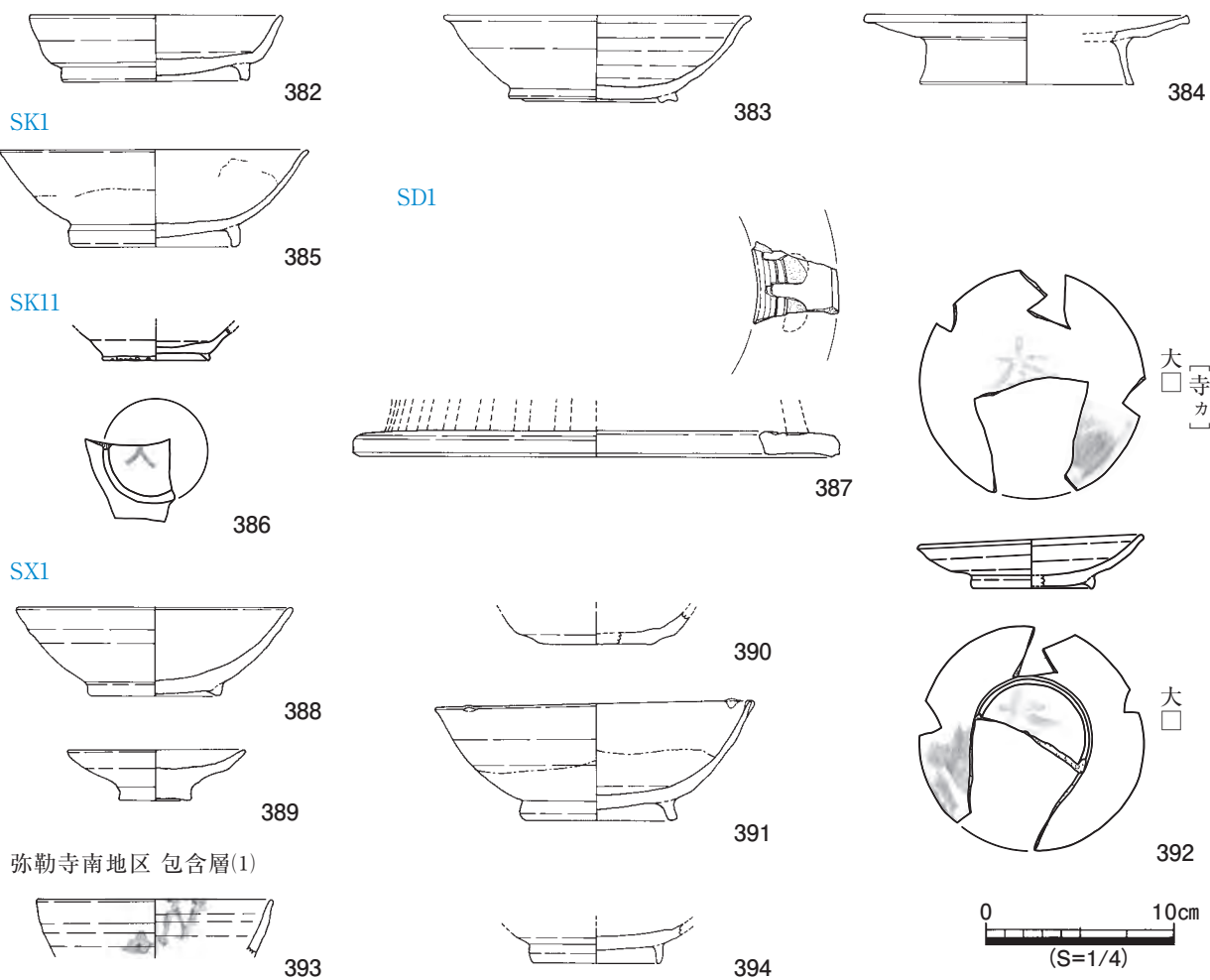


図71 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)



写真146

弥勒寺南地区
SK15



弥勒寺南地区 包含層(1)

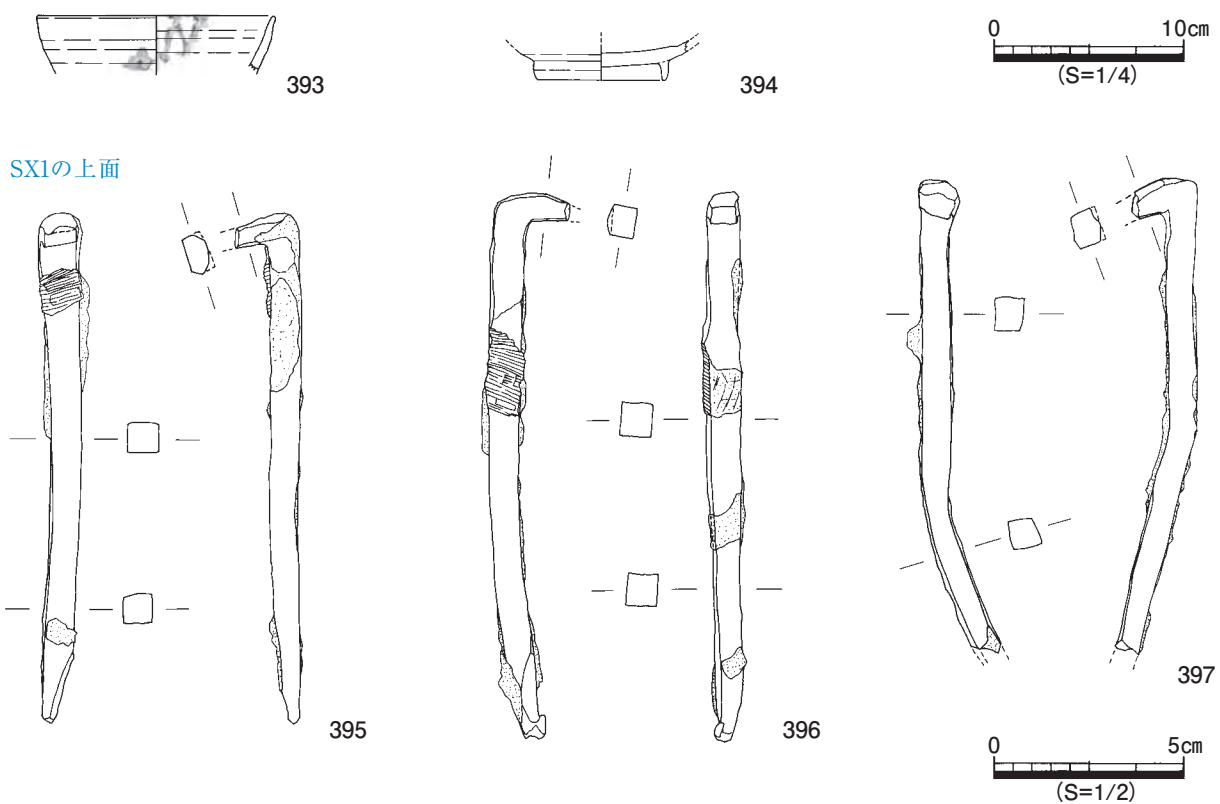
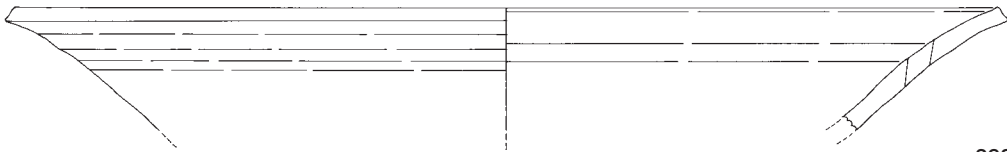


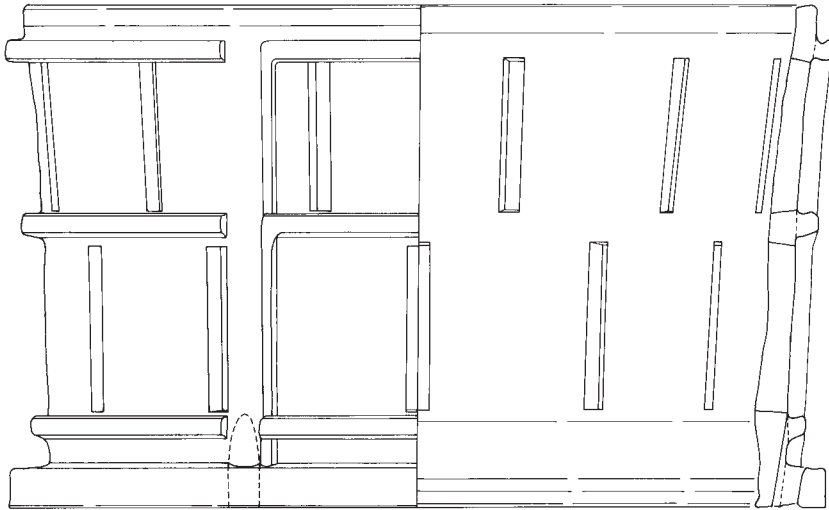
図72 遺構・包含層出土遺物



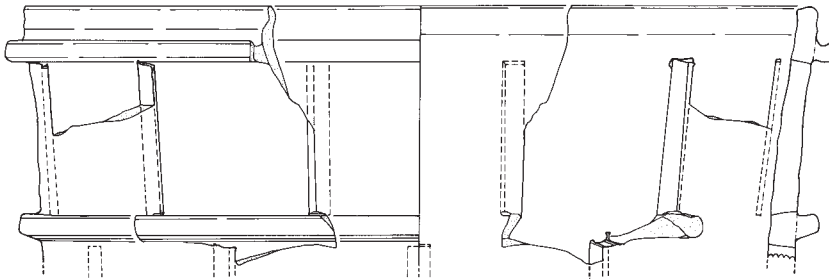
写真147



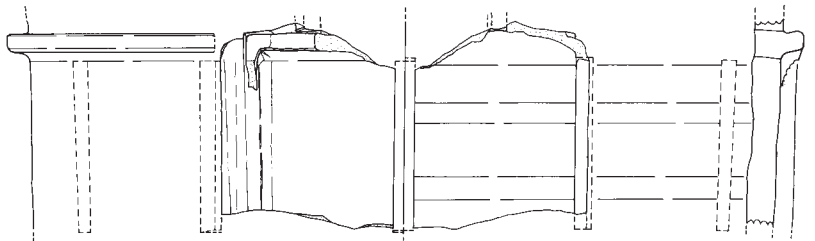
398



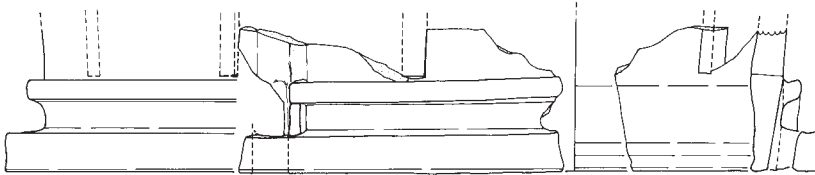
399 復元



399-1



399-2



399-3



图73 包含層出土遺物 (S=1/4)



398



399

写真148

A·F地区 精製土師器 (1)

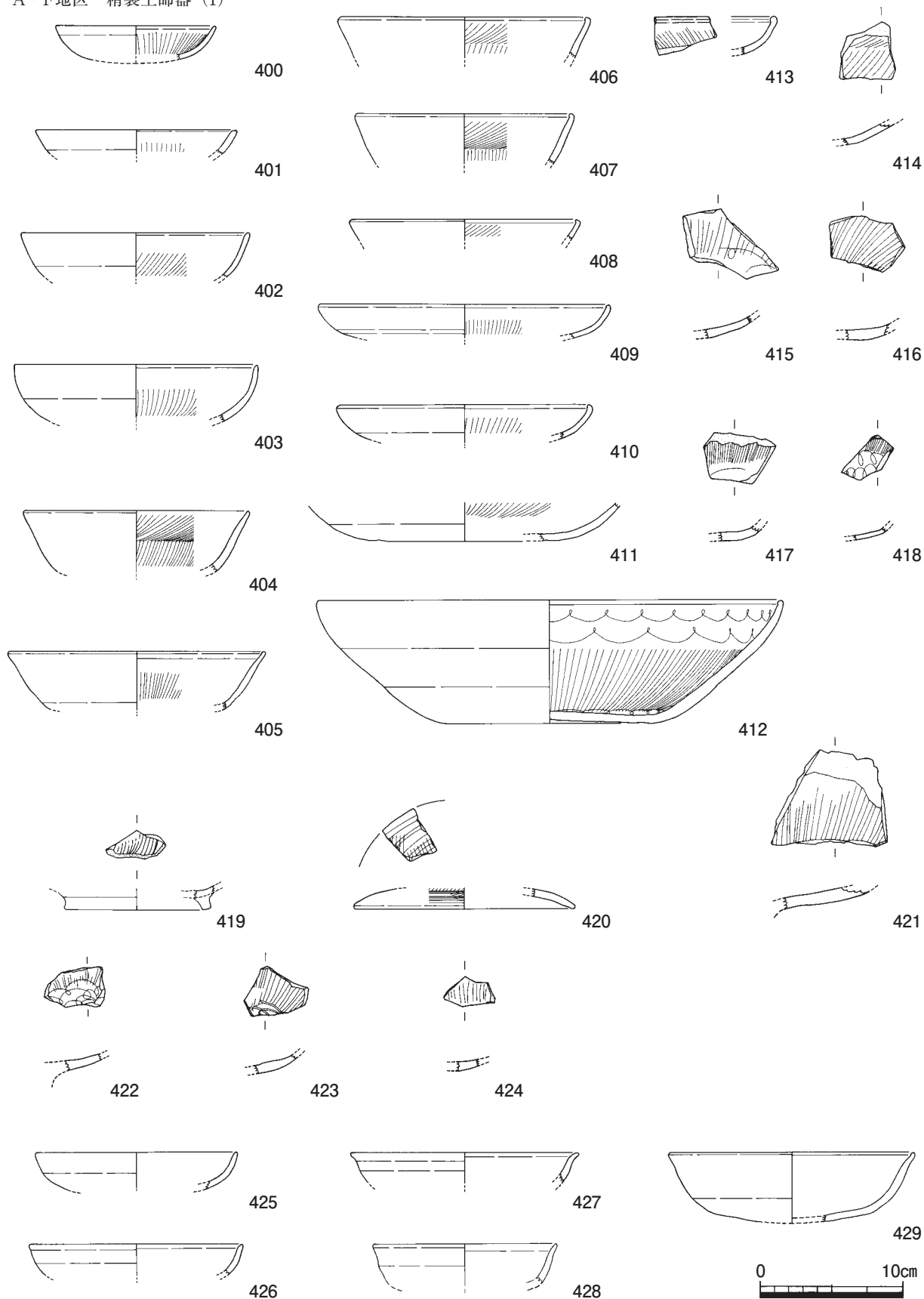


図74 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)

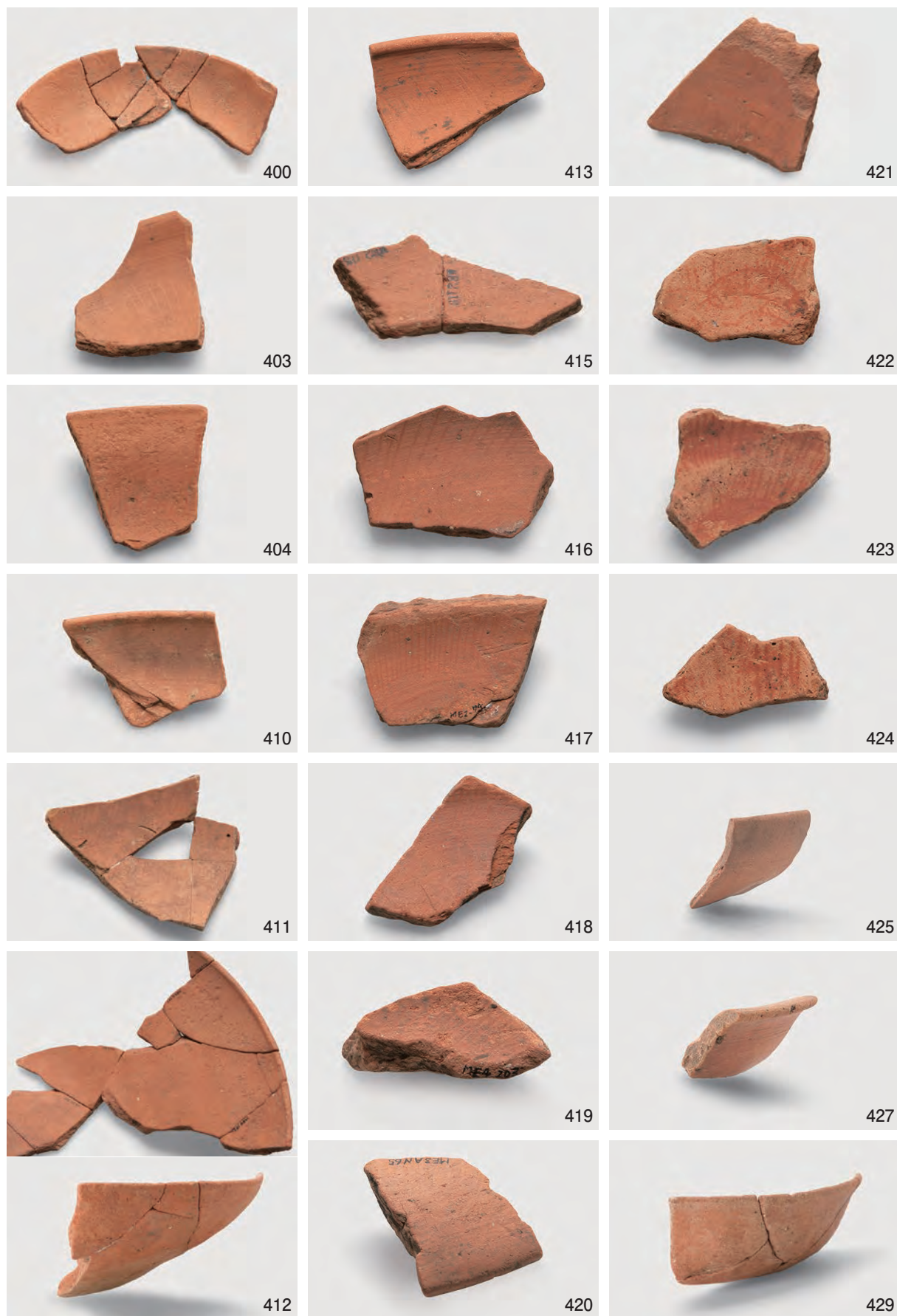
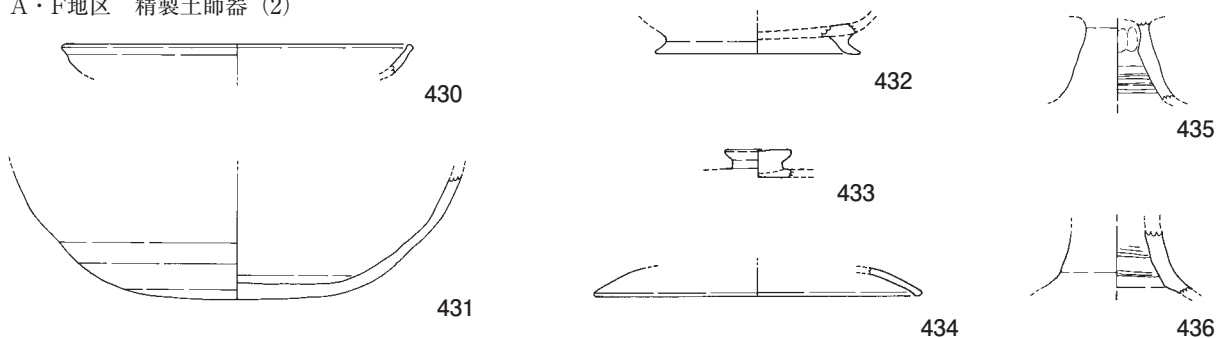
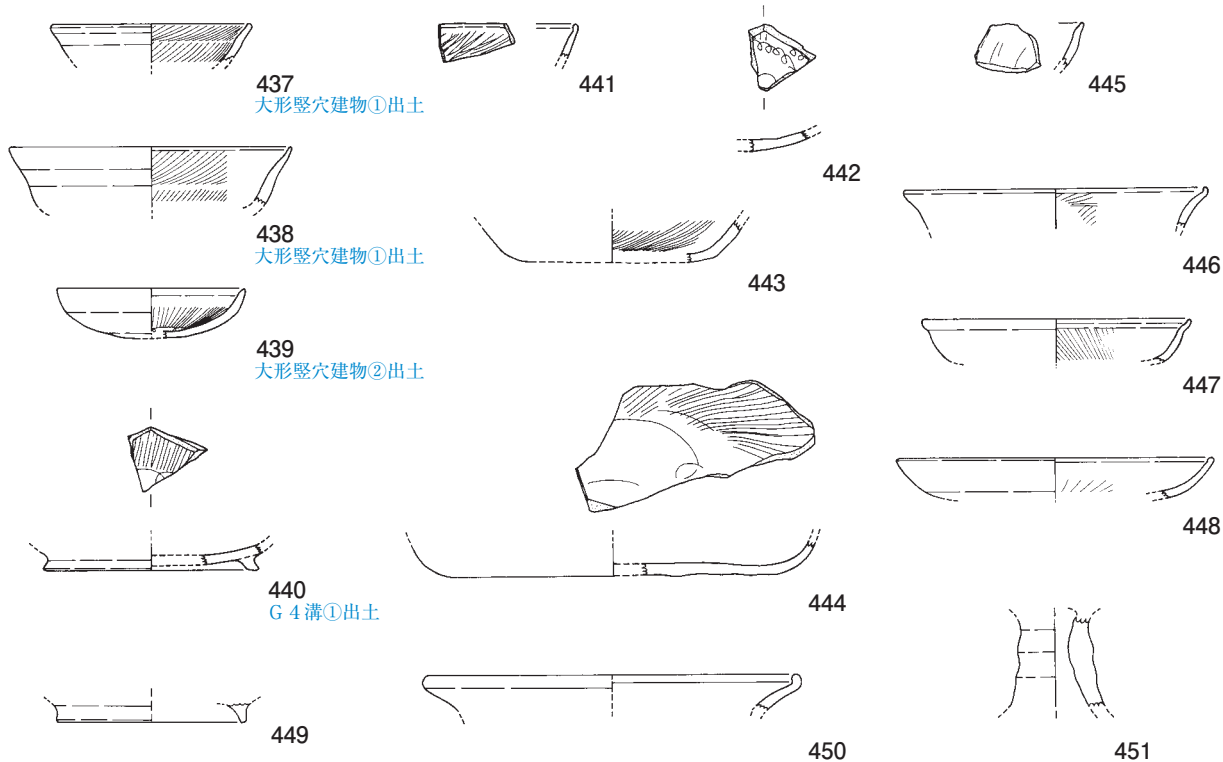


写真149

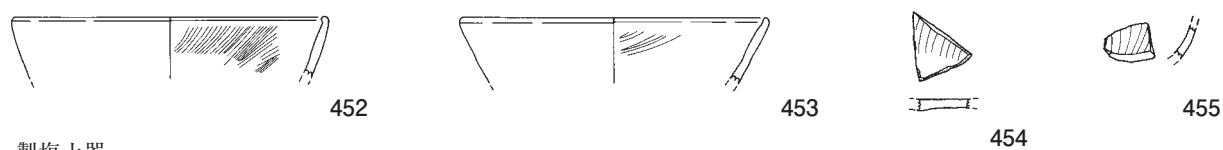
A・F地区 精製土師器 (2)



G地区 精製土師器



第13・14トレンチ 精製土師器



製塩土器

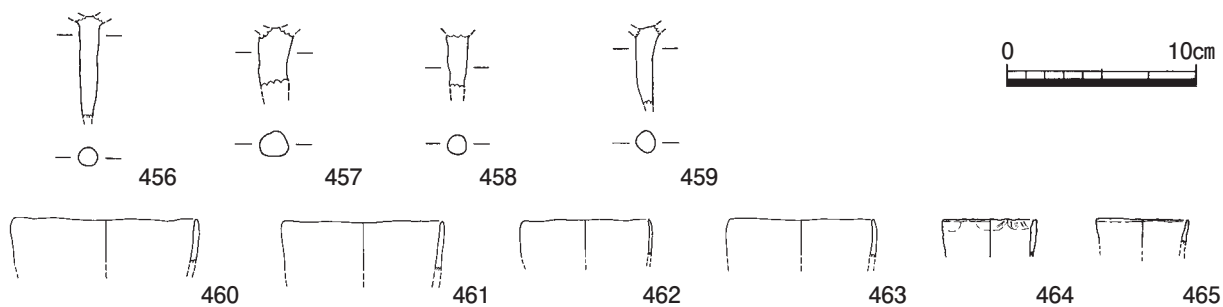


図75 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)

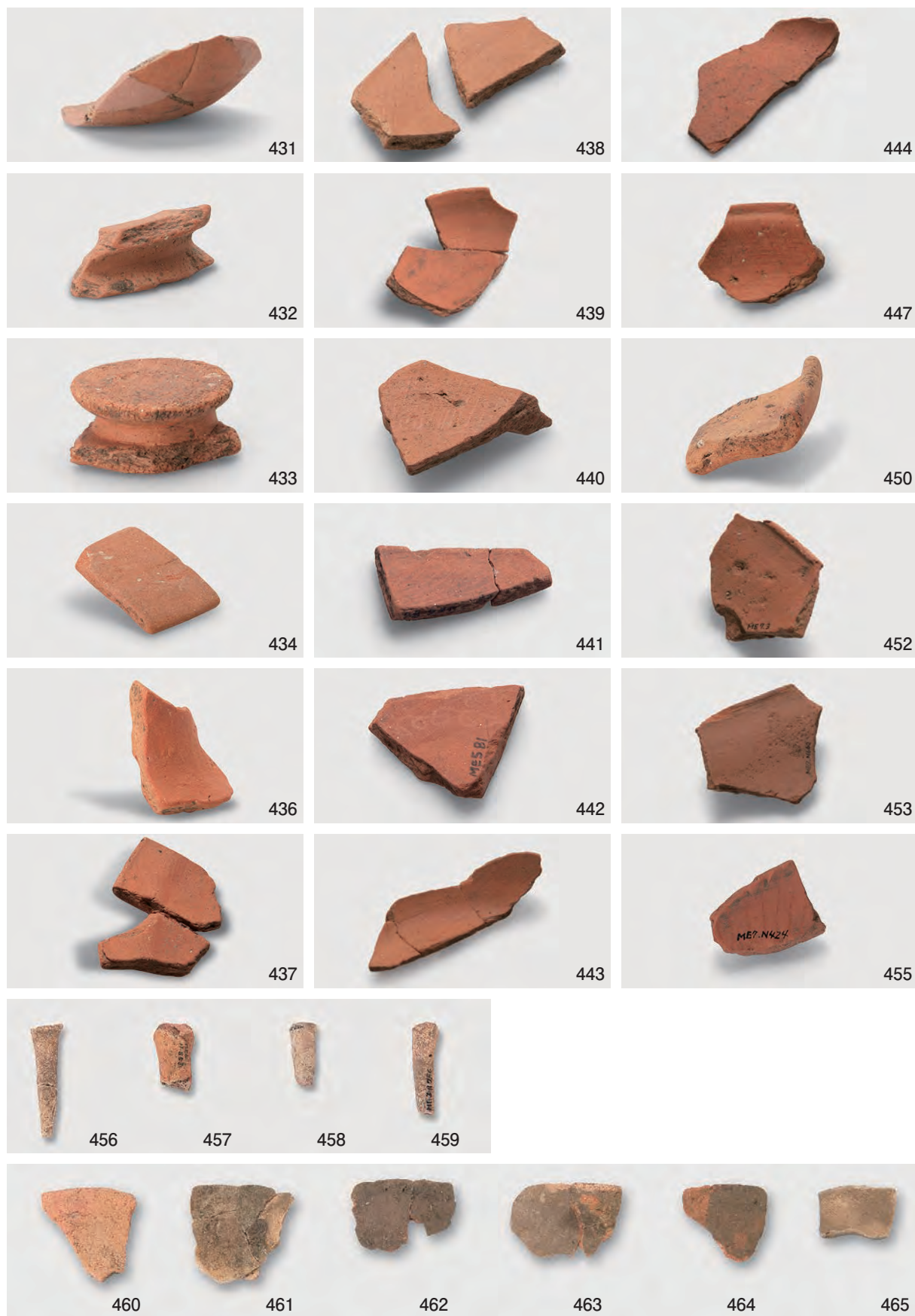
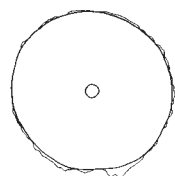
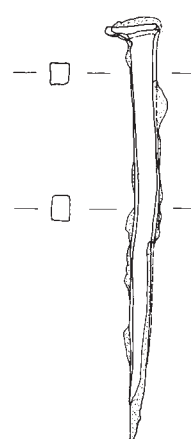
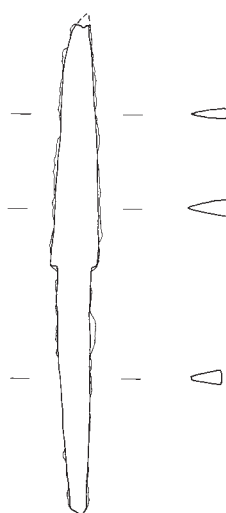
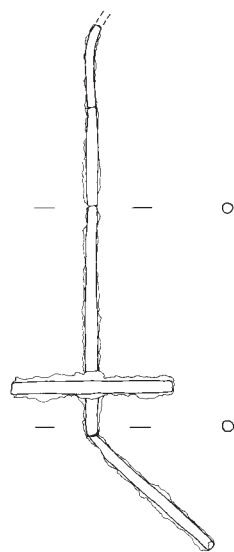


写真150

鉄製品
AN6E9 2層

G4 SK41

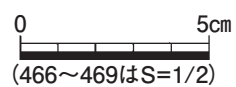
AN6E9 2層



466

467

468



石製品
F区3層

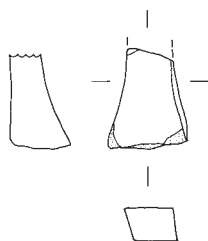
AS5E1 3層

AN6E10 2層

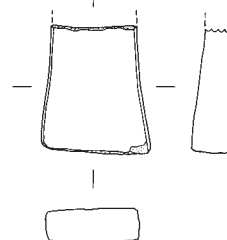
G4 AN4W6 1層



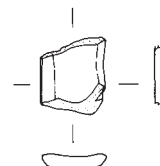
469



470



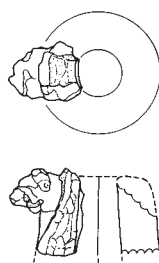
471



472

羽口
鍛冶遺構7

鉄滓



473

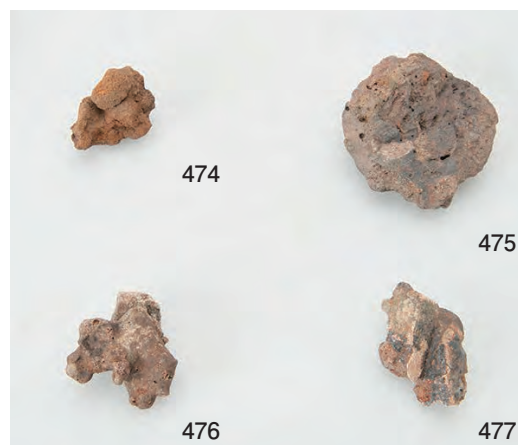


図76 遺構・包含層出土遺物

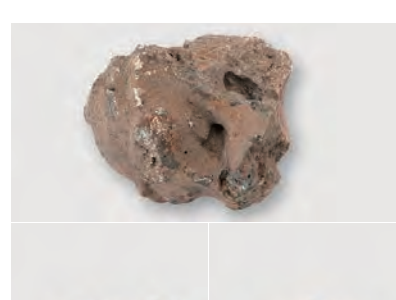


写真151

和鏡
B地区 S4E27 SK6



保存処理後実測



復元模式図

図77 遺構出土遺物 (S=1/1)



478



文様構成



出土状況

写真152

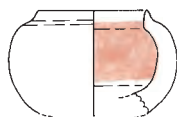
B・D地区 中世以降の遺構に伴う遺物 (1)

S12E32 SD3



479

S 8 E 33 SD3



480

S7E27 SK2



488

S14E24 SK2・3



489

S 10 E 30 SK1



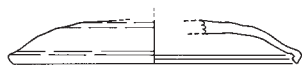
490

S 8 E 30 SD2



491

S5E35 SK1・2



481

S8E32 SD3



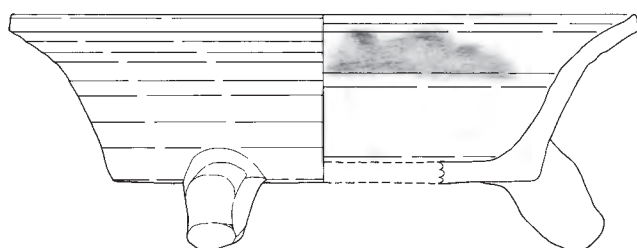
482

S13E22 P



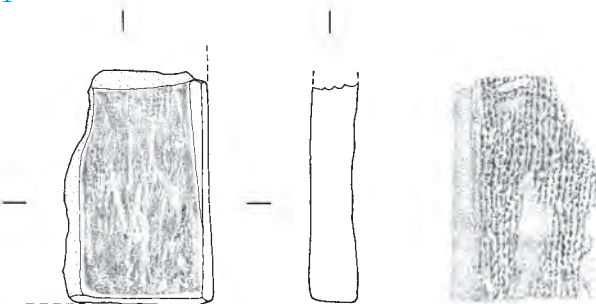
483

S13E22 P



487

後世溝 1



492

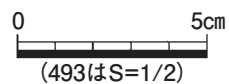


(S=1/4)

S9E32 SD3



493



(493はS=1/2)



494

(S=1/1)

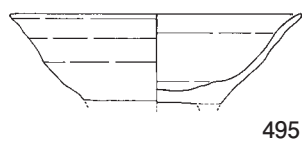
図78 遺構・包含層出土遺物



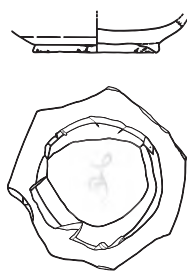
写真153

B・D地区 中世以降の遺構に伴う遺物 (2)

S4E39 SK1



495

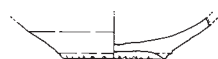


496

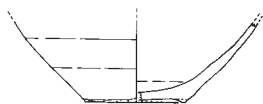


497

S10E30 SD2



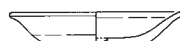
498



499



500



502



504



501



503

S10E30 SK1, S11E30 SK1



505

S10E30 SK1



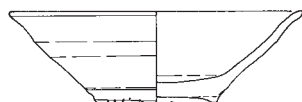
506

S11E30 SK1



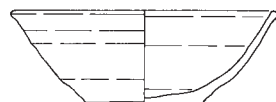
507

S5E30 SK1



508

N3E33 SK16



509



510

N2E25 SK1

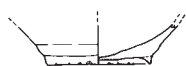


512



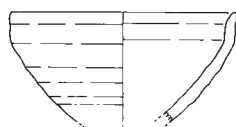
513

S15E25 SK1



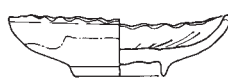
511

S13E25 後世溝 2



514

S8E32 SD3



515

N2E26 P1



516

S11E31 SD3の流れ



517



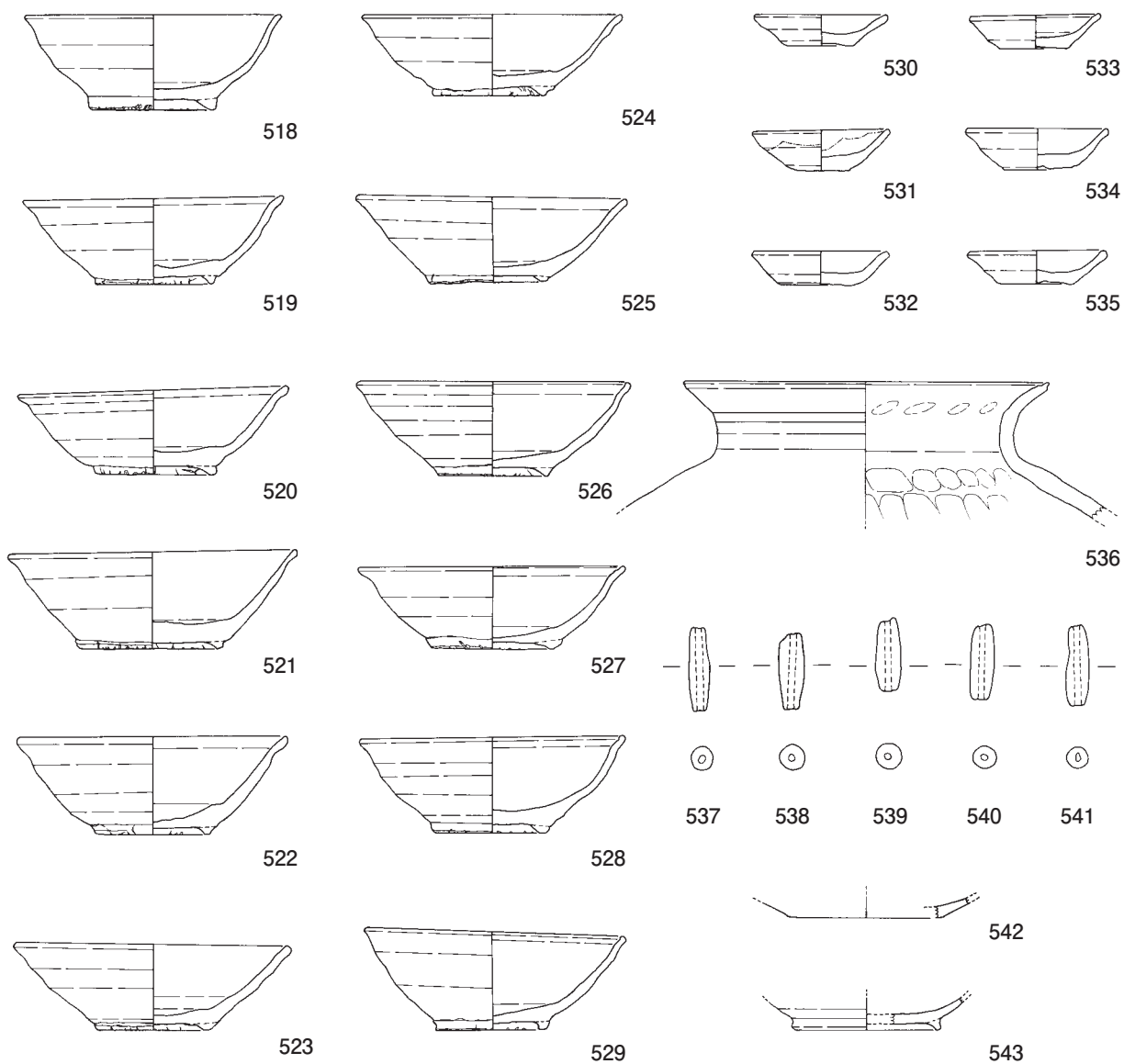
図79 遺構出土遺物 (S=1/4)



写真154

B・D地区 中世以降の遺構に伴う遺物 (3)

S5E39 SK1



C地区 中世以降の遺構に伴う遺物

S12E15 SK2

S11E15 SK2

S11E15 SK1

S17E15 SK

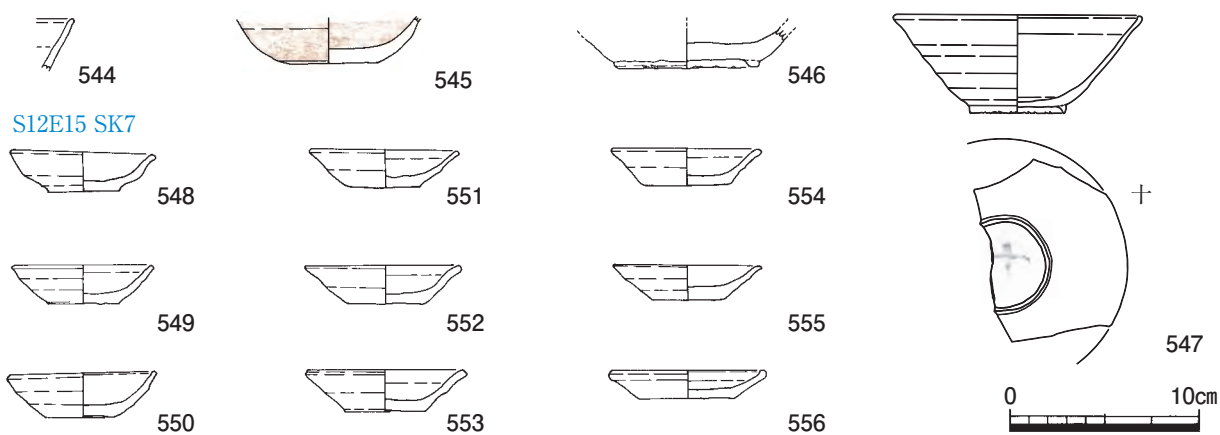


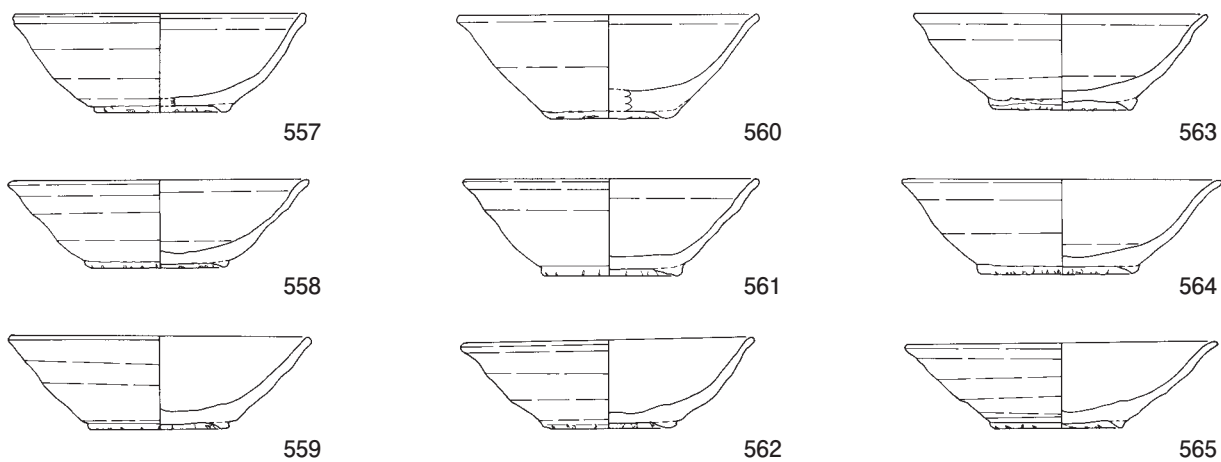
図80 遺構出土遺物 (S=1/4)



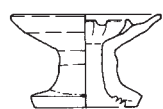
写真155

F 地区 中世以降の遺構に伴う遺物

F 1 F区 土坑



ANIE1 SK2



566

下水8・9区 SK5



567

F 地区 包含層

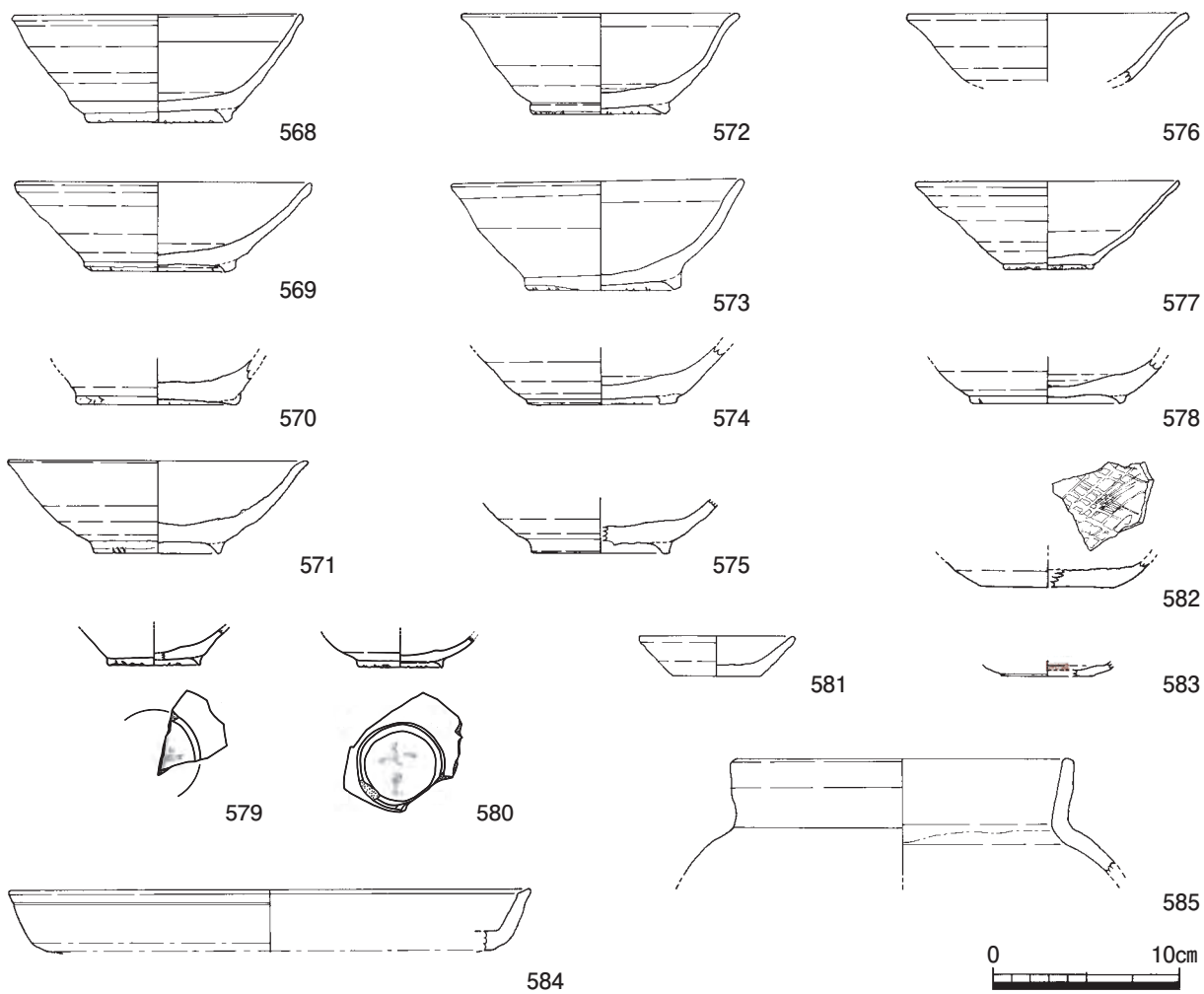
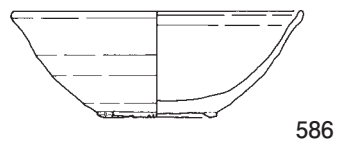


図81 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)

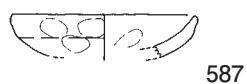


写真156

第1トレンチ

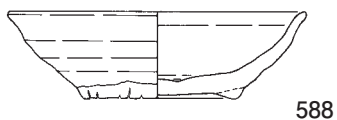


586

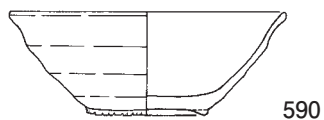


587

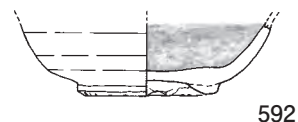
G地区



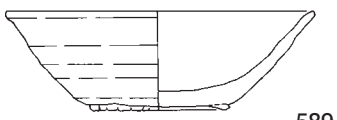
588



590



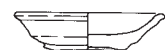
592



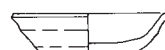
589



591



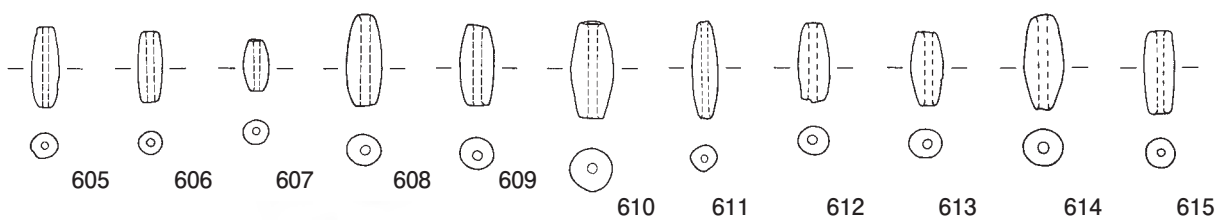
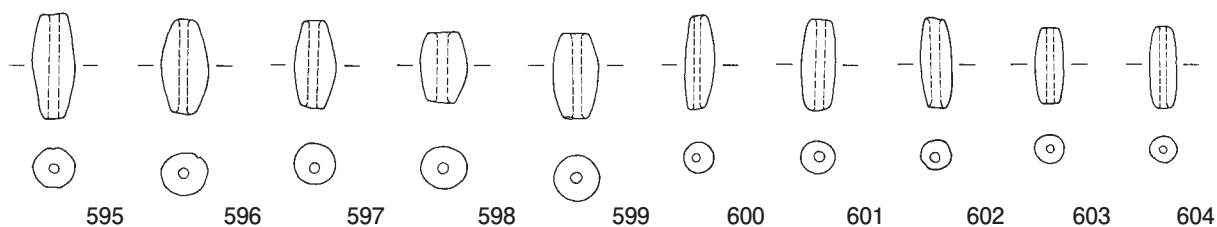
593



594

3 その他

土錘



縄文土器 (1)

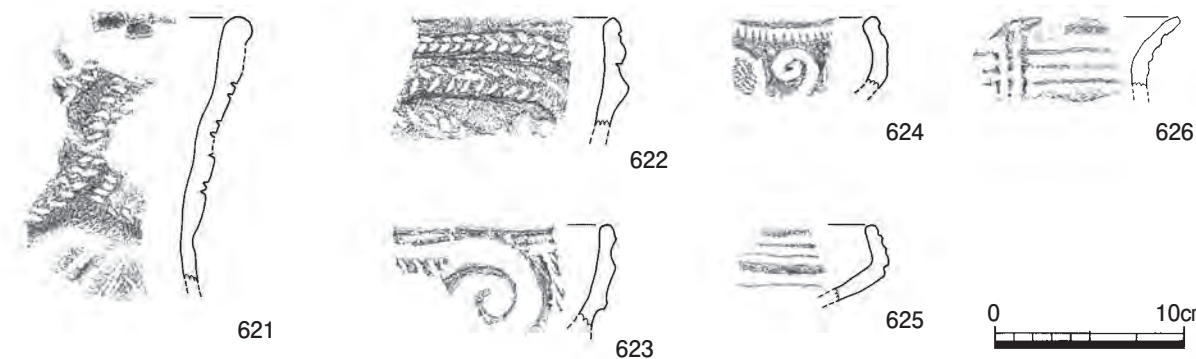


図82 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)



写真157

縄文土器 (2)

石器 (1)

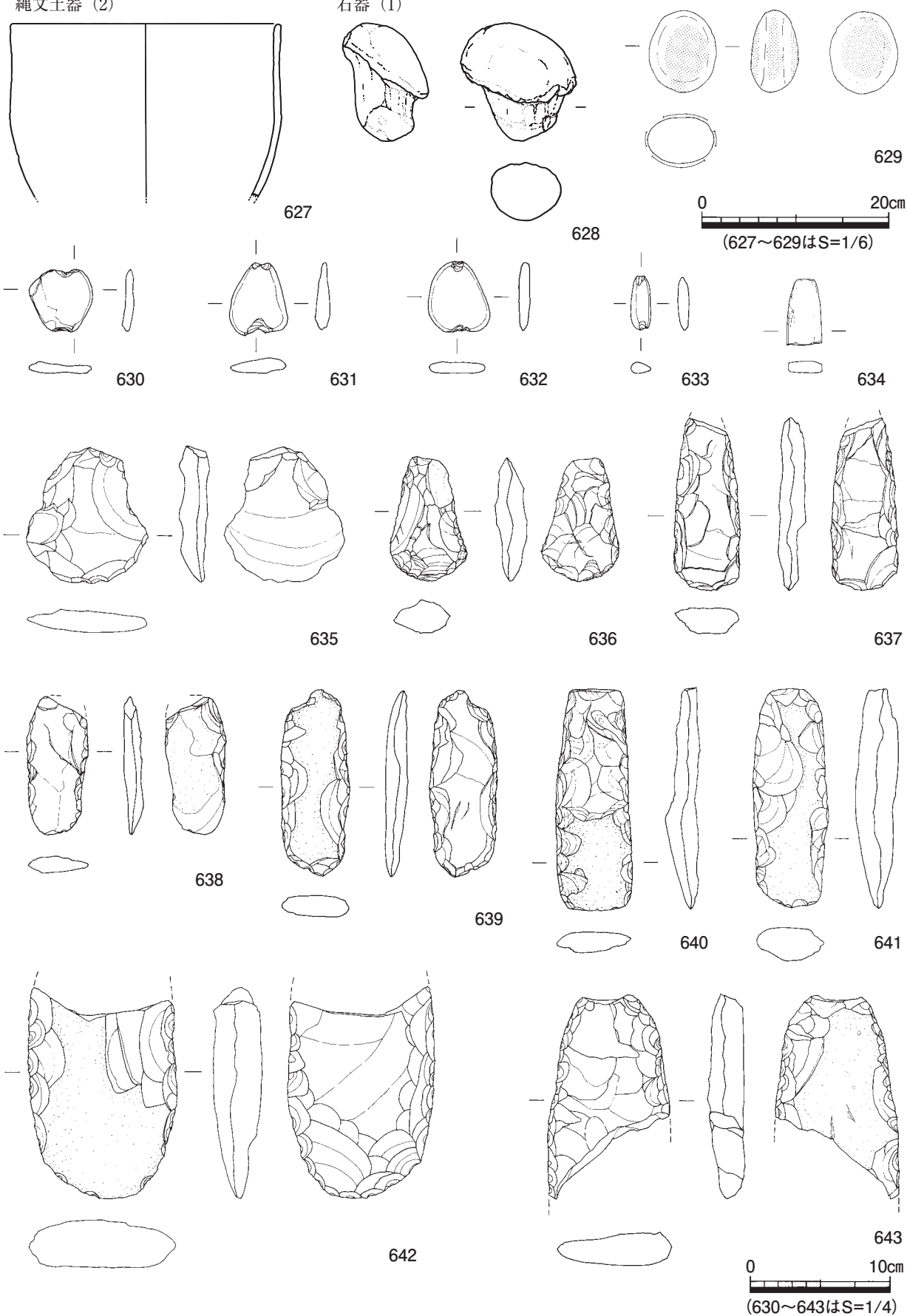


図83 遺構・包含層出土遺物

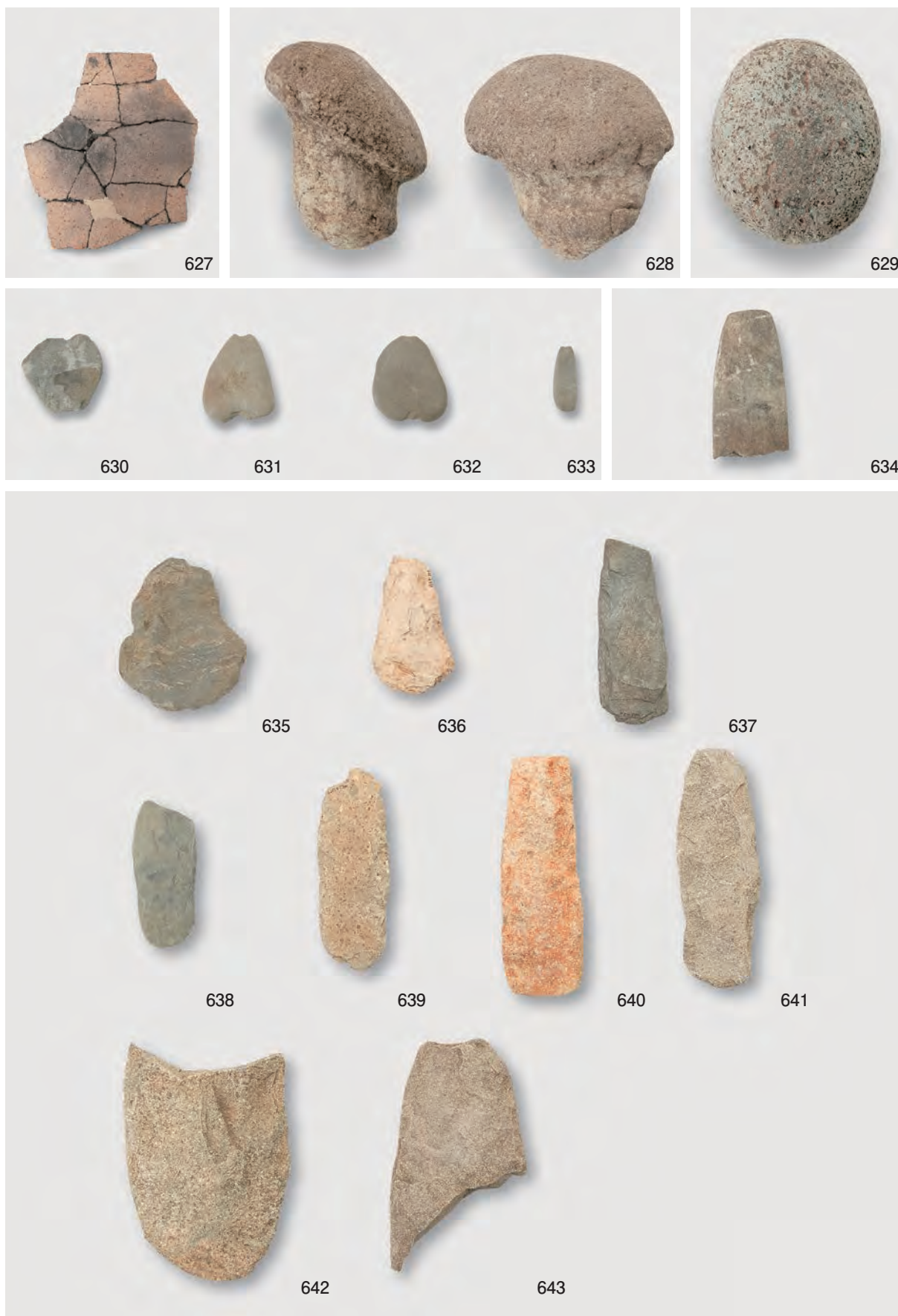


写真158

石器 (2)

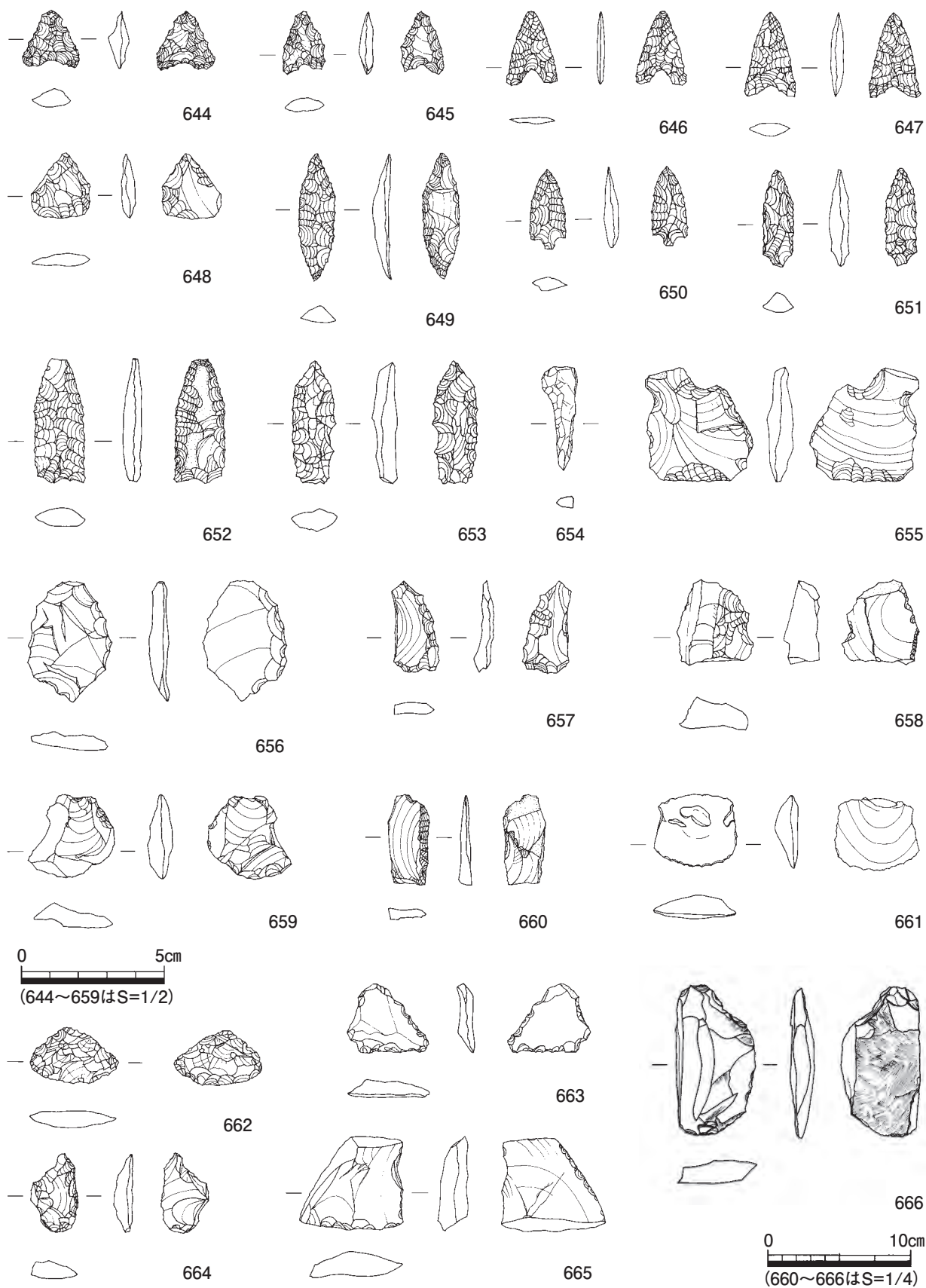
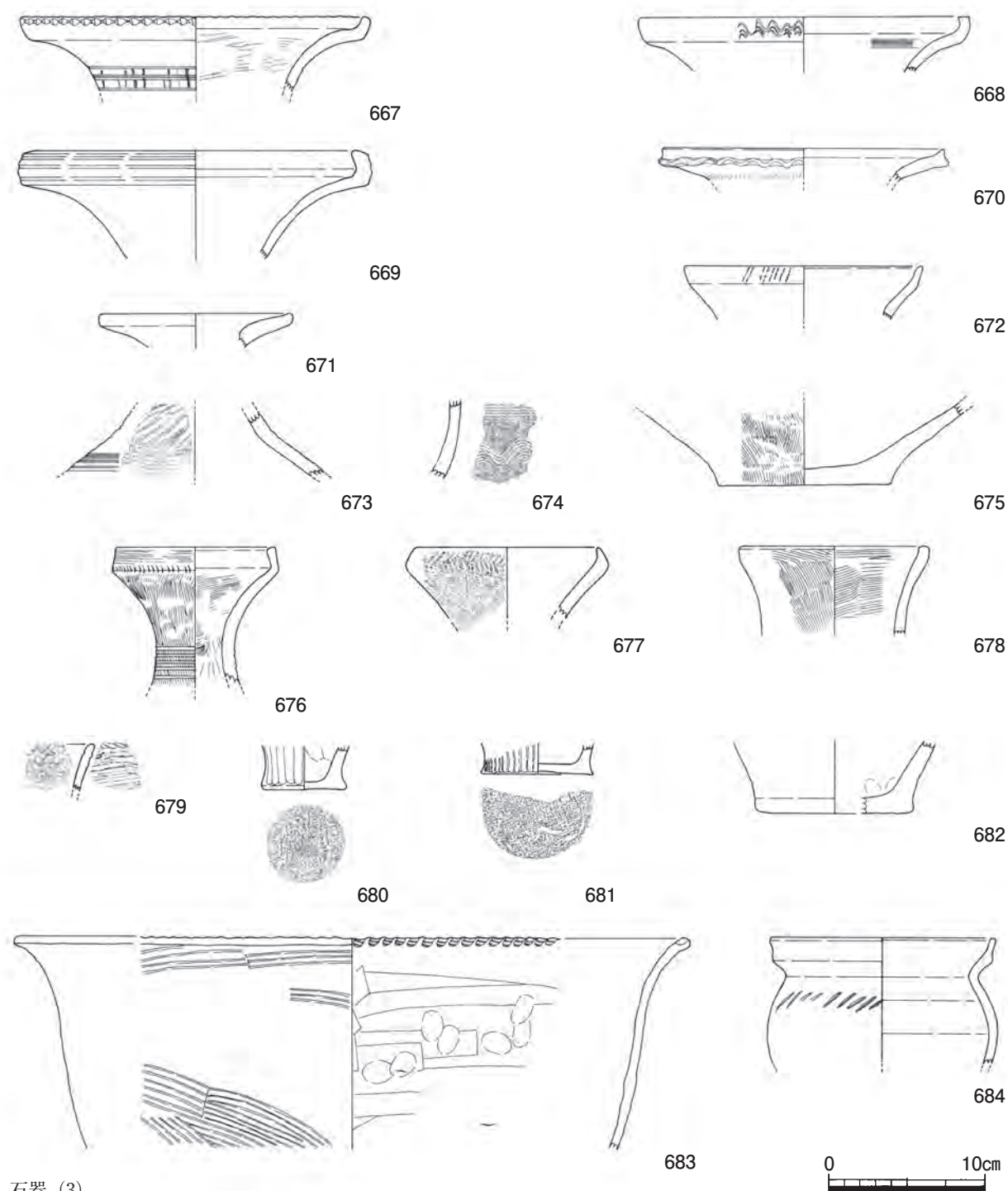


図84 遺構・包含層出土遺物



写真159

弥生土器



石器 (3)

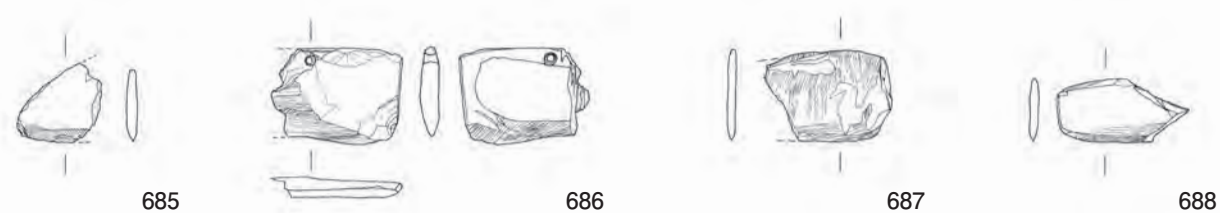


図85 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)



写真160

表2 掲載出土遺物 (1)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
55	1	ME5	須恵器 蓋 (かえりあり)	F2E, F4E2		排水路①・土塁上	F5	121, 130	1/5残存		宝珠つまみ
55	2	ME4 ME2	須恵器 蓋 (かえりあり)	F2, F2E, AN7E8	溝 3層	排水路①・土塁上	676	72, 124, 655, 33 (ME2)	口縁部1/3残存		
55	3	ME4	須恵器 蓋 (かえりあり)	F2E	溝上部 こげ茶層	排水路①・土塁上		114	端部のみ1/8残存		
55	4	ME4	須恵器 蓋 (かえりあり)	F2	SD1	排水路①・土塁上	633		1/6残存 つまみ欠損		
55	5	ME4	須恵器 蓋	F2E	溝内	排水路①・土塁上		124	口縁部1/4残存		胎土 暗褐色 灰が被った箇所は赤茶褐色 朱色のロクロひき線
55	6	ME4	須恵器 蓋	F2	SD1, 暗褐色最上	排水路①・土塁上	647, 320		端部のみ1/3残存		
55	7	ME4	須恵器 蓋	F2E	溝内	排水路①・土塁上		124	端部欠損1/2残存		
55	8	ME4	須恵器 蓋	F2E	溝部西あぜ下層	排水路①・土塁上		655	端部欠損1/2残存		
55	9	ME5	須恵器 蓋	F3E5	こげ茶北石列の北側	排水路①・土塁上	F30		端部欠損 1/4残存	転用硯	内面滑らかで若干墨付着 擦痕あり つまみ頂部も滑らか
55	10	ME4	須恵器 蓋	F2	褐色土	排水路①・土塁上	387		天井部残存 つまみ3/4残存		焼成不良
55	11	ME4	須恵器 無台坏 (かえりあり)	F2, F3		排水路①・土塁上	233, 381, 252, 182, 19, 12		口縁部1/4残存		型起こしの段差明瞭
55	12	ME4	須恵器 無台坏	F2E	溝上部 2層	排水路①・土塁上		123, 121	口縁部1/8残存		ヘラ起こし
55	13	ME4	須恵器 無台坏	F1, F2		排水路①・土塁上	467, 617, 345, 136, 630, 165, 258, 249	27	口縁部1/4残存		ヘラ起こし
55	14	ME4	須恵器 無台坏	F2E	溝内	排水路①・土塁上		124	口縁部から底部 1/2残存		焼成不良 ヘラ起こし
55	15	ME4	須恵器 高台坏	F2, F2E	溝部黄褐色土 SD1	排水路①・土塁上	353, 671	649	ほぼ完形		
55	16	ME4	須恵器 高台坏	F3, F2E, F3E, F4E	溝上部 礫間	排水路①・土塁上, 排水路②	128	316, 134, 123	口縁部1/5残存		口縁端部若干反する
55	17	ME3 ME5	須恵器 台付壺	F3E5, AN4E9		排水路①・土塁上	F30 (ME5) A860 (ME3)		底部から台部にかけて残存 台部一部欠損		
55	18	ME2 ME4	須恵器 鉢	F2, F2・3W, AN9E8	SD1	排水路①・土塁上	646, 641, 638, 388, 423, 660, 661	303, 132, 116, 31, 302, 14 (ME2)	口縁部1/3残存		器形にゆがみあり 薄手のづくり
55	19	ME5	須恵器 捏鉢	F2・3E4		排水路①・土塁上	F15, F44, F24, F3, F40	217	1/2残存		底部と底板側面に刺突
55	20	ME3 ME4 ME5 ME6	須恵器 双耳瓶	AN2E9 F2 A・F区	SK SD1	排水路①・土塁上	A1049 (ME3) 113, 658, 380 (ME4) 436 (ME4)	85 (ME3) 296 (ME3) 116 (ME4) 135 (ME5) 187 (ME6)	胴部一部残存 耳1ヶ残存		
55	21	ME4	須恵器 高坏	F2	溝部、西あぜ中位層	排水路①・土塁上	648, 669	72, 649	脚部一部欠損		透かしなし
55	22	ME4	青磁 碗	F2	黄色土	排水路①・土塁上	334		体部細片		
55	23	ME4	須恵器 蓋 (かえりあり)	F3・4E	SD2	排水路②			口縁部細片		
55	24	ME4	須恵器 蓋	F3・4E	SD2	排水路②			口縁部細片		
55	25	ME4	須恵器 蓋	F3・4E	SD2	排水路②			口縁部細片		
55	26	ME4	須恵器 無台坏	F3・4E	SD2	排水路②	692	128, 314	1/2残存		底部ヘラ削りをしているが凹凸あり
55	27	ME4	須恵器 無台坏	F3E, SD2	転落石中	排水路②	687	130	2/3残存		底部ヘラ起こしの後ナデ仕上げ
55	28	ME6	須恵器 無台坏	F区	SD2	ME6 SD2	661		1/6残存 口縁部一部残存		
55	29	ME3 ME6	須恵器 短頸壺	AN7E10, F区	SD2, 3層	ME6 SD2	A415 (ME3) A804 (ME3) 557 (ME6) 336 (ME6)		口縁部から胴部 2/3残存 底部欠損		
55	30	ME6	須恵器 蓋	F区	SD3	ME6 SD3	N773, N774		口縁端部1/4残存 つまみ欠損		
55	31	ME6	須恵器 無台坏	F区	SD3	ME6 SD3	772		1/4残存 口縁部一部残存		焼成不良
55	32	ME6	須恵器 坏	F区	SD3	ME6 SD3	N768		口縁部1/10残存	灯明か	側面の内側に煤か油煙付着
56	33	ME3 ME4 ME5	須恵器 把手付甕			排水路②	A1079 (ME3) 694 (ME4) 688 (ME4) 689 (ME4)	139 (ME4) 220 (ME4) 313 (ME4) 314 (ME4) F3・4E SD2 (ME4) 101 (ME5) 144 (ME5) 219 (ME5)	口縁部から胴部 2/3 底部残存 把手欠損		格子目引き 同心円当て具痕
56	34	ME4 ME5	須恵器 把手付甕			排水路②	439 (ME4) 694 (ME4) 443 (ME4) 690 (ME4)	34 (ME4) 130 (ME4) 308 (ME4) 311 (ME4) 314 (ME4) 317 (ME4) 650 (ME4) 660 (ME4) 696 (ME4) 741 (ME4) F3E (ME4) F4E (ME4) 229 (ME5)	口縁部1/2 胴部2/3残存 把手1ヶ欠損		平行叩き目 同心円当て具痕
56	35	ME3 ME4 ME6	須恵器 把手付甕	F4E, 10T1, F4E, AN6E9, F区	SD2, F-35～40, 礫間F-110, 3層	排水路②	A647 (ME3) A646 (ME3) 699 (ME4) 690 (ME4) 697 (ME4) 473 (ME6) 174 (ME6)	51 (ME4) 317 (ME4)	2/3残存 口縁部1/6残存 把手1ヶ欠損		平行叩き目 同心円当て具痕

表2 掲載出土遺物 (2)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考	
							取上番号	一括取上番号				
56	36	ME4	須恵器	甕	F区		排水路②	687, 690, 691	128, 129, 130, 315, 316, 317	ほぼ完形		格子目叩き 当て具痕なし
56	37	ME3 ME4 ME5	須恵器	甕	A・F区	溝1・2	排水路①・土塁上 排水路②	A1184 (ME3) N11 (ME3) 688 (ME4) 399 (ME4) 430 (ME4) F1 (ME5) F6 (ME5) F17 (ME5) F19 (ME5) F37 (ME5)	311 (ME4) 313 (ME4) 315 (ME4) 650 (ME4) F3・4E (ME4) 109 (ME5) 116 (ME5) 126 (ME5) 130 (ME5) 144 (ME5) 161 (ME5) 164 (ME5) 208 (ME5) 216 (ME5) 219 (ME5)	口縁部・底部残存 胴部4/5残存		斜格子目叩き 同心円当て具痕
57	38	ME5	須恵器	小形の坏か	F3E2	東へキ転落 石間	排水路②の上面		213	底部1/3残存		
57	39	ME2 ME4 ME5	須恵器	蓋 (かえりあり)	F4E2, AN8・9E9	隙間	排水路②の上面		104 (ME2) 182 (ME4) 166 (ME5) 129 (ME5)	蓋端部のみ1/4残 存	灯明か	内面煤付着
57	40	ME5	須恵器	蓋	F4E1	隙間	排水路②の上面		133	端部欠損1/2残存		
57	41	ME4 ME5	須恵器	蓋	F3・4E	隙間	排水路②の上面		129 (ME4) 316 (ME4) 161 (ME5)	つまみ欠損 全体 で1/2残存		
57	42	ME5	須恵器	蓋	F4E1	隙間	排水路②の上面		133	口縁部細片		
57	43	ME5	須恵器	蓋	F3・4E2	溝上の転落 下	排水路②の上面		140	蓋端部のみ1/8残 存		
57	44	ME4	須恵器	無台坏	F5E, F4E	隙間	排水路②の上面		741, 315, 316	口縁部から底部 1/4残存	灯明	内面煤付着
57	45	ME4 ME5	須恵器	短頸壺	F3・4 F4 F5E	溝上転落石 下 中央あぜ F-20～-45 南溝上隙間	排水路②の上面		739 (ME4) 119 (ME5) 127 (ME5) 114 (ME5) 140 (ME5) 201 (ME5) 120 (ME5) 106 (ME5) 220 (ME5)	口縁部3/5残存 胴部一部残存		
57	46	ME5	須恵器	平瓶	F4E2・3	南溝上部	排水路②の上面	F9, F14, F39	108, 114, 115, 117, 120, 129, 131, 132, 140, 192, 225	口縁部3/4残存 取手欠損		
57	47	ME4	須恵器	盤	F4E	SD拡張区	排水路②の上面	776		底部から脚部1/8 残存		焼成不良
57	48	ME5	須恵器	捏鉢	F4E2	南溝隙間 こげ茶層	排水路②の上面	F12		底部のみ残存		底部に楔状の刺突あり
57	49	ME5	土師器	甕	F4E2	こげ茶層 南溝上部	排水路②の上面	F11		底部のみ残存		
57	50	ME6	須恵器	蓋 (かえりあり)	F区	SK21	建物⑩の柱穴		74	つまみ欠損 1/6残存		
57	51	ME6	須恵器	短頸壺	F区	SK12	建物⑬の柱穴		41	口縁部一部のみ残 存		
57	52	ME2 ME6	須恵器	蓋	F区, AN7E10	SK12, SK67	建物⑬の柱穴	N733 (ME6) N185 (ME6)	40 (ME6) 11 (ME2)	口縁部1/4・体部か らつまみ部2/3残 存		
57	53	ME5 ME6	須恵器	蓋 (かえりあり)	F4E1, F3E2, F4E3		建物⑮の柱穴 (SK56)の上面	N196 (ME6)	192 (ME5) 123 (ME5) 131 (ME5)	つまみ欠損 全体で1/4残存		
57	54	ME6	須恵器	蓋 (かえりあり)	F区	SK24			47	蓋端部のみ1/6残 存		
57	55	ME6	須恵器	無台坏	F区	SK53	塀⑧の柱穴	N501	51	底部欠損 口縁部 から胴部1/4残存		
57	56	ME6	須恵器	蓋 (かえりあり)	F区	SX3		N650		口縁部から天井部 1/3残存 つまみあり		長方体の小さいつまみ
57	57	ME6	須恵器	蓋	F区	SX3		N673		口縁端部・つまみ 欠損 1/2残存		
57	58	ME6	土師器	甕	F区	SX3		N671		口縁部1/6残存		
57	59	ME6	須恵器	坏 (かえりあり)	F区	SK18	SD2を切るSK	541		口縁部1/3残存		
57	60	ME6	須恵器	高坏	F区	SK39	SD2と切り合う SK	N287, N695		高坏の坏部のみ残 存 口縁部欠損		坏の内面全体に自然釉
57	61	ME6	須恵器	高坏	F区	SK31 3層	SD3を切るSK	N79, N70, N141, N389, N708, N718	49, 67	坏部のみ1/4残存		坏の外面に自然釉
58	62	ME3	須恵器	蓋 (かえりあり)	AN4E5	ACT P3	柱穴か		3	口縁部からつまみ 部1/8残存		宝珠つまみ
58	63	ME3	須恵器	甕か	AN4E5	ACT P3	柱穴か		3	胴部一部 底部残存		底部内面にφ9mmの粘土塊
58	64	ME3	須恵器	坏	AN4E5	ACT P3	柱穴か		3	口縁部細片		内面に赤褐色の付着物 漆か
58	65	ME3	土師器	甕	A区1T	SK15 2層	上面で検出の土 坑		247	口縁部細片		
58	66	ME2 ME3	須恵器	甕	A区	3層・1・2 層・SK1	AN1E5 SK1		48 (ME2) 52 (ME2) 25 (ME3)	口縁部1/10残存		
58	67	ME2	須恵器	坏 (かえりあり)	A区	SX1	鍛冶遺構7	N170		口縁部一部欠損	採煤か	内面全体に黒～茶褐色の付着物 漆か油煙か
58	68	ME3	須恵器	坏 (かえりあり)	AS6E1	SX1	鍛冶遺構7	A3		完形		型起こしの段差明瞭
58	69	ME3	須恵器	蓋 (かえりあり)	AS7E1	3層 黒褐色土	鍛冶遺構7の上 面		77	口縁部からつまみ 部1/2残存・宝珠つ まみ一部欠損		

表2 掲載出土遺物 (3)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考	
							取上番号	一括取上番号				
58	70	ME3	須恵器	蓋 (かえりあり)	AS7E1	3層	鍛冶遺構7の上 面	A153, A135		口縁部から体部 1/8残存		肩の縁がはっきりしている
58	71	ME2	土師器	坏か	AS7E1	3層 暗褐色土	鍛冶遺構7の上 面		89	口縁部細片	灯明	口縁端部油煙が付着 焼成不良の須恵器の可能性もある
58	72	ME3	須恵器	高坏	AS7E1	3層 黒褐色土	鍛冶遺構7の上 面		77	口縁部から体部 1/2残存 脚部一部欠損		
58	73	ME3	須恵器	高坏	AS7E1		鍛冶遺構7	A52		脚底部1/6残存		
58	74	ME3	須恵器	甌	AS7E1	3層	鍛冶遺構7の上 面		69	胴部のみ2/3残存		
58	75	ME3	須恵器	無台坏	AS6・7E1	3層	鍛冶遺構7の上 面		72, 73	底部3/4残存		底部へう切りの後の仕上げが丁寧 丸みのある底部
58	76	ME3	須恵器	短頸壺	AS7E1		鍛冶遺構7	A139, A136		口縁部細片		胎土赤褐色
58	77	ME4	須恵器	蓋	下水4・5	SK21	井戸状遺構		211, 209	つまみ欠損 蓋端部一部残存 全体で1/2残存		
58	78	ME4	須恵器	蓋	下水4・5	SK21	井戸状遺構		下水 4・5	口縁部細片		
58	79	ME3 ME4	須恵器	蓋	下水4・5	SK21	井戸状遺構	A883 (ME3) 747 (ME4)	210 (ME4)	口縁部1/2残存		上面に自然釉かかる 内面滑らかだが 墨付着なし 重ね焼の痕もあり 直径 22cmの大形の蓋
58	80	ME4	須恵器	高台坏	下水4・5	SK21上面	井戸状遺構	748	682	口縁部1/2残存	転用硯	口縁外反する 高台内側非常に滑らか で墨付着 内面も滑らかで墨付着 直径 18cmの大形の坏
58	81	ME4	須恵器	高台坏	下水5		井戸状遺構の上 面	749		口縁部一部欠損		
58	82	ME4	須恵器	無台坏	下水4・5・8・9	SK6, SK21	井戸状遺構		下水 8・9, 下水 4・5	底部のみ1/2残存		内面に自然釉かかる
58	83	ME4	須恵器	坏	下水4・5	SK21	井戸状遺構		下水 4・5	口縁部細片		
58	84	ME4	須恵器か 灰釉	壺	下水4・5	SK21	井戸状遺構		下水 4・5	底部5/12残存		内面にも自然釉かかる
59	85	ME4	須恵器	坏	下水10	SK14	堀⑥の柱穴		下水 10	口縁部細片		高坏の可能性もある
59	86	ME4	須恵器	無台坏	下水10	SK2・3	堀⑥の柱穴		下水 10, 991	口縁部から体部 1/4残存・底部欠損		高坏の可能性もある
59	87	ME4	須恵器	高坏	下水10	SK10	堀⑥の柱穴		282, 288, 1070	坏部から脚部1/2 残存・口縁部欠損		
59	88	ME4	須恵器	高台坏	下水10 F-30 ~ -45	SK11	堀⑥の柱穴 SK10と切り合 う		1071	口縁部一部残存		直径推定 9.6cmの小形の坏 胎土が部分的に赤褐色
59	89	ME4	須恵器	無台坏	下水3	SK23	建物⑨の柱穴		下水 3	口縁部細片		
59	90	ME2 ME3	須恵器	高坏	A区	SK2	建物⑨の柱穴	A1103 (ME3) A1015 (ME3) A1105 (ME3)	123 (ME2) 132 (ME2) 44 (ME3)	坏部のみ3/4残存		胎土が赤褐色
59	91	ME4	須恵器	無台坏	下水10	SK1	柱穴か		下水 10	底部欠損 1/4残 存		
59	92	ME4	須恵器	無台坏 (かえりあり)	下水10 F-55 ~ -60	SK1	柱穴か		282	1/2残存		型起こし
59	93	ME4	土師器	甌か	下水10	SK2	柱穴か		下水 10	底部片と口縁部片 胴部数片あり		
59	94	ME4	須恵器	無台坏 (かえりあり)	下水10	SK2	柱穴か		下水 10	口縁端部のみ1/4 残存		
59	95	ME4	須恵器	蓋 (かえりあり)	下水5	SD1	溝③		下水 5	口縁部細片		
59	96	ME4	灰釉陶器	皿	下水1	SK1			下水 1	口縁部1/8・底部残 存	転用硯	底部外面に窯印「×」あり墨も付着 内面滑らかで墨付着 A・F 地区では数少ない灰釉陶器
59	97	ME4	土師器	甌か	下水6	SK7			下水 6	口縁部1/6残存		247 と似る
60	98	ME5	土師器	甌	G3	SB1	堅穴建物4	N56, N61, N68	53	口縁部1/2・胴部 1/6残存		
60	99	ME5	土師器	甌	G3	SB1	堅穴建物4	N77	337, 57	口縁部1/6残存		
60	100	ME5	土師器	甌	G3	SB1	堅穴建物4	N82, N57, N58, N61	54, 57	口縁部から胴部 1/6残存		
60	101	ME5	土師器	甌	G3	SB1	堅穴建物4	N74, N83	57	口縁部1/2		
60	102	ME5	須恵器	蓋	G4 AN4W3	SB2	堅穴建物5	N175	72	口縁部1/2残存		
60	103	ME5	須恵器	高坏	G4	SB2	堅穴建物5	N400		口縁部1/6残存 底部・脚部欠損		
60	104	ME5	須恵器	短頸壺	G4	SB2	堅穴建物5	N363		口縁部細片		焼成不良
60	105	ME5	土師器	甌	G4	SB2	堅穴建物5	N191, N221, N204	72, 388	口縁部1/2		
60	106	ME5	土師器	甌	G4	SB2	堅穴建物5	N340, N219, N402		口縁部細片		
60	107	ME5	須恵器	鉢	G4	SX15, SK50	堅穴建物5を切 る		387, 424	口縁部細片		焼成不良 口縁内湾 底部へう起こして仕上げなし
60	108	ME5	須恵器	蓋	G4	SX15	堅穴建物5を切 る		387	つまみ部のみ残存	転用硯	内面大変滑らかで墨付着
60	109	ME5	土師器	甌	G4	SX15	堅穴建物5を切 る		387, 434	口縁部1/4残存		
60	110	ME5	土師器	土錘	G4	SK52	堅穴建物5の北 を切る		426	完形		長 5.0cm, 幅 1.2～2.2cm
60	111	ME5	須恵器	高坏か盤	G4	SX18-2	堅穴建物5を切 る		401	脚部1/4残存		
60	112	ME5	土師器	甌	G4	SX18	堅穴建物5を切 る		346	口縁部細片		
60	113	ME5	須恵器	坏	G4	SX19-1	大形堅穴建物①		422	口縁部細片		
60	114	ME5	須恵器	坏	G4	SX19-4	大形堅穴建物①		416	口縁部細片		
60	115	ME5	須恵器	蓋	G4	SX19かまど	大形堅穴建物①	N491		1/5残存 つまみ欠損		直径推定 21cmの大形の蓋
60	116	ME5	須恵器	蓋	G4	SX19	大形堅穴建物①		423	口縁部細片		
60	117	ME5	須恵器	蓋	G4	SX19かまど	大形堅穴建物①	N490	491	1/6残存 つまみ欠損		

表2 掲載出土遺物 (4)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
60 118	ME5	須恵器	蓋	G4	SX19-1	大形堅穴建物①		423	口縁部1/6残存		
60 119	ME5	土師器	甕	G4	SX19-1・4F ^テ かまど内	大形堅穴建物①	N487		口縁部1/6残存		同一個体破片多数有り
60 120	ME5	土師器	甕	G4	SX19	大形堅穴建物①	N495, N504	320	口縁部細片		
61 121	ME5	須恵器	坏	G4	SX12-4	大形堅穴建物②	N293		口縁部細片		
61 122	ME5	須恵器	鉢	G4	SX12-3	大形堅穴建物②	N329	302	口縁部一部残存 全体で1/8残存		口縁内湾する
61 123	ME5	須恵器	蓋 (かえりあり)	G4	SX12-4	大形堅穴建物②	N275		口縁部1/5残存		
61 124	ME5	須恵器	蓋	G4	SX12	大形堅穴建物②	N234		口縁部細片		
61 125	ME5	須恵器	蓋	G4	SX12-1	大形堅穴建物②	N238		口縁部細片		口縁端部直裁
61 126	ME5	土師器	土鉢	G4	SX12	大形堅穴建物②	N235		ほぼ完形		長 4.9cm, 幅 1.2～1.7cm
61 127	ME5	土師器	小甕	G4	SX12	大形堅穴建物②	N257, N326, N327, N332	363, 489, 507	底部1/2残存		
61 128	ME5	土師器	甕	G4	SX12	大形堅穴建物②	N286, N247		胴部から底部一部 残存		平底
61 129	ME5	土師器	甕	G4	SX12	大形堅穴建物②	N225	80	口縁部細片		
61 130	ME5	土師器	甕	G4	SX12	大形堅穴建物②	N261, N254, N276		口縁部細片		
61 131	ME5	須恵器	無台坏	G1・4	SX16	大形堅穴建物① を切る		386	口縁部1/8残存		底部へラ削り
61 132	ME5	土師器	甕	G4	SK33	大形堅穴建物② を切る		365	口縁部から胴部細 片		
61 133	ME3	須恵器	壺	7TE	SK1	建物②の柱穴		502	口縁部1/9残存		
61 134	ME5	土師器	鉢	G2	SK8	建物②の柱穴		304	口縁部から胴部 1/6残存		口縁内湾する
61 135	ME3	土師器	甕	7TW	SK4	建物②の柱穴		503	口縁部細片		
61 136	ME5	須恵器	無台坏 (かえりあり)	G6	SK60	堀②の柱穴		436, 435	口縁部7/8残存		胎土淡茶褐色
61 137	ME5	須恵器	蓋 (かえりあり)	G5	SK58	建物の③柱穴		502	口縁部細片		
61 138	ME5	須恵器	蓋 (かえりあり)	G5	SK71	建物④柱穴		472	口縁部から体部 1/3残存		
61 139	ME5	須恵器	短頸壺	G3	SK1 SK2	堀③の柱穴 建物③の柱穴		301, 61, 461	口縁部から胴部 1/7残存		
61 140	ME5	須恵器	短頸壺	G3	SK1	堀③の柱穴		301	口縁部から体部 1/8残存		
61 141	ME5	須恵器	甕	G4	SK37	建物⑥柱穴		380	口縁部細片		焼成不良
61 142	ME5	須恵器	坏か	G6	SK61 (柱根痕か)	建物⑤の柱穴か		458	底部1/2残存		底部型起こし
61 143	ME5	土師器	甕	G4	SX8・9	溝①の上面		395	口縁部細片		
61 144	ME5	須恵器	高台坏	G1・4	SK38			47, 372	口縁部1/2残存		直径 11cmの小形の坏 内面全体に自然釉かかる
62 145	ME5	須恵器	蓋 (かえりあり)	F5E3	石列の西45 cm小円礫上		F28		1/2残存		宝珠つまみ
62 146	ME2	須恵器	蓋 (かえりあり)	AN9E8	3層			13	口縁部一部 つまみ部1/5残存		上面に自然釉かかる
62 147	ME2 ME3	須恵器	蓋 (かえりあり)	AN6・7E9			AN43 (ME3)	114 (ME2)	つまみあり 全体1/4残存		
62 148	ME2	須恵器	蓋 (かえりあり)	AN7E9	2層 暗茶褐色 土			111	口縁部1/2残存 つまみ欠損		
62 149	ME3	須恵器	蓋 (かえりあり)	AN7E9	集石検出中		AN48	113	口縁部からつまみ 部1/2残存 つまみあり		
62 150	ME4	須恵器	蓋 (かえりあり)	F4E	黒土 西あぜ			650	口縁端部1/6残存 つまみ欠損		
62 151	ME3	須恵器	蓋 (かえりあり)	AN6E9			A788		口縁部一部・天井 部1/2残存 つまみ欠損		上面に自然釉かかる
62 152	ME5	須恵器	蓋 (かえりあり)	F3・4E2			F25, F29	118	口縁部5/6残存		
62 153	ME4	須恵器	蓋	F2・F2W	F0～100 東あぜ		662, 673	122, 654	口縁部1/2残存 つまみ欠損		
62 154	ME2 ME3	須恵器	蓋	AN5E9	3層		A745 (ME3)	112 (ME3) 119 (ME2)	口縁部1/10残存		
62 155	ME3	須恵器	蓋	AN6E8	3層			654	2/3残存 口縁部一部残存		つまみの上面平坦
62 156	ME5	須恵器	蓋	F4E2			F33	108	口縁部・天井部1/2 残存 つまみ欠損		
62 157	ME2 ME3 ME4 ME6	須恵器	蓋	AN6・7E9・10			A640 (ME3) A1188 (ME3) 395 (ME6)	9 (ME2) 6 (ME2) 122 (ME3) 182 (ME4) 183 (ME4)	2/3残存 口縁部一部残存		直径が 24.6cmある大形の蓋
62 158	ME4	須恵器	蓋	F4E	F-50 褐色土			310	口縁部からつまみ 部1/10残存 つまみあり		
62 159	ME4	須恵器	蓋	F5E	F-40～-50			740	口縁部1/4残存		
62 160	ME3	須恵器	蓋	AN7・8E8・9			N19, AN50		つまみ欠損 口縁部1/4残存		
62 161	ME6	須恵器	蓋	F区	3層		N339, N423, N469		口縁部一部残存 全体で2/3残存		
62 162	ME3	須恵器	蓋	AN7E10			A268		蓋端部のみ1/6残 存	油煙か 煤	内面・外面に油煙か煤付着
62 163	ME4	須恵器	蓋	F2・3	黒土		139	125	つまみ残存 口縁部一部残存		1～1.5mm ゴマ粒状黒色粒混入
62 164	ME2 ME3	須恵器	蓋	A区			AN32 (ME3)	104 (ME2)	口縁部1/4残存		163 と似る

表2 掲載出土遺物 (5)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
62 165	ME5	須恵器	蓋	F4E1	隠入層 F3-E3南西 コーナー F-10 ～-15			102	端部細片		
62 166	ME2	須恵器	蓋	AN6E9・10				117, 6	口縁端部細片		口縁端部直裁
62 167	ME2	須恵器	蓋	AN7・8E9				108	つまみ欠損 1/4残存		
62 168	ME5	須恵器	無台坏 (かえりあり)	F4E1	こげ茶層の 下		F21		完形		底部型おこし
62 169	ME4	須恵器	無台坏 (かえりあり)	F2・3		排水路①・土塁 上	655	119, 655	口縁部5/12残存		
62 170	ME5	須恵器	無台坏 (かえりあり)	F3東3.5東 壁	1層			195, 159	口縁部1/2残存	灯明か	口縁の一部に煤? 付着 底部外面大変 滑らか 底部型おこし
62 171	ME5	須恵器	無台坏 (かえりあり)	F4E2	こげ茶中央 あぜ F-50 ～-60			191	全体で1/6残存	漆	内面に漆? 付着 底部型おこし
62 172	ME6	須恵器	無台坏 (かえりあり)	F3	3		186		口縁部から天井部 1/3残存		底部型おこし
62 173	ME2	須恵器	高台坏	AN9E9	2・3層			102	底部のみ1/2残存		小形の坏
62 174	ME3	須恵器	高台坏	AN7E10	2層		A401, C742	136	底部から体部1/3 口縁部一部残存		小形の坏
62 175	ME3	須恵器	高台坏	AN7E10			A337		ほぼ完形 口縁 部・高台一部欠損		直径 11cmの小形の坏 底部へラ切り
62 176	ME5	須恵器	高台坏	F4E1・2	1層			106, 114, 191, 185, 116	口縁部3/4残存		直径 12cmの小形の坏 底部が垂れ下がる
62 177	ME6	須恵器	高台坏	F4E2	3層		N430		口縁部1/6・底部 1/3残存		
62 178	ME2 ME3	須恵器	高台坏	AN6・7・8・9 E9			AN53 (ME3) A1220 (ME3)	104 (ME2) 684 (ME3)	口縁部2/3残存		器高が高い 薄手 金属器の写しか
62 179	ME4	須恵器	高台坏	A区	清掃時			186, 765	口縁部1/8残存		胎土が赤い 高台が外側近くに付く
62 180	ME2	須恵器	無台坏	AN8E10	1層			4	口縁部から底部 1/5残存		
62 181	ME4	須恵器	無台坏	F1			619, 652		口縁部3/4残存		底部へラ削りで平ら
62 182	ME2 ME3 ME4	須恵器	無台坏	AN7・8E10, F4, F5E	1・2層・ドテ		A290 (ME3)	11 (ME3) 3 (ME2) 3 (ME2) 127 (ME3) 34 (ME4) 740 (ME4)	口縁部1/4残存 底部3/4残存		底部へラ削りで平ら
62 183	ME5	須恵器	無台坏	F5E3	今のF-60 最近の地表-40			136	1/5残存		底部へラ削り丁寧
62 184	ME5	須恵器	無台坏	F4E2			F18, F35		口縁部1/2残存		底部へラ削り丁寧 直径 21cm大形の坏
63 185	ME3	須恵器	無台坏	AN8E10			A1180		1/6残存 底部欠 損	灯明	口縁の一部が欠け、煤か油煙付着
63 186	ME6	須恵器	無台坏	F5E1, AN7E10	3層		N446, N474		口縁部1/8残存	灯明	側面の内側に煤か油煙付着
63 187	ME3	須恵器	無台坏	AN5・6・8E9	1・2層 ドテとり		A1192	123	底部残存 口縁部 一部残存		底部へラ削りの後調整してない
63 188	ME3	須恵器	無台坏	AN5E9	2層			295, 112, 82	口縁部1/2残存		底部へラ削りが丁寧 墨付着ないが内面滑らか
63 189	ME6	須恵器	無台坏	AN7E10	3層		455, 742		口縁部1/8残存 底部一部欠損		
63 190	ME5	須恵器	無台坏	A区	清掃時			183	口縁部欠損		底部へラ切り
63 191	ME3 ME6	須恵器	無台坏	AN7E10, AN5E9	2・3層		A400 (ME3) 119 (ME6) 167 (ME6)	122 (ME3)	口縁部から底部		器高が高い ヘラ削りが丁寧
63 192	ME4	須恵器	無台坏	F2W			132		口縁部細片		或いは高坏か
63 193	ME3	須恵器	鉢	AN5E9	2・3層			122	坏部1/8残存		
63 194	ME3	須恵器	鉢	AN7E10			A355		口縁部細片		
63 195	ME6	須恵器	鉢	F区	3層		N365, N92, N686, N359		口縁部残存 底部1/3残存		底部のへラ削りが丁寧で胴部と底部の 境の後はっきりしている 口縁内湾
63 196	ME3	須恵器	鉢	AN5E9			A783		口縁部細片		口縁内湾
63 197	ME3	須恵器	鉢	AN7E10			A411, AN40		口縁部1/6残存		口縁内湾
63 198	ME3	須恵器	鉢		1層			669	口縁部1/4残存		口縁内湾
63 199	ME4	須恵器	瓶か	F区	黒土 F-30～-40			209	口縁部欠損 1/2 残存		器厚が薄いので小形の坏の可能性もある 内面全体に自然釉かかる
63 200	ME2	須恵器	高坏	AN9E9	2・3層			102	坏部のみ1/5残存		
63 201	ME3	須恵器	高坏	AN6E9			A557		底部細片		四方透かし
63 202	ME5	須恵器	高坏	F3E2	南石列の南 側斜面 こげ茶層		F4		脚部のみ 端部1/8残存		透かしなし
63 203	ME4	須恵器	瓶	F3			422, 393, 385	302	胴部のみ1/2残存		
63 204	ME2	須恵器	瓶	AN7E9	2層 暗茶褐色 土			100	底部のみ残存		
63 205	ME4	須恵器	短頸壺	AN6・7E9				182	ほぼ完形		底部へラ切り
63 206	ME2 ME3	須恵器	短頸壺	AN6・7・8 E9・10	1層・ 集石中・ ドテ		AN38 (ME3) N7 (ME3)	10 (ME2) 110 (ME2) 52 (ME3)	1/2残存		底部に指押えがあつて器厚が薄くなっ ている 内面に暗茶褐色の付着物 漆か
63 207	ME2 ME3 ME6	須恵器	平瓶	AN7・8E8・9			180 (ME6) 170 (ME6) AN31 (ME3)	18 (ME2) 28 (ME2) 98 (ME2) 105 (ME2)	口縁部から底部 1/4残存		
63 208	ME2 ME3 ME6	須恵器	瓶	AN6E9・10			A795 (ME3) A734 (ME3) N213 (ME6)	117 (ME3) 5 (ME2) 129 (ME6)	胴部一部残存		
63 209	ME2 ME3 ME5	須恵器	瓶	AN7・8E8・9			AN46 (ME3) AN61 (ME3) N18 (ME3)	7 (ME2) 114 (ME2) 128 (ME5)	底部一部欠損 胴部一部残存		208 と同一個体 或いは経筒外容器か
64 210	ME4	須恵器	把手付 中空(円面)甕	F4	黒色土中		507		陸部欠損 底部から注口状の 把手部一部残存		

表2 掲載出土遺物 (6)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
64	211	ME4	須恵器	壺	F1		245, 47	F1	口縁部1/6残存		
64	212	ME4	須恵器	把手付甕	F2, F1・2間		380, 436	69	口縁部から胴部上半部1/6残存		
64	213	ME4	須恵器	瓶	F1		407, 413	116	底部高台1/5残存		外面に刺突模様あり
64	214	ME2 ME4	須恵器	甕	AN6E9			117 (ME2) 183 (ME4)	口縁部細片		
64	215	ME5	須恵器	把手付鉢	F4E1, F4E2, F3E2, F4E2	F-45 ~ -55		114, 116, 123	底部欠損 口縁部から胴部1/4残存		
64	216	ME6	須恵器	鉢	時期不明基壇上			186	底部細片		
64	217	ME2	土師器	甕	AN8E9	2層 暗茶褐色土		101	口縁部から肩部1/6残存		
64	218	ME3	土師器	甕	AN8E10		A322, A323, A324		口縁部1/2残存		焼成やや不良
64	219	ME2	灰釉陶器	短頸壺	AN8・9E8・9			95, 20	口縁部1/3残存		
64	220	ME2	灰釉陶器	鉢	AN5E9	1・2層 茶褐色土		115	底部細片		
64	221	ME4	白磁	碗	F2W	黄色土下部	151		口縁部細片		
64	222	ME3	青磁	碗	AN6E10	2層	127		口縁部細片		蓮弁文
65	223	ME2 ME3 ME4	須恵器	横瓶	AN7・8E8			7 (ME2) 15 (ME2) 18 (ME2) 20 (ME2) 21 (ME2) 29 (ME2) 33 (ME2) 96 (ME2) 105 (ME2) 124 (ME2) 93 (ME3) 107 (ME3) 191 (ME3) 415 (ME4)	口縁部残存 胴部1/2残存		縄目叩き 同心円当て具痕あり
65	224	ME2 ME3 ME5 ME6	須恵器	横瓶	A・F区		A259 (ME3) A285 (ME3) A389 (ME3) A448 (ME3) N11 (ME3) AN39 (ME3) N101 (ME6) N686 (ME6) N91 (ME6) N54 (ME6) N102 (ME6) N463 (ME6) N467 (ME6) N509 (ME6) N393 (ME6) N482 (ME6) N521 (ME6)	5 (ME2) 7 (ME2) 9 (ME2) 11 (ME2) 97 (ME2) 99 (ME2) 100 (ME2) 103 (ME2) 104 (ME2) 672 (ME2) 49 (ME3) 50 (ME3) 53 (ME3) 129 (ME3) 138 (ME3) 139 (ME3) 193 (ME3) 199 (ME5) 202 (ME5) 209 (ME5) 210 (ME5) 222 (ME5) 77 (ME6)	胴部7/10残存 口縁部欠損		格子目叩き 青海波文あり
65	225	ME2 ME3	須恵器	横瓶	AN6・7E10			7 (ME2) 98 (ME3)	口縁部のみ1/2残存		接点ないが226と同一個体
65	226	ME2 ME4	須恵器	横瓶	AN8・9E9	3層		182 (ME4) 183 (ME4) 9 (ME2) 104 (ME2)	胴部1/2残存		平行叩き目 青海波文あり 接点ないが225と同一個体
65	227	ME2 ME3 ME4 ME5 ME6	須恵器	甕	F区	3層	N9 (ME3) N11 (ME3) A286 (ME3) C749 (ME3) 320 (ME6) 353 (ME6) 354 (ME6) 355 (ME6) 383 (ME6) 388 (ME6) 404 (ME6) 407 (ME6) 458 (ME6) 462 (ME6) 615 (ME6) 616 (ME6) 726 (ME6) 738 (ME6) 759 (ME6) 760 (ME6) 761 (ME6) 767 (ME6) 781 (ME6) 786 (ME6) 787 (ME6) 788 (ME6) 790 (ME6) 791 (ME6) 804 (ME6) 805 (ME6) 808 (ME6) 809 (ME6) 810 (ME6) 819 (ME6)	51 (ME2) 56 (ME2) 51 (ME3) 114 (ME3) 182 (ME4) 183 (ME5)	口縁部一部・胴部から底部2/3残存		格子目叩き 当て具痕なし

表2 掲載出土遺物 (7)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
65	228	ME2 ME4 ME5 ME6	須恵器 甕	F1・2			405 (ME4) 404 (ME4) 492 (ME4) 610 (ME4) 414 (ME4) 679 (ME4) 604 (ME4) 608 (ME4) 499 (ME4) 411 (ME4) 490 (ME4) 489 (ME4) 375 (ME4) 495 (ME4) 682 (ME4) 417 (ME4) 600 (ME4) 620 (ME4) 625 (ME4) 618 (ME4) 626 (ME4) 614 (ME4) 607 (ME4) 681 (ME4) 493 (ME4) 611 (ME4) 491 (ME4) 603 (ME4) 606 (ME4) 609 (ME4) 409 (ME4) 605 (ME4) 494 (ME4) 616 (ME4) 498 (ME4) 107 (ME4) 97 (ME4) 163 (ME4) 421 (ME4) 160 (ME4) 55 (ME4) 376 (ME4) 333 (ME4) 310 (ME4) 162 (ME4) 369 (ME4) 220 (ME4) 382 (ME4) 113 (ME4) 76 (ME6)	5 (ME2) 497 (ME4) 656 (ME4) 26 (ME4) 111 (ME4) 27 (ME4) 25 (ME4) 659 (ME4) 112 (ME4) 1068 (ME4) 68 (ME4) 110 (ME4) 658 (ME4) 113 (ME5) 188 (ME5) 126 (ME5) 112 (ME5) 114 (ME5) 105 (ME5) 106 (ME5) 116 (ME5) 75 (ME5)	口縁部から底部 4/5残存	平行叩き目 当て具痕なし	
65	229	ME4 ME5	須恵器 四耳甕	F区			F43 (ME5) 754 (ME4)	85 (ME4) 121 (ME4) 130 (ME4) 306 (ME4) 107 (ME5) 108 (ME5) 109 (ME5) 112 (ME5) 113 (ME5) 115 (ME5) 116 (ME5) 123 (ME5) 126 (ME5) 137 (ME5) 140 (ME5) 168 (ME5) 174 (ME5) 180 (ME5) 196 (ME5) 200 (ME5) 212 (ME5) 214 (ME5) 219 (ME5) 228 (ME5)	口縁部ほぼ残存 胴部から底部1/2 残存 耳1/4残存	平行叩き目 同心円当て具痕あり	
66	230	ME2 ME3	須恵器 高坏	AN2・3E9. AN4E9	3層		A849 (ME3)	132 (ME2) 128 (ME2)	口縁部一部残存 脚部も残るが脚端 部は欠損		外面に煤付着
66	231	ME2	須恵器 蓋 (かえりあり)	AN3E9	3層			123	口縁部からつまみ 部1/4残存		
66	232	ME3	須恵器 高坏か	AN3E9			A954		坏部のみ		内面に煤付着
66	233	ME3	須恵器 甕	AN2E9	3層		A177		口縁部一部欠損		胴部に「×」印
66	234	ME2	須恵器 蓋	AN3E9	3層 暗褐色土			123	口縁部1/9残存		口縁直裁
66	235	ME2	土師器 (平安) 坏	AN2E9	2層			135	底部1/3 高台一部残存		
66	236	ME3	須恵器 短頸壺	AN2E9			A1120		口縁から胴部1/8 残存 口縁部一部残存		
66	237	ME2	須恵器 高坏	AN3E9	3層			126	口縁部1/6残存		72 と似る、同一個体か
66	238	ME2	須恵器 蓋 (かえりあり)	AN3E5	2層 茶褐色土			37	口縁部1/2残存		
66	239	ME3 ME4	須恵器 蓋 (かえりあり)	AN8E7	1層			184 (ME4) 93 (ME3)	口縁部1/2・天井部 1/4残存 つまみ欠損		
66	240	ME2	須恵器 蓋 (かえりあり)	AN9E8	2層 茶褐色土			22	口縁部1/4残存		櫛の押し引き文様帯がある
66	241	ME2	須恵器 蓋	AN9E8	2層 茶褐色土			23	蓋端部のみ1/8残 存	墨書	内面に墨書 判読できない
66	242	ME2 ME3	須恵器 高坏	AN1・2E5	3層			51 (ME2) 83 (ME3)	坏部のみ1/3残存		
66	243	ME3	須恵器 高坏	AN5E7	1～3層			101	脚部のみ残存 脚端部一部残存		
66	244	ME2	須恵器 無台坏	AN8E5	3層 黒褐色土			42	口縁部から底部 1/3残存		底部厚い
66	245	ME2	須恵器 瓶	AN9E8	2層			23	肩部一部残存		胴部に波状文めぐる

表2 掲載出土遺物 (8)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
66	246	ME2 ME5	須恵器	壺	AN7・8E8, F4E2	A区 №2 ド テはずし、1 ・2層ドテ、 東あぜ排土		16 (ME2) 32 (ME2) 128 (ME5)	底部のみ残存		底部に網代の圧痕
66	247	ME2	土師器	甌	AN8E8	3層 暗褐色土		18	口縁部細片		97 と似る
66	248	ME2	土師器	把手付甕	AN8E8	3層 暗褐色土		18	口縁部から胴部一 部残存 つまみ1/2残存		
66	249	ME2	土師器	甕	AN8E8	3層 暗褐色土		18	口縁部1/8残存		
67	250	ME2	須恵器	蓋	AS6E1	3層		92	口縁部細片		
67	251	ME3	須恵器	無台坏	AS3E1	3層 暗茶褐色 土		63	口縁部から底部 1/4残存		底部丸い
67	252	ME3	須恵器	無台坏	AS5E1, AN6E10			74, 78, 114	口縁部から体部 1/2、底部1/4残存		底部ヘラ切り
67	253	ME2 ME3	須恵器	無台坏	AS2・3E1間 のベルト中			59 (ME3) 67 (ME2)	口縁部1/8・底部 1/2残存		底部ヘラ切り
67	254	ME3	須恵器	無台坏	AS5・6E1間 のベルトは ずし			75	口縁部1/5残存		底部ヘラ切り
67	255	ME3	須恵器	無台坏	AS6E1	3層		73	口縁部から底部 1/4残存		底部ヘラ切りの後、ヘラ削りで調整
67	256	ME2	須恵器	無台坏	AS6E1			87	全体で1/4残存	灯明	底部でヘラ切り 内面と内外面一致す る口縁部に油煙付着
67	257	ME2	土師器 (平安)	碗か皿	AS5E1	3層		84	口縁部細片	灯明	口縁端の内外面に油煙付着 焼成不良 の須恵器の可能性もある
67	258	ME2	須恵器	高台坏	AS6E1	3層		92	口縁部1/4 底部1/3残存		内面滑らかだが墨付着なし
67	259	ME2	須恵器	盤	AS6E1	1層		94	脚部のみ1/8残存		十字の透かしあり
67	260	ME2	須恵器	短頸壺	AS5E1	3層		83	口縁部から胴部 1/8残存		
67	261	ME2	須恵器	短頸壺	AS5E1	3層		86	口縁部一部残存		
67	262	ME2	須恵器	短頸壺	AS6E1	1層～2層		85	口縁部から胴部 1/8残存		
67	263	ME2	須恵器	甌	AS3E1	1層～2層		67	底部残存 注口半分残存		丸底 型起こし
67	264	ME2 ME4	須恵器	高坏	AN1E1, 下水9・10	1・2層		61 (ME2) 66 (ME2) 639 (ME4) 206 (ME4) 288 (ME4)	1/2残存		
67	265	ME3	須恵器	高坏	A区	AS2・3E1間 のベルト中		56	坏部1/8残存		内面に自然釉かかる
67	266	ME2	須恵器	高坏	AS4・5E1	1～3層		74, 86	脚部のみ2/3残存		三方透かし 盤脚部の可能性もある
67	267	ME2	須恵器	高坏	AS6E1	1・2層 茶褐色 土		85	高坏脚部1/2残存 端部欠損		焼成不良 内面外面黒い
67	268	ME3	須恵器	無台盤	AS2・3E1	3層		58, 59	口縁部から底部 1/2残存		焼成不良
67	269	ME3	須恵器	甕	AS1E1	3層 黒褐色土		69, 77	口縁部から肩部 1/6残存		胎土赤褐色 平行叩き目
67	270	ME2 ME3	須恵器	甕	AS5E1	3層		84 (ME2) 86 (ME2) 90 (ME2) 71 (ME3)	口縁部から頸部の み2/3残存		縄目叩き
67	271	ME3	灰釉陶器	碗	1T			221	底部1/6残存		
68	272	ME4	須恵器	高台坏	下水1	F-20		899	底部のみ残存	転用硯	高台内側と内面墨付着 内面・外面と ともに滑らか 意図的な打欠き
68	273	ME4	須恵器	鉢	下水1	F-20～25		915	口縁部一部残存 口縁部から胴部 1/8残存		口縁内湾する
68	274	ME4	須恵器	碗	下水1	F-20		908	口縁部一部残存		体部から口縁は灰釉陶器の形
68	275	ME4	土師器	鍋	下水1	F-50～60		941	口縁部細片		外面直径1cm程の連続刺突文あり
68	276	ME4	土師器	甕	下水1	F-40～50		943	口縁部細片		
68	277	ME4	須恵器	坏	下水2	F-25～45		933, 901	底部欠損 口縁部 から体部1/4残存		高台付くか不明
68	278	ME4	須恵器	高坏	下水2	F-70		589, 117	脚部のみ 端部1/8残存		
68	279	ME4	須恵器	高坏	下水3	F-20～30		592	坏部のみ1/3残存 口縁部欠損		
68	280	ME2 ME4	須恵器	高坏	AN3E9, 下水3	3層、F-40 ～60		126, 594	坏部のみ1/2残存 口縁部欠損		
68	281	ME4	須恵器	短頸壺	下水4	F-70-80		218	口縁部から胴部 1/8残存 底部欠損		
68	282	ME4	須恵器	瓶	下水4	2・3層の間	767		高台付底部1/2残 存 口縁部欠損		
68	283	ME4	土師器	甕	下水4	F0～100		211, 608, 609, 221	胴部から底部残存		丸底 長胴甕
68	284	ME4	須恵器	高台坏	下水4	黒土 F-30～40, F-40～45, F-60～70		209, 214, 215, 216	口縁部1/8 底部3/4残存	墨書	高台内面に墨書「成」
68	285	ME4	須恵器	蓋	下水5	F-40～45		222	つまみ残存 口縁端部欠損 全体で1/2残存		
68	286	ME4	須恵器	蓋	下水5	F-30～70		220, 228	つまみ・端部欠損 1/4残存	転用硯	内面大変滑らかで墨付着
68	287	ME4	須恵器	高台坏	下水5	F-30～40		220	口縁部1/6 底部残存	転用硯	高台の内側大変滑らかで墨付着
68	288	ME4	須恵器	瓶	下水5	F-70～80		227	口頸部のみ1/4残 存		
68	289	ME4	須恵器	蓋	下水6	F-25～45		194	口縁端部のみ1/8 残存	転用硯	内面やや滑らかで墨付着

表2 掲載出土遺物 (9)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
68 290	ME4	須恵器	無台坏 (かえりあり)	下水6	F-30～-50 大木付近		751		完形		底部厚い 底部型起こし
68 291	ME4	須恵器	高台坏	下水6	F0～-25			195	底部のみ1/5残存		
68 292	ME4	須恵器	無台坏	下水6	F-55～-60			231	1/8残存		底部平坦
68 293	ME4	須恵器	瓶	下水6・7	F0～-45			194, 200	口頸部・胴下部欠損 肩部のみ1/2残存		
68 294	ME4	須恵器	甕	下水6	F-25～-45			194	口縁部細片		平行叩き 同心円当て具
68 295	ME4	土師器	甕	下水6	F-55～-60			231	口縁部1/6残存		外面ヘラ削り
68 296	ME4	土師器	甕	下水6	F-25～-45			194	口縁部1/6残存		
69 297	ME2	須恵器	無台坏	AS1E5	3層 暗褐色土			48	口縁部1/4残存		底部ヘラ切り
69 298	ME2	須恵器	無台坏	AS1E5	1・2層			57	口縁部2/5残存		底部ヘラ切り
69 299	ME2	須恵器	無台坏	AS1E5	1～2層			57	口縁部から底部1/4残存		底部ヘラ削り
69 300	ME4	須恵器	無台坏	下水7	F-25～-45			201	1/8残存		底部ヘラ削り
69 301	ME2	土師器 (平安)	碗か皿	AS1E5	3層 暗褐色土				底部のみ1/2残存		
69 302	ME4	須恵器	蓋 (かえりあり)	下水7	F-60			244	1/2残存 つまみ欠損		
69 303	ME4	須恵器	蓋	下水7	F-25～-45			201	つまみから体部1/4残存・蓋端部欠損		宝珠つまみ
69 304	ME2	須恵器	蓋	AS1E5	1～2層			57	口縁部1/5残存		
69 305	ME2	須恵器	台付壺	AS1E5	3層 黒褐色土			50	高台部のみ残存		
69 306	ME4	須恵器	横瓶	下水7	F-25～-45			199	口縁部のみ1/3残存		胴部内面ナデ調整
69 307	ME4	須恵器	高坏	下水6・7・8	F0～-70			255, 202, 193, 236, 201	脚部から坏部1/3残存・口縁部欠損		
69 308	ME4	須恵器	短頸壺	下水8	F-40～-50			196	口頸部のみ1/4残存		
69 309	ME4	須恵器	短頸壺	下水8	F-100			636	口頸部のみ1/4残存		
69 310	ME4	須恵器	高坏 (かえりあり)	下水8	西端より80 南壁F-60			262	坏部4/5 口縁部一部残存		焼成やや不良
69 311	ME4	須恵器	甕	下水8	F-80～-90			261	口縁部1/6残存		斜格子叩き 同心円当て具
69 312	ME4	土師器	甕	下水8	F-75			259	口縁部1/6残存		ハケ調整は見られない
69 313	ME4	須恵器	蓋	下水9	F-60～-70			638	つまみから体部1/2残存・蓋端部欠損		宝珠つまみ
69 314	ME4	須恵器	無台坏 (かえりあり)	下水9	F-50～-60			636	口縁端部のみ1/8残存		
69 315	ME4	須恵器	平瓶	下水8・9	F-30～-45, F-55～-60			192, 258, 270	口縁部欠損 把手の一部と肩部1/3残存		把手の断面5角形
69 316	ME4	須恵器	鉢	下水9	F-30～-45, F-80～-90			640, 191, 192	口縁部一部残存 底部欠損		
69 317	ME4	須恵器	蓋 (かえりあり)	下水10	F-45～-50, F-50～-55			203, 208	1/4残存 つまみ欠損		
69 318	ME4	須恵器	無台坏	下水10	F-30～-45 F-35～-45			1071, 280	口縁部から底部1/3残存		底部型おこし
69 319	ME4	須恵器	無台坏	下水10	F-60～-65			283	口縁部1/8残存		丸底 外面のケズリが丁寧で側面との 後縁はつきりする
69 320	ME4	須恵器	高坏	下水10	F-30～-45			1071	脚部1/8残存		
69 321	ME4	須恵器	高坏	下水10	西ヘキ	779			1/4残存 脚端部のみ		
69 322	ME4	須恵器	高坏	下水10	F-70			646	脚部1/6残存		
69 323	ME4	須恵器	壺	下水10	F-30～-45			1071	胴部のみ1/4残存		
69 324	ME4	土師器	台付甕	下水10	F-55～-60			282	台部1/3残存		ハケ調整痕
70 325	ME5	須恵器	蓋	G1 AN3W3	1層			49	口縁部2/3残存		型起こし
70 326	ME5	須恵器	蓋	G2南半	3層			64	口縁部からつまみ部1/5残存 つまみあり		
70 327	ME5	須恵器	蓋	G1 AN3W4				51	つまみ完形		
70 328	ME5	須恵器	蓋	G2	2・3層 南半分			64	端部細片		
70 329	ME5	須恵器	無台坏 (かえりあり)	G3	2層 暗褐色土			52	口縁部から体部1/4残存		
70 330	ME5	須恵器	坏	G4 AN5W7	1層	大形堅穴建物② の上面にあたる		81	口縁部細片	灯明か 採煤用	内面に煤付着
70 331	ME5	須恵器	高台坏	G6	1・2層			324, 451	体部から底部1/3残存		
70 332	ME5	須恵器	壺	G4	2・3層			64	口縁部から胴部一部残存		
70 333	ME5	須恵器	瓶	G5	1・2層			327, 317	底部1/3残存		
70 334	ME5	須恵器	鉢	G6北	1・2層			324	口縁部細片		
70 335	ME5	須恵器	横瓶	G2	2・3層 黒褐色土			64	胴部一部残存		内外面ナデ調整
70 336	ME3	須恵器	横瓶	2TN	2層		C192, C204		胴部のみ残存		斜格子叩き 同心円当て具
70 337	ME5	須恵器	高坏	G2	2・3層 黒褐色土			66, 67	底部1/2残存		焼成不良
70 338	ME5	土師器	甕	G4 AN4W3	1層	堅穴建物5の上 面にあたる		72	口縁部1/8残存		
70 339	ME5	灰釉陶器	碗	G5北西, G6 北, 北部分 掘下げ	2層			451, 326, 384	口縁部1/2残存		施釉は外面口辺部、内面体部のみ
70 340	ME4	須恵器	蓋	9T4	下部・黒土 を切る溝			173	つまみ完形・つまみ部のみ残存		小さな宝珠つまみ

表2 掲載出土遺物 (10)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
70 341	ME4	須恵器	蓋	9T3	SK4			9T3	つまみ7/12・つまみから天井部残存	転用硯か	内面滑らかで若干墨付着
70 342	ME4	須恵器	蓋	9T5	黒土面-50cm			667	つまみ完形・つまみから天井部残存		
70 343	ME4	須恵器	蓋	9T3	-20~-25 下黒土			176	口縁部1/6残存	転用硯か	内面滑らかで若干墨付着
70 344	ME4	須恵器	高台坏	9T3	-5~-10cm下部黒土			75	底部1/8残存		
70 345	ME4	須恵器	無台坏	10T2	F-25~-35			56	口縁部1/3残存 底部残存		底部ヘラ切り
70 346	ME4	須恵器	無台坏	9T3	-20~-25 黒色			176	底部1/3残存		底部ヘラ削り
70 347	ME4	須恵器	鉢	9T3	下部黒土			178	底部のみ残存		
70 348	ME4	須恵器	盤	10T3	下部黒土 -15~-20			148	口縁部細片		底部から側面ヘラ削り 底部指押え痕あり 349 と似る
70 349	ME4	須恵器	盤	10T4	攪乱土			63	口縁部細片		底部から側面ヘラ削り 348 と似る
70 350	ME4	須恵器	鉢	9T4	攪乱土			45	口縁部1/12残存 底部欠損		
71 351	ME4	灰釉陶器	碗か皿	9T3・4				75, 174	底部1/4残存		
71 352	ME4	灰釉陶器	碗か皿	10T2	F-25~-35			56	口縁部一部欠損		糸切り痕残る
71 353	ME4	緑釉陶器	輪花碗	9T3			528		口縁部細片		
71 354	ME4	山茶碗	碗	10T1	F-37			54	底部1/2残存	墨書	見込み部に指頭圧痕 高台内側に墨書 判読できない
71 355	ME4	山茶碗	碗	10T2	F-25~-35			56	口縁部1/3残存 底部一部欠損		皿のような形と大きさ
71 356	ME4	黄瀬戸	瓶子	9T3	F-30~-120	攪乱上		43	胴部から底部一部残存		画花文
71 357	ME7	須恵器	無台坏	14T	SD1 1層	SD1	312		底部5/12残存		黒味の強い粘土
71 358	ME7	須恵器	無台坏	13T	1層	SD3	264		体部1/5 口縁部一部残存		
71 359	ME7	須恵器	甌	13T	SK18 1層	建物⑩の柱穴	399		口縁部細片		焼成不良で黄白色を呈す
71 360	ME7	須恵器	蓋	13T-K3	SX2 2層	鍛冶遺構8の上面	N751		口縁部細片		
71 361	ME7	土師器	甕	13T-K3	SX2 2層	鍛冶遺構8の上面	N779		口縁部細片		
71 362	ME7	須恵器	蓋 (かえりあり)	13T	1層			1	口縁部細片		内外面に自然釉かかる 稜がはっきりしている
71 363	ME7	須恵器	蓋 (かえりあり)	14T	1層			2	口縁部細片		坏の可能性もある
71 364	ME7	須恵器	蓋 (かえりあり)	14T	2層		63		口縁部1/6残存		
71 365	ME7	須恵器	蓋 (かえりあり)	14T	2層		204		口縁部細片		
71 366	ME7	須恵器	蓋 (かえりあり)	13T	攪乱 GK5		109	34	口縁部から天井部 一部残存		
71 367	ME7 ME2	須恵器	蓋 (かえりあり)	13T-K3	2層		N739	92	口縁部細片		
71 368	ME7	須恵器	蓋	13T-K2	2層		513, N470		天井部1/5残存 つまみ一部欠損		接点はないが同一個体か
71 369	ME7	須恵器	蓋	13T	2層		223		口縁部1/6残存		
71 370	ME7	須恵器	高台坏	14T	2層			46	底部細片		
71 371	ME7	須恵器	高台坏	13T	2層			45	底部1/6残存		
71 372	ME7	須恵器	無台坏	13・14T	2・3層		608, 320		底部1/4残存		底部厚い 底部ヘラ切り
71 373	ME7	須恵器	無台坏	13T-K2	2層		643, 644		口縁部一部残存 底部1/2残存		底部ヘラ削り 底部と体部の稜線がはっきりしている
71 374	ME7	須恵器	鉢	14T	2層		43		底部細片		
71 375	ME7	須恵器	無台坏	14T	2層		48		口縁部細片		
71 376	ME7	須恵器	鉢	14T	2層		97		口縁部細片		
71 377	ME7	須恵器	瓶	14T	3層		387		口縁部細片		
71 378	ME7	須恵器	甌	14T	1層			4	口縁部・底部欠損		
71 379	ME7	須恵器	高坏	13T	2層		114		坏部のみ残存 口縁部・脚部欠損		
71 380	ME7	須恵器	高坏	14T	2層		47		底部1/6残存		
71 381	ME7	須恵器	壺	13T				72	口縁部細片		灰色 口縁端部内側へ肥厚
72 382	H9MT	須恵器	高台坏	SX1の東	SK15			28	口縁部から高台付 底部7/8残存		
72 383	H9MT	須恵器	碗		SK15			52	完形		体部の形は灰釉陶器と同じ
72 384	H9MT	須恵器	盤		SK15			52	口縁部から脚部 1/8残存		
72 385	H9MT	灰釉陶器	碗		SK1			14, SK1	口縁部1/2残存 体部・底部一部欠損		
72 386	H9MT	山茶碗	碗		SK11				底部のみ1/4残存	墨書	「十」か「×」か
72 387	H9MT	須恵器	蹄脚硯		SD1				底部のみ1/12残存	硯	同じ溝から円面硯出土 「I」P.184 図 116 の 14
72 388	H9MT	土師器 (平安)	碗		SX1-3 SX1-5			45, 61	高台一部・口縁部 一部残存 全体で1/2残存		
72 389	H9MT	土師器 (平安)	皿		SX1-5			64	口縁部1/3残存	灯明	内面・外面の口縁端部の一部に油煙付着
72 390	H9MT	土師器 (平安)	碗か皿		SX1の上部攪乱			64	口縁部欠損 1/6残存	灯明	内面に油煙付着
72 391	H9MT	灰釉陶器	輪花碗		SX1-2 SX1-3 SX1-4			65, 55, 60	口縁部2/3・体部・ 底部残存		四方の輪花

表2 掲載出土遺物 (11)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
72	392	H9MT	灰釉陶器	皿		SX1-1 SX1-2 SX1-3 SX1-4		68	1/2残存	墨書 灯明	内外面に墨書「大口(寺か)」
72	393	H9MT	須恵器	碗	MT			3	口縁部細片	灯明か	内面に油煙が付着
72	394	H9MT	灰釉陶器	碗か皿	S17E17			38	底部2/12残存	両面 転用硯	内面滑らかで朱墨付着 高台内側にも墨付着
72	395	H9MT	鉄製品	釘		中央西大きな 黒っぽい所 上部	SX1の上面	24	長さ13.5cm 頭の端折れる		断面方形
72	396	H9MT	鉄製品	釘		中央西大きな 黒っぽい所 上部	SX1の上面	24	長さ14.4cm 頭の端折れる		断面方形
72	397	H9MT	鉄製品	釘		中央西大きな 黒っぽい所 上部	SX1の上面	24	両先端折れる		断面方形
73	398	H9MT	須恵器	鉢	MT			2, 3	口縁部細片2片		復元径約 53cm 口縁端部に煤のよう なものの付着し、垂下方向に孔が通る
73	399	H9MT	須恵器	特殊な器台	S19E10			3, 4, 5	口縁部・底部破片 多数		復元径約 41cm タガ・透かしあり
74	400	ME4	精製 土師器	坏	F4E	礫間	排水路②		314, 661	口縁部1/3残存	放射状の暗文あり
74	401	ME3	精製 土師器	坏	AN6E9			A1223		口縁部片	放射状の暗文あり
74	402	ME2	精製 土師器	坏	AN8E9	2層			101	口縁部片	放射状の暗文あり
74	403	ME3	精製 土師器	坏	AN3E5	3層 黒褐色土			685	口縁部一部残存	放射状の暗文あり
74	404	ME4	精製 土師器	坏	F3E	SD2	排水路②	687		口縁部片	2 段の放射状の暗文あり
74	405	ME6	精製 土師器	坏	AN6E9 F区	3層		N322		口縁部1/10残存	放射状の暗文あり
74	406	ME3	精製 土師器	坏	AS5・6E1	ベルトはず し			75	口縁部片	口縁端部内側に丸く肥厚 2 段の放射状の暗文あり
74	407	ME2	精製 土師器	坏	AN1E5	3層 黒褐色土			51	口縁部片	2 段の放射状の暗文あり 口縁端部内側に丸く肥厚
74	408	ME3	精製 土師器	坏	AN5E9				295	口縁部片	口縁端部内側に丸く肥厚 斜放射状の暗文
74	409	ME2	精製 土師器	坏	AN7E9	1層			672	口縁部片	口縁端部内側に丸く肥厚 放射状の暗文あり
74	410	ME3	精製 土師器	坏	AN7E9	集石検出中			684	口縁部片	口縁端部内側に丸く肥厚 放射状の暗文あり
74	411	ME3	精製 土師器	碗	AN6E9			A736	711	底部細片	放射状の暗文あり
74	412	ME2 ME3 ME4	精製 土師器	碗	AN6E9			A592 (ME3) A737 (ME3) A757 (ME3) A759 (ME3) A736 (ME3) A668 (ME3) A737 (ME3)	182 (ME4) 119 (ME2)	1/6残存	口縁端部内側に丸く肥厚 口縁部に連弧状・放射状の暗文と 底部に螺旋状の暗文あり
74	413	ME6	精製 土師器	坏	AN8E9	3層	SX3の上面	N635		細片	口縁端部内側に丸く肥厚 左上がりの放射状の暗文あり
74	414	ME3	精製 土師器	坏	AN7E10			A359		細片	2 段の放射状の暗文あり
74	415	ME2	精製 土師器	坏					115, 119	底部細片	放射状と螺旋状の暗文あり
74	416	ME4	精製 土師器	坏	下水10	F-45~-50			203	細片	放射状の暗文あり
74	417	ME2	精製 土師器	坏	AS4E1	1・3層			74	細片	緻密で細かい間隔の放射状の暗文あり
74	418	ME3	精製 土師器	坏	AN5E9				295	細片	緻密で細かい間隔の放射状の暗文と 2 段の螺旋状の暗文あり
74	419	ME4	精製 土師器	高台坏	下水10	F-45~-50			203	底部細片	放射状の暗文あり
74	420	ME3	精製 土師器	蓋	AN7E9			N65		口縁部片	外側に暗文あり
74	421	ME6	精製 土師器	高坏	AN6E10	SD2	ME6 SD2	N658		細片	内面に放射状の暗文あり 外面は削りと指押え痕あり
74	422	ME3	精製 土師器	高坏	AN5E9				295	坏部細片	外面に赤色顔料塗付 (ベンガラか) 内面赤色顔料で放射状・螺旋描く (422, 423, 424)とも似ている
74	423	ME6	精製 土師器	坏	F区	セクション中		N235		細片	外面に赤色顔料塗付 内面に放射状の線と螺旋を描く
74	424	ME6	精製 土師器	坏	F区	3層			1	細片	外面に赤色顔料塗付 内面に放射状の線描がある
74	425	ME2	精製 土師器	坏	AN2・3E9	ドテ			133	口縁部片	暗文なし
74	426	ME2	精製 土師器	坏	AN9E8	3層 暗褐色土			14	口縁部片	暗文なし
74	427	ME2	精製 土師器	坏	AS5E1	3層			84	口縁部片	暗文なし 外反する口縁
74	428	ME3	精製 土師器	坏	AS6E1	3層			73	口縁部片	暗文なし
74	429	ME2	精製 土師器	坏	AN7 ~ 9E9 排土 N7E9	1層			101, 672	1/3残存	暗文なし 外面にミガキ調整なし 口縁外反 端部内側に丸く肥厚
75	430	ME2	精製 土師器	坏	AS1E1	3層 暗褐色土			63	口縁部片	暗文なし 口縁端部両側に窪み
75	431	ME2 ME3 ME5 ME6	精製 土師器	碗	AN5・6E9			A1203 (ME3) A1204 (ME3) N797 (ME6)	119 (ME2) 295 (ME3) 297 (ME3) 187 (ME5)	底部下半分残存	暗文なし

表2 掲載出土遺物 (12)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
75 432	ME2	精製土師器	高台坏	AN1・S1E5	ドテ			52	高台部片		暗文なし
75 433	ME4	精製土師器	蓋	F2W	黒色土			132	つまみのみ残存		暗文なし
75 434	ME4	精製土師器	蓋	AN6・7E9				183	口縁部片		暗文なし
75 435	ME2	精製土師器	高坏	AS2E1	3層			64	脚部細片		暗文なし
75 436	ME4	精製土師器	高坏	下水10	F-50~-55			281	脚部細片		暗文なし
75 437	ME5	精製土師器	坏	G4	G4SX18-2, SX19-3	大形堅穴建物①		401, 421	口縁部細片		2段の放射状の暗文あり
75 438	ME5	精製土師器	坏	G4	SX19-1, SX19-1・2のドテ	大形堅穴建物①		423, 500	口縁部片		2段の放射状の暗文あり
75 439	ME5	精製土師器	無台坏	G4	SK32・SX12-3	大形堅穴建物②	N282	357	口縁部1/5 底部1/3残存		放射状と螺旋の暗文あり
75 440	ME5	精製土師器	高台坏	G4	SD4 底近く	大形堅穴建物②と切り合う溝①		427	高台一部残存		放射状と螺旋の暗文あり
75 441	ME5	精製土師器	坏	G4	SK14	大形堅穴建物①と切り合う		88	口縁部細片		傾きの違う放射状の暗文が重なる
75 442	ME5	精製土師器	坏	G4 AN5W1	1層	大形堅穴建物①の上面		81	底部細片		小さな螺旋の暗文2条あり
75 443	ME5	精製土師器	坏	G1・4区	SX16 SX15 SK50	大形堅穴建物①・堅穴建物5と切り合う		386, 387, 424	1/10残存		放射状と螺旋の暗文あり
75 444	ME5	精製土師器	皿	G3	2層 暗褐色土			53	底部のみ1/8残存		放射状と螺旋の暗文あり 外面に指押え痕あり 胎土に砂粒混じる
75 445	ME5	精製土師器	坏	G2	2層 (暗褐色土) ~3層 (黒色土)			67	口縁部細片		放射状の暗文あり
75 446	ME5	精製土師器	坏	G1 AN3W5	1層			44	口縁部細片		2段の放射状の暗文 口縁部内側を丸く肥厚
75 447	ME5	精製土師器	坏	G1 AN3W5	1層			44	口縁部細片		内面に左上がりの放射状の暗文あり
75 448	ME5	精製土師器	皿	G1 AN3W3	1層			49	口縁部から胴部の細片		口縁部内側を丸く肥厚 放射状の暗文あり
75 449	ME5	精製土師器	高台坏	G1 AN3W4	1層			51	高台部細片		
75 450	ME5	精製土師器	甕	G4	SX18-1	堅穴建物5を切る		400	口縁部細片		受け口状
75 451	ME3	精製土師器	高坏	2TS	1・2層			261	脚部1/4残存 端部欠損		外面指押えて凹凸あり
75 452	ME7	精製土師器	坏	I3T	SK6 2層		85	3	口縁部細片		放射状の暗文あり 口縁部内側を丸く肥厚
75 453	ME7	精製土師器	坏	I3T-K2	2層		660		口縁部細片		放射状の暗文あり
75 454	ME7	精製土師器	坏か皿	I4T	2層		N266		底部細片		放射状の暗文あり
75 455	ME7	精製土師器	坏か皿	I4T	SX1 3層		424		胴部細片		放射状の暗文あり
75 456	ME6	製塩土器		F区	SD3	ME6 SD3	N782, N813		脚部のみ残存 先端折れている		
75 457	ME6	製塩土器		F区	3層		N853		脚部一部残存 先端折れている 他の3点に比べ太い		
75 458	ME2	製塩土器		AS2E1	3層 暗茶褐色			64	脚部のみ残存		
75 459	ME3	製塩土器		AN9E9			N756		脚部のみ残存 先端折れている		
75 460	ME5	製塩土器		G4	SX9	溝①の上面		410	口縁部細片		
75 461	ME5	製塩土器		G4	SB2	堅穴建物5	N384		口縁部細片		
75 462	ME3	製塩土器		AS3E1	3層		A90		口縁部細片		
75 463	ME3	製塩土器		AS7E1	SX1	鍛冶遺構7	A250		口縁部細片		
75 464	ME4	製塩土器		下水10	東壁セクション			984	口縁部1/6残存		
75 465	ME7	製塩土器		I3T-K2	2層		557		口縁部細片		
76 466	ME3	鉄製品	紡錘車	AN6E9	2層 黄色岩石粒まじり暗褐色土		N750		ほぼ完形		
76 467	ME5	鉄製品	刀子	G4	SK41				ほぼ完形		
76 468	ME2	鉄製品	釘	AN6E9	2層 岩石粒混じりの暗褐色土		N382		長さ11cm		断面四角形
76 469	ME6	石製品	管玉	F区	3層		290		長1.7cm, 最大径1.0cm		碧玉製、濃緑色
76 470	ME1	石製品	砥石	AS5E1	3層				粗砥		4面とも滑らか
76 471	ME2	石製品	砥石	AN6E10	2層			361	仕上砥		4面とも滑らか
76 472	ME5	石製品		G4 AN4W6	1層			77	幅3.3cm, 厚さ6.5mm 長さ不明		片面が凹む
76 473	ME2	羽口		AS7E1	SX1	鍛冶遺構7	N254		端部1/4残存		鉄滓付着 推定外径6.4cm 推定内径2.5cm
76 474	ME3	鉄滓		AS7E1	3層 SX1	鍛冶遺構7	N241				弱い磁着あり 鉄さび色の固まり 重さ22.9g
76 475	ME2	鉄滓	碗形滓	AS3E1	1・2層						磁着あり 径6cm, 厚2.3cm, 重さ109g
76 476	ME3	鉄滓		AN7E9			N381				1~2cmの礫も融着する光沢ある黒茶色 重さ16.1g
76 477	ME3	鉄滓		AN7E8	集石 3層 黄褐色土						弱い磁着あり 2~3cmの礫も融着する 黄濁ある緑黒褐色 灰の構造の一部の反映か 重さ16.4g
77 478	ME2	和鏡		B区 S4E27	SK6				完形		山吹双鳥文鏡
78 479	ME1	須恵器	瓶	S12E32 SD	SD3			764	細片		瓶の脚部

表2 掲載出土遺物 (13)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
78 480	ME1	須恵器	小壺	S8E33	南北溝 東端上	SD3の支流	124		1/5残存	朱墨汁の容器	内面に朱墨が付着
78 481	ME3	須恵器	蓋	S5E35	SK2・SK1			308, 313, 318	口縁部1/6残存 つまみ欠損	転用硯	内面滑らかで墨付着
78 482	ME1	須恵器	蓋	S8E32	SD3			758	つまみ部のみ残存	転用硯	内面滑らか
78 483	ME1	須恵器	蓋	S13E22	S13E22 P		159		つまみ部のみ残存	転用硯	内面滑らかで墨付着
78 484	ME3	須恵器	盤	D区	SD1	正倉西4の東端 を切るSD	A1541		底部のみ1/6残存	転用硯	内面・外面滑らかで墨付着
78 485	ME1	須恵器	高台坏	S7E34	SD3	SD3		768	底部のみ1/8残存	転用硯 (朱墨)	内面滑らかで朱墨付着
78 486	ME3	須恵器	高台坏	S5・S6・E32	3層, S6E32 SD1			141, 310	高台付底部1/2残存	転用硯 (朱墨)	内面朱墨付着 外面滑らかさはないが墨付着か
78 487	ME1	須恵器	火舎	S13E22P	S13E22 P		158		2/5残存・三脚の一 脚のみ残存		内面に煤付着 底部外面に斜格子叩具痕
78 488	ME2	灰釉陶器	碗	S7E27	S7E27 SK2		N13		底部のみ1/2残存	転用硯 (朱墨) 刻書	内面に朱墨付着 刻書あり「謹解…」
78 489	ME1	灰釉陶器	皿	S14E24	S14E24 SK2・3	集石土坑		169, 680, 681	底部残存 口縁部一部残存		
78 490	ME1	灰釉陶器	皿	S10・11E28 ・29, S10E30	S10E30 SK1		585	130, 743	口縁部一部・底部 残存		
78 491	ME1	青磁	碗	S8E30	S8E30 SD2溝				口縁部細片		連弁文
78 492	ME2	瓦	平瓦	S3E23	区画溝を切る 南北溝中	後世溝1		147	広端面と片側面残 存		凸面は縄目 凹面は布目
78 493	ME1	土製品	土馬	S9E32	南北SD	SD3	N127		頭部のみ		
78 494	ME1	土製品	泥面子	表探				659	裏面は2方向から 欠ける		大黒天か 長さ3.6cm・横3cm
79 495	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S4E39 SK1	土坑	109		高台剥離・底部1/2 口縁部1/3残存		内面煤付着
79 496	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S4E39 SK1	〃	106		口縁部欠損 底部残存	墨書	高台内側に墨書あり 2文字か？ 見込み部に指圧痕
79 497	ME1	山茶碗	皿	S4E39	S4E39 SK1	〃	107		完形	墨書	底部外面に墨書「寿」か
79 498	ME1	山茶碗	碗	S10E30	南北溝 SD2	SD2	116		底部から体部1/3 残存		見込み部に指圧痕
79 499	ME1	山茶碗	碗	S10E30	南北溝 SD2	SD2	115		口縁部欠損・体部 から底部1/2残存		見込み部に指圧痕
79 500	ME1	山茶碗	皿	S10E30	南北溝 SD2	SD2	110		1/3残存		底部内面指圧痕
79 501	ME1	山茶碗	皿	S10E30 1層～3層	南北溝 SD2	SD2	114		5/6残存		底部内面指圧痕
79 502	ME1	山茶碗	皿	S10E30	南北溝 SD2	SD2	111		1/6残存		
79 503	ME1	山茶碗	皿	S10E30	南北溝 SD2	SD2	113		3/5残存		底部内面指圧痕
79 504	ME1	山茶碗	皿	S11E30	東西溝 SD2	SD2	118		1/3残存		底部内面指圧痕
79 505	ME1	山茶碗	碗	S10・11E30	S10E30 SK1 S11E30 SK1		614, 615		口縁部1/3残存 底部1/4残存		口縁端部面取り
79 506	ME1	山茶碗	皿	S10E30	S10E30 SK1		613		完形		底部内面指圧痕
79 507	ME1	山茶碗	皿	S11E30	S11E30 SK1		625		完形		底部内面指圧痕
79 508	ME3	山茶碗	碗	S5E30	S5E30 SK1	大きい石のある 土坑	A1411		口縁部2/3・底部残 存		
79 509	ME2	山茶碗	碗	N3E33	N3E33 SK16			329	完形		内傾する小さな高台 口縁端部内側に肥厚
79 510	ME2	山茶碗	皿	N3E33	N3E33 SK16			329	完形		底部内面指圧痕
79 511	ME1	山茶碗	碗	S15E25	S15E25 SK1	集石土坑			高台付底部1/4残 存		
79 512	ME2	山茶碗	碗	N2E25	N2E25 SK1			344	1/2残存		見込み部に指圧痕
79 513	ME2	天目	茶碗	N2E25	N2E25 SK1			344	底部欠損 口縁部1/4残存		
79 514	ME1	天目	茶碗	S13E25	SD	後世溝2	478		口縁部・体部1/6残 存		腰部は露胎
79 515	ME1	古瀬戸	菊皿	S8・12・14 E24・25・32	SD, SD3, 2 層	SD3	S14E24 SD S8E32 SD3 S12E25 2層 S13E25 2層		1/2残存	高台部 を灯明に転用	内面全面に灰釉と外面口縁に灰釉 内面ビン跡 外面煤付着
79 516	ME2	古瀬戸	華瓶	N2E26	P1		N27		口縁部欠損 底部一部欠損		底部糸切り
79 517	ME1	青磁	碗	S11E31	SD	SD3の流れ	S11E31 SD		高台付底部1/4残 存		
80 518	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S5E39 SK1	土坑	50		底部残存 口縁部一部残存		
80 519	ME1	山茶碗	碗	S5E39	S5E39 SK1	〃	80, 68, 103		完形		外面煤付着
80 520	ME1	山茶碗	碗	S5E39	S5E39 SK1	〃	64, 67, 79, 89, 99, 154		口縁部1/4欠損		
80 521	ME1	山茶碗	碗	S5E39	S5E39 SK1	〃	49		口縁部1/3欠損		底部内面指圧痕
80 522	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S5E39 SK1	〃	76		口縁部1/3欠損		底部内面指圧痕 高台剥離
80 523	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S5E39 SK1	〃	62		1/2残存		
80 524	ME1	山茶碗	碗	S5E39	S5E39 SK1	〃	83		3/5残存		内・外面煤付着
80 525	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S5E39 SK1	〃	51		完形		
80 526	ME1	山茶碗	碗	S5E39	S5E39 SK1	〃	77, 90		口縁部1/4欠損		底部内面指圧痕
80 527	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S5E39 SK1	〃	59, 84		ほぼ完形		外面に煤付着
80 528	ME1	山茶碗	碗	S4E39	S5E39 SK1	〃	94, 82, 87, 91, 92		口縁部1/3欠損		内面に煤付着
80 529	ME1	山茶碗	碗	S4・5E39	S5E39 SK1 S4E39 SK1	〃	75, 88, 90, 108		口縁部1/3欠損		外面に煤付着
80 530	ME1	山茶碗	皿	S4E39	S5E39 SK1	〃	100		ほぼ完形		外面に煤付着
80 531	ME1	山茶碗	皿	S4E39	S5E39 SK1	〃	67		ほぼ完形		底部内面指圧痕 口縁部に施釉
80 532	ME1	山茶碗	皿	S4E39	S5E39 SK1	〃	74		完形		内・外面煤付着
80 533	ME1	山茶碗	皿	S4E39	S5E39 SK1	〃	101		口縁部一部欠損		

表2 掲載出土遺物 (14)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考	
							取上番号	一括取上番号				
80	534	ME1	山茶碗	Ⅲ	S4E39	S5E39 SK1	〃	69, 73		完形		外面に煤付着
80	535	ME1	山茶碗	Ⅲ	S5E39	S5E39 SK1	〃	81		完形		内・外面煤付着
80	536	ME1	中世陶器	甕	S4・5E39	S5E39 SK1	〃	57, 65, 78, 85, 86		口縁部肩部1/2残存		
80	537	ME1	土鍾		B・D区 S5E39	S5E39 SK1 下層	〃		724	完形		長 4.8, 径 0.9～1.5cm
80	538	ME1	土鍾		B・D区 S5E39	S5E39 SK1 下層	〃	No.70	724	完形		長 4.5, 径 1.0～1.5cm
80	539	ME1	土鍾		B・D区 S5E39	S5E39 SK1 下層	〃	No.61	724	完形		長 4.2, 径 1.1～1.5cm
80	540	ME1	土鍾		B・D区 S5E39	S5E39 SK1 下層	〃	No.56	724	完形		長 4.4, 径 1.1～1.3cm
80	541	ME1	土鍾		B・D区 S5E39	S5E39 SK1 下層	〃		724	完形		長 4.6, 径 1.1～1.3cm
80	542	ME1	須恵器	無台坏	S5E39	S5E39 SK1	〃	N102		底部細片	転用硯	内面大変滑らかで朱墨付着
80	543	ME1	灰釉陶器	Ⅲ	S5E39	S5E39 SK1	〃			高台付底部1/6残存	転用硯	内面擦痕あり
80	544	ME2	須恵器	坏	C区 S12E15	S12E15 SK2	土坑		567	口縁部細片	灯明	一致する内面・外面に煤付着
80	545	ME2	土師器 (平安)	Ⅲ	C区 S11E15	S11E15 SK2	土坑		559	底部のみ1/4残存		内外面に光沢のある黒色の付着物（漆か）
80	546	ME2	山茶碗	碗	C区 S11E15	S11E15 SK1	土坑	560		底部のみ残存	転用硯か	内面煤付着
80	547	ME4	山茶碗	碗	C区 S17E15	3層 黒色土層 SK	土坑		1043	口縁部1/5・底部1/2残存	墨書	見込み部に指圧痕 高台内側に墨書「十」
80	548	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	S12E15 SK7	土坑	106下		完形		
80	549	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃		178	底部残存 口縁部5/12残存		
80	550	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃	104		口縁部1/2欠損		
80	551	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃	105		完形		
80	552	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃		178	底部残存 口縁部1/2残存		
80	553	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃	106上		口縁部1/2欠損		
80	554	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃	103		口縁部一部欠損		
80	555	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃	107		完形		
80	556	ME3	山茶碗	Ⅲ	C区 S12E15	〃	〃		178	口縁部1/2 底部5/12残存		
81	557	ME4	山茶碗	碗	F1		土坑	462, 488	26, 299	口縁部1/4・底部3/4残存		底部内面指圧痕
81	558	ME4	山茶碗	碗	F1		〃	469, 475, 474, 478, 477, 476, 454, 467, 283, 456, 458, 457, 459, 26		ほぼ完形 口縁部一部欠損		
81	559	ME4	山茶碗	碗	F1・2		〃	486, 280, 281, 312		口縁部2/3残存		内面に煤付着
81	560	ME4	山茶碗	碗	F1・2・3		〃	461, 317, 185		口縁部1/6・底部1/2残存		
81	561	ME4	山茶碗	碗	F1・2		〃	483, 484, 479, 441, 449, 447, 450, 451, 26	26	ほぼ完形 口縁部一部欠損		
81	562	ME4	山茶碗	碗	F1		〃	480, 471		ほぼ完形 口縁部一部欠損		
81	563	ME4	山茶碗	碗	F1		〃	472, 482	26	口縁部1/6残存		
81	564	ME4	山茶碗	碗	F1・3		〃	468, 453, 452, 374, 370	26, 71	口縁部1/2残存		
81	565	ME4	山茶碗	碗	F1・2		〃	488, 460, 470, 463, 282, 54, 341, 213		口縁部1/2残存		内面に煤付着
81	566	ME3	陶器	台付灯明受 Ⅲ	AN1E1	SK2	集石土坑		350	口縁部・底部一部欠損		
81	567	ME4	山茶碗	碗	下水8・9	SK5	集石土坑		下水 8・9	口縁部1/4残存		
81	568	ME4	山茶碗	碗	F1・2			43, 75, 76, 77, 84, 87	71	口縁部1/6残存		胎土緻密
81	569	ME4	山茶碗	碗	F1・2			294, 211		口縁部一部残存		内面に煤付着
81	570	ME4	山茶碗	碗	F3E	黄色土			131	底部1/3残存		
81	571	ME4	山茶碗	碗	下水8・9	北拡張土坑 すぐ外			256	底部1/2口縁部一部残存		高台部だけ胎土緻密
81	572	ME4	山茶碗	碗	F3			124, 34, 18, 302, 73, 33, 69, 58	122	口縁部1/3残存		
81	573	ME4	山茶碗	碗	F3E			578, 582, 583	83, 84, 736, 131	口縁部1/2残存		
81	574	ME4	山茶碗	碗	F3	黒褐色土直上		214		底部1/4残存		
81	575	ME4	山茶碗	碗	下水7	F-70			241	底部1/2残存		胎土緻密
81	576	ME4	山茶碗	碗	F2			101, 133, 192, 194, 235, 237, 238, 271, 275, 344		口縁部1/3残存		
81	577	ME2	山茶碗	碗	AS3E1	3層 暗茶褐色			69	2/3残存		胎土緻密 薄手 底部内面指圧痕
81	578	ME4	山茶碗	碗	F1	暗褐色土上部		361		底部1/6残存		
81	579	ME2	山茶碗	碗	AN3E9	3層 茶褐色土			122	底部残存	墨書	胎土緻密 薄手 高台内側に墨書 判読できない

表2 掲載出土遺物 (15)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
81	580	ME2	山茶碗	碗	AN2・3E9 トテ			133	底部のみ1/6残存 残存	墨書	胎土緻密 薄手 高台内側に墨書 判読できない
81	581	ME4	山茶碗	皿	F1	黒土上面ま たは褐色土	438		ほぼ完形 口縁部一部欠損		
81	582	ME3	陶器	卸皿	AN7E7	1層		98	底部1/5残存		
81	583	ME3	山茶碗	皿	AN6E9		A1213		底部1/6残存		内面に赤褐色の付着物 朱墨（ベンガラ）か
81	584	ME4	陶器	皿	下水10	F-65～70		286	口縁部一部残存		釉薬の発色不良
81	585	ME2	陶器	壺	AN7・9E9			106, AN9E9	口頸部1/2残存		釉薬の発色不良
82	586	ME3	山茶碗	碗	1T AN8E1	2層	A1242		口縁部1/4 底部2/3残存		胎土緻密
82	587	ME3	土師器	皿	1T	第2回目 精査 中北側		222	底部1/6残存		かわらけ
82	588	ME5	山茶碗	碗	G3	2層 暗褐色土		58	ほぼ完形 口縁部一部欠損		底部内面指圧痕
82	589	ME5	山茶碗	碗	G3	2層 暗褐色土		58	ほぼ完形 口縁部一部欠損		底部内面指圧痕
82	590	ME5	山茶碗	碗	G3	2層		52	口縁部1/3・底部 2/3残存		胎土緻密
82	591	ME5	山茶碗	碗	G3	1・2層		50, 52, 58	2/3残存		
82	592	ME5	山茶碗	碗	G4 AN5W6	1層		80	底部のみ残存		内面に煤
82	593	ME5	山茶碗	皿	G3	2層 暗褐色土		58	完形		胎土緻密
82	594	ME5	山茶碗	皿	G6	1・2層 北		324	完形		
82	595	ME3	土鍾		A区	排土		657	ほぼ完形		長5.6cm, 径1.5～2.4cm
82	596	ME3	土鍾		A区	排土		662	ほぼ完形		長4.9cm, 径1.4～2.2cm
82	597	ME3	土鍾		AN1E1	SK2		4	ほぼ完形		長4.5cm, 径1.4～2.2cm
82	598	ME3	土鍾		AN8E10			351	ほぼ完形		長3.6cm, 径1.6～2.3cm
82	599	ME3	土鍾		AN2E9	3層	A912		ほぼ完形		長4.5cm, 径1.5～2.4cm
82	600	ME3	土鍾		AN6E7	2層		97	ほぼ完形		長4.9cm, 径1.0～1.6cm
82	601	ME3	土鍾		A区	遊離		493	完形		長4.7cm, 径1.2～1.7cm
82	602	ME3	土鍾		AS5E1			78	完形		長4.8cm, 径1.2～1.6cm
82	603	ME2	土鍾		AN6E8	3層		26	ほぼ完形		長3.9cm, 径1.1～1.5cm
82	604	ME3	土鍾		AN8E5		N25		ほぼ完形		長4.3cm, 径1.0～1.4cm
82	605	ME3	土鍾		AN6E9		A519		ほぼ完形		長4.3cm, 径0.9～1.4cm
82	606	ME3	土鍾		AN7E9		A620		ほぼ完形		長3.7cm, 径1.1～1.3cm
82	607	ME5	土鍾		F4E2	こげ茶黄色 下面	F31		完形		長2.5cm, 径0.9～1.3cm
82	608	ME5	土鍾		E4E1	転落石はず し時		212	完形		長4.7cm, 径1.0～1.7cm
82	609	ME5	土鍾		F5E3	黄色土		199	完形		長4.2cm, 径1.3～1.7cm
82	610	ME4	土鍾		下水4	大木の周辺		610	完形		長5.0cm, 径1.4～2.3cm
82	611	ME4	土鍾		下水7	F0～25		193	ほぼ完形		長5.2cm, 径0.8～1.4cm
82	612	ME5	土鍾		G1 AN3W6	1層		48	ほぼ完形		長4.2cm, 径1.1～1.7cm
82	613	ME5	土鍾		G1 AN3W7	1層		46	完形		長3.8cm, 径1.1～1.7cm
82	614	ME5	土鍾		G1 AN3W4	1層		51	ほぼ完形		長4.9cm, 径1.1～2.1cm
82	615	ME5	土鍾		G1 AN3W1	1層		47	ほぼ完形		長3.5cm, 径1.2～1.5cm
82	616	ME5	縄文	深鉢	G6	2層 北部分掘 り下げ		451	細片		押型文（山形）
82	617	ME4	縄文	深鉢	E5	2層	C1932		口縁部のみ		押し引き渦巻文
82	618	ME4	縄文	深鉢	E5	2層 黒褐色土		12	口縁部のみ		押し引き渦巻文
82	619	ME4	縄文	深鉢	E5	2層 黒褐色土		12	口縁部片		620 と同一個体か 押し引き渦巻文
82	620	ME4	縄文	深鉢	E5	3層		461	口縁部か		619 と同一個体か 押し引き渦巻文
82	621	ME4	縄文	深鉢	下水1	SK1	下水1	929	口縁部細片		622 と同一個体か 隆帯文・連続刺突
82	622	ME4	縄文	深鉢	下水1	SK1			口縁部のみ		621 と同一個体か 隆帯文・連続刺突
82	623	ME3	縄文	深鉢	3T60	2層		272, 277	口縁部のみ		渦巻文・沈線文
82	624	ME4	縄文	深鉢	E5	SK59		503	口縁部細片		押し引き文・渦巻文・沈線文
82	625	ME3	縄文	鉢か	6TS	2層	A1361		口縁部のみ		凹線文
82	626	ME4	縄文	深鉢	E5	SD4	C2329		口縁部のみ		井桁状隆帯文・沈線文
83	627	ME1	縄文	深鉢	S12E27		143, 149		口縁部から胴部 1/9残存		
83	628	ME4	石器	石棒	3T 64番地	2層掘り下げ		478	完形		円礫の表面を活かしている
83	629		石器	磨石	排土				長8.8cm, 幅7.2cm, 厚5.2cm, 重451.8g		使用痕
83	630	ME3	石器	石鍾	AN8E7	1層		93	長4.4cm, 幅4.4cm, 厚0.75cm, 重22.1g		厚みの薄い川原石の両端を打ち欠く
83	631	ME4	石器	石鍾	下水4			612	長5.2cm, 幅4.15cm, 厚1.1cm		厚みの薄い川原石の両端を打ち欠く
83	632	ME3	石器	石鍾	AS7E1	3層 黒褐色土		72	長5.0cm, 幅4.4cm, 厚0.8cm, 重29.5g		厚みの薄い川原石の両端を打ち欠く
83	633	ME3	石器	石鍾	3T64番地	2層		302	長4.8cm, 幅1.4cm, 厚0.85cm, 重6.7g		細長い川原石の両端を打ち欠く
83	634	ME1	石器	磨製石斧	S11・12E31 石群中				長4.7cm, 幅2.5cm, 厚0.8cm, 重21.2g 刃部欠損		断面は長方形
83	635		石器	打製石斧	排土中			656	長9.7cm, 幅8.6cm, 厚1.8cm, 重159.0g 完形		分銅形 刃部は片面より剥離調整している
83	636	ME4	石器	打製石斧	E5	2層を地山ま で掘り下げ		100	長9.75cm, 幅5.5cm, 厚2.25cm, 重95.6g 完形		全面に剥離調整されている 撥形
83	637	ME4	石器	打製石斧	E5	2層を地山ま で掘り下げ		100	長11.9cm, 幅4.7cm, 厚1.9cm, 重137.9g		細長い撥形 全面に剥離調整している

表2 掲載出土遺物 (16)

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
83	638	ME3	石器	打製石斧	8T	赤褐色 上層		604	長9.8cm, 幅4.3cm, 厚1.1cm, 重68.1g 基部の上面欠損か		刃部は片面より剥離調整している
83	639	ME3	石器	打製石斧	8T	2層	A1377		長13.3cm, 幅4.8cm, 厚1.55cm, 重130.1g		両端とも刃部になっている 片面に自然面残る
83	640	ME1	石器	打製石斧	S12E27		148		長15.0cm, 幅5.3cm, 厚2.0cm, 重192.6g 完形		短冊形 基部の上面に自然面残る
83	641	ME1	石器	打製石斧	礎石建物西側列 北から2番目の根石掘方内				長15.6cm, 幅5.2cm, 厚2.9cm, 重299.8g 完形		短冊形 片面に自然面残る
83	642	ME2	石器	打製石斧	C区 S12E15	2層 黄褐色土		514	長15.1cm, 幅10.5cm, 厚3.4cm 刃部残存		約1/2 残存で重さが674g 幅 10.5cmある大形
83	643	ME4	石器	打製石斧	E7	SK108		792	長14.6cm, 幅8.5cm, 厚2.2cm 刃部欠損		約1/2 残存で重さが317.8g 幅 8.5cmある大形
84	644	ME3	石器	石鏃	AN7E10	2層 黄色土	A329		長2.0cm, 幅1.95cm, 厚0.7cm, 重1.6g 完形		チャート
84	645	ME3	石器	石鏃	AN5E6	3層 掘立検出面		679	長2.2cm, 幅1.9cm, 厚0.45cm, 重1.3g 完形		チャート
84	646	ME4	石器	石鏃	C区 CS17E16			1039	長2.6cm, 幅1.8cm, 厚0.3cm, 重1.0g 完形		チャート
84	647	ME2	石器	石鏃	B・D区 S2E27	1・2層 暗褐色土		198	長2.95cm, 幅1.8cm, 厚0.45cm, 重1.9g 完形		チャート
84	648	ME3	石器	石鏃か	AN7E6	2層 黄褐色土		95	長2.3cm, 幅2.0cm, 厚0.5cm, 重2.2g 完形		チャート
84	649	ME3	石器	石鏃	AS6E1		A22		長4.4cm, 幅1.2cm, 厚0.55cm, 重2.4g 完形		下呂石
84	650	ME2	石器	石鏃	AN1E5			54	長3.8cm, 幅1.3cm, 厚0.5cm, 重1.3g 完形		下呂石 有茎石鏃
84	651	ME2	石器	石鏃	A区	3層 暗褐色土		14	長3.4cm, 幅1.0cm, 厚0.7cm, 重2.4g 茎の先端部欠損か		チャートか 有茎石鏃
84	652	ME2	石器	石鏃	A区			683	長4.4cm, 幅1.7cm, 厚0.65cm, 重5.2g 先端・茎欠損か		下呂石
84	653	ME3	石器	石鏃か	AN7E9	集石中		138	長4.3cm, 幅1.5cm, 厚0.85cm, 重5.4g 完形		チャート
84	654	ME1	石器	石錐	S3E36 S3E37ド				長3.6cm, 幅1.5cm, 厚0.65cm, 重2.6g 完形		安山岩 基部の断面は長方形 錐部の断面三角形
84	655	ME3	石器	石匙	A区	2層 遊離		493	長3.95cm, 幅3.6cm, 厚0.9cm, 重13.2g		チャート
84	656	ME3	石器	削器・搔器	AS7E1	3層 黒褐色土		72	長4.2cm, 幅2.9cm, 厚0.55cm, 重7.2g		チャート
84	657	ME5	石器	削器・搔器	I2T S25E29			14	長3.2cm, 幅1.5cm, 厚0.4cm, 重2.6g		チャート
84	658	ME3	石器	削器・搔器	C区 S14E15	SD側		172	長2.9cm, 幅2.6cm, 厚1.1cm, 重8.3g		チャート
84	659	ME3	石器	削器・搔器	C区 S14E15	SD側		172	長2.9cm, 幅3.0cm, 厚0.9cm, 重6.0g		チャート
84	660	ME2	石器	削器・搔器	C区	2層 茶褐色土またはN2 ～4E9 3層		535	長5.3cm, 幅2.9cm, 厚0.8cm, 重17.1g		チャート
84	661	ME5	石器	削器・搔器	G3南壁ツォン		N125		長5.1cm, 幅5.3cm, 厚1.6cm, 重50.2g		頁岩 自然のくぼみが手に馴染み使い勝手が良い
84	662	ME1	石器	削器・搔器	S7E33	1層			長3.8cm, 幅6.1cm, 厚1.2cm, 重28.5g 完形		チャート
84	663	ME2	石器	削器・搔器	B・D区	2層		272	長4.7cm, 幅5.0cm, 厚1.05cm, 重27.6g		頁岩
84	664	ME2	石器	削器・搔器	C区 S11E14	1・2層 暗褐色土		515	長5.5cm, 幅3.2cm, 厚1.3cm, 重21.3g		チャート
84	665	ME3	石器	剥離調整のある剥片(削器)・砥石	AE9N6	2層 黄色岩石粒まじり暗褐色土	A751		長6.6cm, 幅7.3cm, 厚1.7cm, 重96.3g		頁岩 使用は古代か
84	666	ME3	石器	一部磨製の石器	AN5E9		A782		長10.0cm, 幅5.5cm, 厚1.6cm, 重108.6g		粘板岩 面に細かな擦痕がみられ滑らか 両面から研いで刃を付けている
85	667	ME4	弥生	壺	下水7		745	249	口縁部1/4残存		
85	668	ME1	弥生	壺	S9E35	SB1		44	口縁部細片		
85	669	ME1	弥生	壺	S8E36		27		口縁部1/8残存		
85	670	ME7	弥生	壺	I3T	2層	116		口縁部細片		
85	671	ME1	弥生	壺	S5E37	2層			口縁部一部残存		
85	672	ME4	弥生	壺	E3	1層		7	口縁部細片		
85	673	ME3	弥生	壺	AS7E1	3層	72		胴部細片		
85	674	ME7	弥生	壺	I3T	SK44	柱穴	848	胴部細片		
85	675	ME2	弥生	壺	AS6E1	3層		92	底部1/3残存		
85	676	ME5	弥生	壺	G4		N264	333, 334, 353	口縁部から頸部1/2残存		
85	677	ME2	弥生	壺	AN5E5	2・3層	39		口縁部1/6残存		
85	678	ME4	弥生	壺	下水10	F-60～-65		283	口縁部細片		

表2 掲載出土遺物（17）

図版番号	年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	遺構の性格	接 合 関 係		残存の程度	用途等	備考
							取上番号	一括取上番号			
85	679	ME1	弥生	深鉢	S12E30電 柱と支柱の 間の西				口縁部一部残存		
85	680	ME4	弥生	深鉢	下水7		746		底部残存		
85	681	ME7	弥生	深鉢	I3T-K	攪乱	365		底部1/2残存		
85	682	ME7	弥生	深鉢	I3T-K2	2層	602		底部1/3残存		
85	683	ME4	弥生	深鉢	E1		C3285		口縁部1/6残存		
85	684	ME4	弥生	鉢	E1	2・3層	C1456, C1207		口縁部1/4残存		外面に文様あり
85	685	ME5	石器	石包丁	I2T	3層	N86		長4.2cm, 幅4.4cm, 厚0.6cm, 重118g 一部残存		半月形
85	686	ME2	石器	石包丁	AN3E9	3層 黒褐色土		139	長5.1cm, 幅6.8cm, 厚1.0cm, 重50.9g 1/2欠損		長方形 径 4mm穿孔
85	687	ME1	石器	石包丁	S7E37	2層			長4.8cm, 幅6.1cm, 厚0.5cm, 重23.4g 1/3残存		長方形
85	688	ME1	石器	石包丁	S6E37	2層 -30～-40			長3.4cm, 幅6.9cm, 厚0.5cm, 重16.9g 1/3残存		長方形

IV 今後の課題

1 遺構群の変遷過程

正倉院下層の建物群 正倉院の下層には、前身建物3～5(西ブロック)、鍛冶遺構1～4、前身建物6～10(東ブロック)があり、正倉院区画溝東端からG地区にかけては建物①～⑤がある。

これらの建物群のうち、互いに切り合い関係があり先後関係が明らかなもの、建物の方向の関連性、出土遺物の年代を勘案して、正倉院が造営され始める以前と以後の様相を見る。

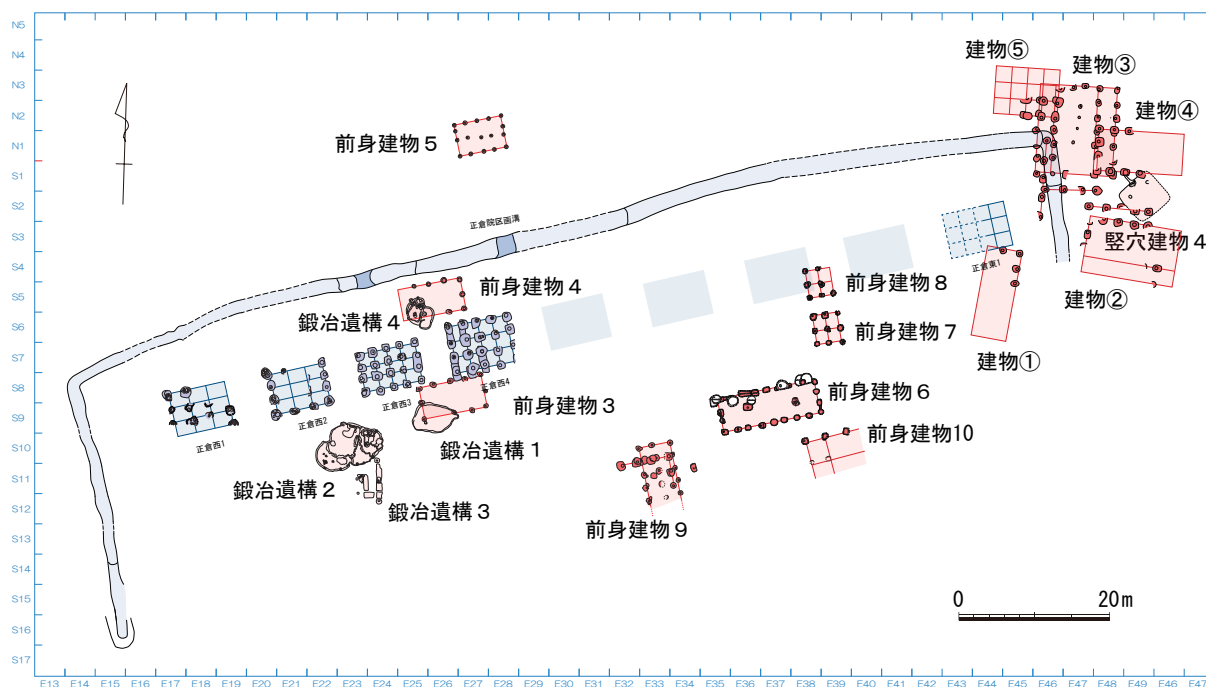


図86 正倉区域検出状況 (S=1/1,000)

正倉院下層 I 期(7世紀中葉) 西ブロックの建物群(前身建物3～5)の特徴は、柱穴が径60cm前後、柱痕跡も径30cm前後と小規模であることや、柱間が一定せず柱通りが悪いことが挙げられる。これら3棟は棟の方向を揃え、特に前身建物3と4は同規模で、南北に整然と配置されている。豪族居宅と評価できる建物群である。

堅穴建物は、郡庁区域の下層で検出された堅穴建物1～3と同規模、同時期とみられる。^{*1}

表3 正倉院下層建物一覧

建物	基礎構造	平面形式(間)	桁行×梁行(m)	面積(m ²)	柱間桁×梁(尺)	備考
前身建物3	掘立柱	4×2 側柱	8.3×4.1	34.0	7~8×7	桁行の柱間は不定
前身建物4	掘立柱	(4)×2 側柱	(8.3)×4.1	(34.0)	7~8×7	桁行の柱間は不定
前身建物5	掘立柱	4×3 側柱	6.2×4.1	25.4	2.5~7×4.5~6	柱間は不定、東柱あり
前身建物6	掘立柱	8×3 側柱	13.0×4.4	57.2	5.5×5	
前身建物7	掘立柱	2×2 総柱	3.9×3.3	12.9	7+6×5.5	
前身建物8	掘立柱	2×2 総柱	3.6×3.3	11.9	6×5.5	
前身建物9	掘立柱	(4)×2 総柱?	(7.1)×4.1	(29.1)	6×7	北妻のみ柱間6尺+8尺
前身建物10	掘立柱	(2)×(1)?	(5.5)×(3.0)	(16.5)	9+9.5×10	

*1 関市教育委員会 2012『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡 I - 郡庁区域 -』II 2C b.「堅穴建物1～3」pp.93-97

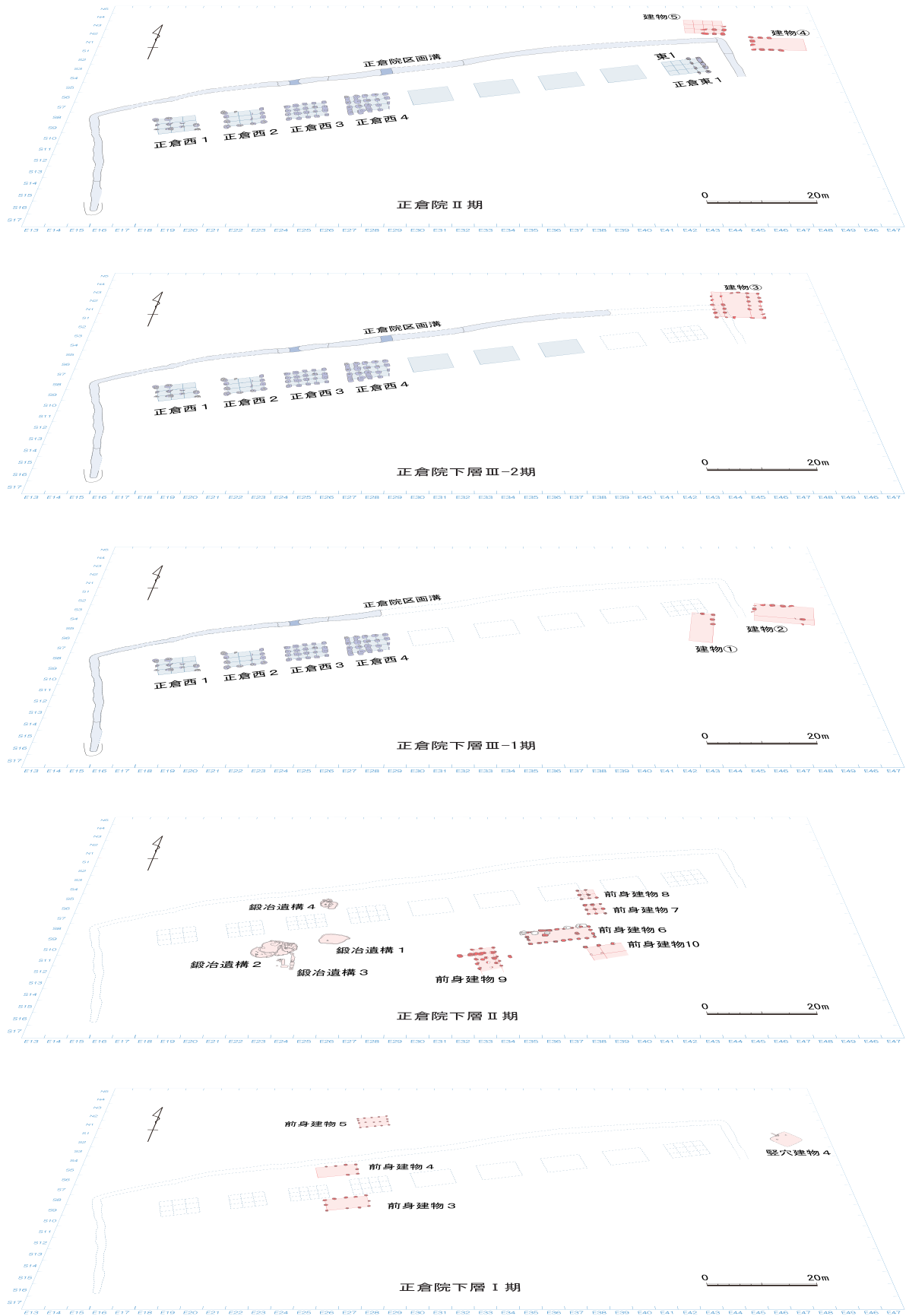


図87 正倉院下層建物群変遷案 (S≒1/1,000)

正倉院下層Ⅱ期(7世紀後葉) 前身建物3～5(西ブロック)は、鍛冶遺構1～4に場所を譲る。鍛冶遺構1～4は、この場所に集中することで互いに関連した作業を行っていたと思われ^{*1}、成品である鉄釘が出土していることから、「弥勒寺」造営に関わる鉄資材確保のための施設と考えられる。一方、前身建物3～5(西ブロック)が担っていた機能は、前身建物6～10(東ブロック)へ移行したと思われる。

東ブロックの建物群(前身建物6～10)の特徴は、西ブロックの建物群に比べて、全体として規模が大きくなることが挙げられる。柱痕跡の径は西ブロックの建物群と同程度であるが、柱穴の規模が大きくなる。柱間は完数尺で設計された等間となり、梁方向の柱が通る。また、建物相互の関係は、前身建物6(東西棟)が正殿、前身建物9(南北棟)が脇殿のような配置を採り、それらの背後には小規模な倉庫である前身建物7と8が南北に並んで配されている。その計画性から、より官衙的な要素を看取することができ、豪族の居宅であると同時に、役所的な機能を併せ持つ建物群であったと考えられる。その機能とは、主に寺院造営を契機とする郡衙整備に関わる一連の工事の監理である。

正倉院下層Ⅲ-1, 2期(7世紀後葉～8世紀前葉 正倉院Ⅰ期)^{*2} 8世紀に入ると西から順に正倉の造営が進んだと考えられ、鍛冶遺構1～4がまず正倉に場所を譲り、次に東ブロックの建物群も正倉に場所を譲ることになる。東ブロックに代わるG地区の建物群は、7世紀後葉から建ち始め、数時期の変遷を経て、最終的に正倉院区画溝の東辺が回る頃には廃絶させたと考えられる。建物①～⑤は、建物①・② → 建物③ → 建物④・⑤と変遷する。

G地区に展開する建物群(建物①～⑤)の特徴は、柱穴が隅丸方形の整った掘方となり、柱痕跡も40cm前後と太くなる。建物相互の関係は、東ブロックで見られたように、建物②(東西棟)が正殿、建物①(南北棟)が脇殿のような配置を採ることや、「正殿」に擬せられる建物②には、南面に廂が付く。次の建物③には両面に廂が備わり、段階的に格式を高めている(「豪族の居宅」から「郡司の館」へ)。建物②と③は、柱間構成は異なるものの、身舎の規模は同じであり、妻側を3間に分ける特徴も一致している^{*3}。しかし、建物③の廂は東側が広く、正面を東に切り替えている。このことは、これより東側に展開するA・F地区の建物群(建物⑥～⑮)と無関係ではないと思われる。○数字で示した建物群は、「郡司の館」の諸施設と評価できる。

正倉院Ⅱ期 G地区の建物群は、「ことごとく正倉院区画溝に切られ、それまでには廃絶させていた」と大雑把に説明してきたが、建物④と⑤に関して言えば、厳密には正倉院区画溝に切られていない。正倉院の造営計画に順い、予め溝を避ける配置が採られた可能性もある。

正倉院下層に見られる建物群の展開とその変遷は、豪族の「居宅」が家政機関としての機能を充実させる過程で建物の荘厳化が進み、やがて「郡司の館」へと変容を遂げたことを跡付けている。これらの諸施設は、最終的には郡衙の施設としての「館・厨院」に収斂すると考えられる。

*1 関市教育委員会 2014『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡Ⅱ－正倉区域－』Ⅲ3「鍛冶遺構出土鉄滓」p.120

*2 前掲*1 IV1「遺構群の変遷過程」pp.128-131

*3 建物の規格が存在したことが予測される。このことから建物⑨も建物②・③と同じ桁行6間を想定した。

*4 関市教育委員会 1999『美濃国武義郡衙 弥勒寺東遺跡－第1～5次発掘調査概要－』Ⅲ4「館・厨区域」p.64

2 館・厨院の推定

館・厨院 正倉区域の下層に展開する遺構群は、「弥勒寺」や正倉院の造営と密接に関連することを見てきた。またその変遷は、地方豪族のムゲツ氏が壬申の乱を経て郡領氏族となり、律令官人へと変容を遂げていく過程に他ならない。最後に残った課題が、これらの行き着く先である館院、厨院を詳らかにすることである。

これまで、遺跡東端に当たるA・G・F地区の漠然とした範囲を仮に「館・厨区域」と呼んできた。結論としては、依然として発掘調査に拠らなければ、これ以上踏み込んだ議論は進まないことを明記せざるを得ない。しかし、僅かな情報を繋いで取って予想を示し、今後の調査の課題としたい。

G4区の溝①、下水2区の溝②、下水5・6区の溝③、及び第10トレンチ2区を横切る溝が同一の溝であるとすれば、右図(図88)に示した区画が浮かび上がる。この区画が成立するのは、8世紀(奈良時代)の後半以降である。この区域に展開する建物①～⑮は、この頃全て姿を消していたと思われる。この区画内に唯一認められた遺構は、南東隅で検出された井戸状遺構のみである。

溝①の西端で北へ屈曲するこの区画の南西の角と、溝②・③の延長が交わる南東の角との距離は74mを測り、尺に直すとちょうど250尺である。250尺四方の区画を想定する場合、その北半部は現在では池尻山麓に埋もれていることになる。第9・10トレンチでは、山側からの3mに及ぶ堆積を確認しており、古代以降において大きな地形の変化があったことを物語る。今後のこの区域の調査は困難を伴うことが予想される。

また、1つの区画に館と厨の両方が収まるのかという疑問も残る。郡衙の全ての施設が凝集し、地形的に限られた範囲に機能的に構成されている弥勒寺東遺跡のあり方からすれば、これらの施設が占めた空間はこの区域に絞られてきている。しかし、段丘が狭く、250尺の区画をここで取れば、この他にもう1つ別の区画は想定し難い。武義郡衙の館と厨は、2つの機能を合わせて院を構成していたのではないかという仮説が一方では成り立つ。

表4 館・厨区域建物一覧

建 物	基礎構造	平面形式(間)	桁行×梁行(m)	面積(m ²)	柱間桁×梁(尺)	備考
建物①	掘立柱	(2)×(1)側柱	(4.1)×(2.4)	(9.8)	7×8	南北棟
建物②	掘立柱	6×3 側柱	11.6×5.3	61.5	6.5×6.5+6.5+5	東西棟
		南面廂	11.6×7.6	88.2	7.5	南面廂
建物③	掘立柱	6×3 側柱	11.6×5.3	61.5	6.5×6	東向き
		東面廂+西面廂	11.6×9.9	114.8	8.5+7	両面廂
建物④	掘立柱	(3)×3 側柱	(5.8)×5.3	(30.7)	6.5×6	東西棟
建物⑤	掘立柱	(2)×(2)総柱?	(4.1)×(4.1)	(16.8)	7×7	東西不明、「田」の字形?
建物⑥	掘立柱	4×2 側柱	9.5×5.3	50.4	8×9	南北棟
建物⑦	掘立柱	(2)×(1)側柱	(4.1)×(2.4)	(9.8)	7×8	東西不明
建物⑧	掘立柱	3×2 側柱	5.3×3.9	20.7	6×6.5	南北棟
建物⑨	掘立柱	(5)×3 側柱	(8.9)×5.3	(47.2)	6×5+6+7	東西棟
建物⑩	掘立柱	3×(1)側柱	6.2×(2.1)	(13.0)	7×7	南北棟
建物⑪	掘立柱	2×1四脚門	5.0×3.0	15.0	西脚9+10+東脚8	東向き
建物⑫	掘立柱	2×1 杖舎	4.0×2.1	8.4	6.5+7×7	東西棟
建物⑬	掘立柱	(2)×(2)側柱	(3.0)×(4.1)	(12.3)	5×7	東西不明
建物⑭	掘立柱	3×2 側柱	4.4×3.6	15.8	6+4+5×6	東西棟
建物⑮	掘立柱	(2)×(1)側柱	(3.0)×(2.4)	(7.2)	5×8	東西棟



図88 館・厨院の推定 (S=1/800)

弥勒寺官衙遺跡群の地域における政治、経済、文化の中心的な役割が徐々にではあるが明確になってきた。また、都の政策が直接的に伝わったことが推測され、律令制の体现者たろうとしたムゲツ氏の姿勢を遺跡群の空間構成から読み取ることができる。しかし、地域史の観点からは、成立に至る過程や変遷を周辺の遺跡の動向と有機的に結びつけて理解していくことが必要である。池尻大塚古墳の調査もその取り組みの1つであるが、今後はそうした視点を持ち、紋切り型の説明で事足りりとせず、また偏った解釈に陥ることのないよう、多様な立場から検討を加えていく努力を怠ってはならない。

また、「遺跡を現代に位置づけ、将来にわたってどのように活かしていくのか」という問いへの答えは、遺跡を探求することだけからは導き出せない側面もある。時代に即した整備、活用が求められるが、遺跡の本質的な価値の追求とその顕在化が前提となることに変わりない。この葛藤からの脱出は、やはり今後の調査、研究を通して克服していかなければならない最大の課題であると考えている。

弥勒寺跡の最初の発掘調査が行われた1953年(昭和28)から、既に半世紀以上の時が経過していることを思うとき、我々もまた、この遺跡が持つ歴史の一部であることを実感する。